日本タンゴ・アカデミー機関誌

TANGUEANDO EN JAPON

No. 29
2012

タンゲアンド・エン・ハポン

ÓRGANO OFICIAL DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN

TANGUEANDO EN JAPÓN

Número 29, enero de 2012

日本タンゴ・アカデミー　機関誌

タンゲアンド・エン・ハポン

第29号（2012年1月）

～あれから 50 年～

フランシスコ・カナロ来日 50 周年記念特集号

フランシスコ・カナロ楽団と
エルネスト・エレラ、エドゥアルド＆グローリア
（1961年12月）

日本タンゴ・アカデミー

●日本タンゴ・アカデミー　機関誌
ÓRGANO OFICIAL DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN

TANGUEANDO EN JAPÓN　第29回（2012年1月）

（タンゲアンド・エン・ハポン）

目　次

頁
会長挨拶 …… 4
日本タンゴ･アカデミー 2011年下期活動実績 …… 5
アカデミー行事アルバム …… 9
タンゴ・セミナーのプログラム・コメント　CLASE DE TANGO （タンゴ教室）
第７５回 「ＳＰで聴くタンゴ史を飾ったカナロの軌跡」
……コメンテーター：島﨑　長次郎 12
第７６ 「今年聴いたタンゴ」
……コメンテーター：吉村　俊司、丹羽　宏、脇田　冨水彦、齋藤　冨士郎 19
第18回「関西リンコン・デ・タンゴ」
レポート ……山本　雅生 23
プログラム …… 27
第9回「中部リンコン・デ・タンゴ
レポート ……丹羽　宏 30
プログラム …… 32
NTA主催第1回ミロンガパーティの報告……宮本　政樹 35
＜フランシスコ・カナロ来日50周年記念特集企画＞
半世紀前の小さな記憶 ……高場　将美 39
アルゼンチン共和国フロンディッシ大統領の新宿コマ劇場とテレビを通じての挨拶 … 42
フランシスコ・カナロ来日公演の全貌 ……島﨑　長次郎 43
グローリア＆エドゥアルド来日50年の功績 ……三浦　幸三 53
フランシスコ・カナロー行を羽田で出迎え、見送った想い出 ……脇田　冨水彦 57
パリとニューヨークのカナロ ……小林　謙一 59
フランシスコ・カナロ楽団のパケット構造演奏スタイル ……齋藤　冨士郎 63
＜通常企画＞
神戸発・上田・山本タンゴ写真館（８）
「カルロス・ガルシーアとタンゴ・オール・スターズ」……　上田　登・山本　雅生 68
〈愛好家インタビュー〉藤村　省介さん ……聞き手…島﨑　長次郎 73
1970年代タンゴ探訪　その5　ラウル・ラビエ ……吉村　俊司 78
タンゴ　もう一つの祖国　欧州で活躍したタンゴの使節たち（補足Ⅱ）……芝野　史郎 83
「オルケスタ・ティピカの歴史」（９）……ルイス・アドルフォ・シエラ
（翻訳）弓田　綾子 93
ドクトル・バンドネオンのタンゴ・タンゴ人生 ……舳松　伸雄 103
日本のタンゴ楽団（６） ……蟹江　丈夫 111
全国リレー随想（９）「タンゴ一筋　ただし寄り道　回り道」……加藤　光夫 117
ＣＤ評：俺のピアソラ／小松亮太……山本　幸洋 124
「俺のピアソラ」について ……小松　亮太 127
オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ第50回コンサートを聴いて……大澤　寛 129
編集後記 …… 132

ÓRGANO OFICIAL DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN

TANGUEANDO EN JAPÓN

Número 29, enero de 2012

Índice

SALUDOS DEL PRESIDENTE DE LA ACADEMIA 4
ACTIVIDADES DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN (De julio a diciembre de 2011) 5
ÁLBUM DE LAS ACTIVIDADES DE LA ACADEMIA 9
COMENTARIO SOBRE "CLASE DE TANGO" :
Vol.75 TRAYECTORIA DE FRANCISCO CANARO EN LA HISTORIA DEL TANGO CON SUS DISCOS DE PASTA
..... COMENTARISTA : CHOJIRO SHIMAZAKI 12
Vol.76 TEMAS IMPRESIONANTES DE 2011
..... COMENTARISTAS : SHUNJI YOSHIMURA, HIROSHI NIWA, FUMIHIKO WAQUITA, FUJIO SAITO 19
"RINCÓN DE TANGO" EN EL OESTE" No.18
REPORTAJE ..... MASAO YAMAMOTO 23
PROGRAMAS 27
"RINCÓN DE TANGO" EN LA REGIÓN CENTRAL No.9
REPORTAJE ..... HIROSHI NIWA 30
PROGRAMAS 32
PRIMERA FIESTA EN LA MILONGA ORGANIZADA POR NTA ..... MASAKI MIYAMOTO 35
ARTÍCULOS ESPECIALES CONMEMORATIVOS : 50 AÑOS DE LA VISITA DE FRANCISCO CANARO AL JAPÓN
PEQUEÑAS MEMORIAS DESPUÉS DE MEDIO SIGLO ..... MASAMI TAKABA 39
SALUDOS DEL PRESIDENTE ARTURO FRONDIZI EN EL TEATRO KOMA Y EN EL PROGRAMA TELEVISOIVO 42
EL TOUR JAPONÉS DE LA ORQUESTA DE FRANCISCO CANARO ..... CHOJIRO SHIMAZAKI 43
50 AÑOS DE GLORIA Y EDUARDO DESDE SU PRIMERA VISITA ..... KOZO MIURA 53
RECUERDOS DEL MAESTRO F.CANARO Y SUS MÚSICOS, ENCUENTRO Y DESPEDIDA EN EL AEROPUERTO DE HANEDA
..... FUMIHIKO WAQUITA 57
CANARO EN PARÍS Y EN NUEVA YORK ..... KENICHI KOBAYASHI 59
ESTILOS EMPAQUETADOS DE FRANCISCO CANARO ..... FUJIO SAITO 63
DESDE KOBE : LAS FOTOS DE UEDA Y YAMAMOTO (8)
CARLOS GARCÍA Y SUS "TANGO ALLSTARS" ..... MASAO YAMAMOTO Y NOBORU UEDA 68
ENTREVISTA CON LOS AFIOCIONADOS : Sr. SHOSUKE FUJIMURA ..... CHOJIRO SHIMAZAKI 73
REVISITANDO EL TANGO EN LOS 70 (5) RAÚL LAVIÉ ..... SHUNJI YOSHIMURA 78
EMBAJADORES DEL TANGO EN EUROPA (Apéndice II) ..... FUMIO SHIBANO 83
HISTORIA DE LA ORQUESTA TÍPICA (9) ..... Dr.LUIS ADOLFO SIERRA
TRADUCUCCIÓN DE AYAKO YUMITA 93
CON TANGO Y MÁS TANGO : LA VIDA DE "DOCTOR TANGO" ..... NOBUO HENOMATSU 103
ORQUESTAS TIPÍCAS JAPONESAS (6) ..... TAKEO KANIE 111
CADENA DE ENSAYOS (9) DIRECTO AL TANGO, PERO RONDANDO EN EL CAMINO ..... MITSUO KATO 117
CRÍTICA SOBRE EL DISCO "MI PIAZZOLLA" POR RYOTA KOMATSU ..... TAKAHIRO YAMAMOTO 124
SOBRE EL ÁLBUM "MI PIAZZOLLA" ..... RYOTA KOMATSU 127
ORQUESTA DE TANGO WASEDA —— EI QUINCUAGÉSIMO CONCIERTO ..... HIROSHI OHSAWA 129
ANUNCIOS Y NOTAS DE LA REDACCIÓN 132

2012年度のスタートに当たって ――――――

さらに広めたい“タンゴの喜びと感動”

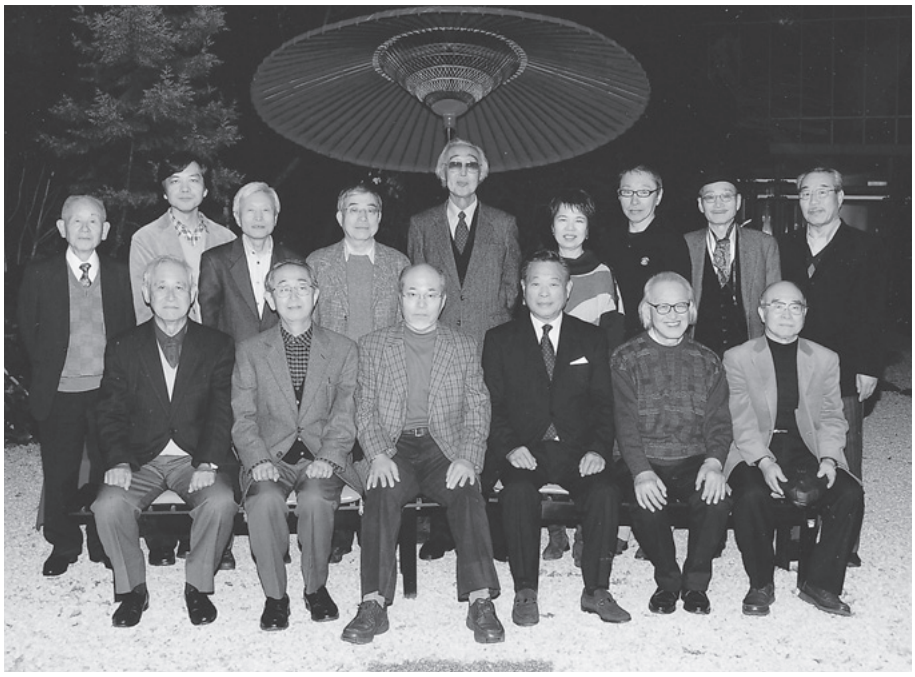
新年おめでとうございます。昨年は、東北の地震による複合的な大災害で、日本全国が未曾有の痛みと悲しみの年となりましたが、それから早くも１年になろうとしています。今年はこの苦難を乗り越え、是非とも明るく希望に燃える年にしたいものです。

当日本タンゴ・アカデミーも、お陰さまで満１５年目を迎えることができ、会員数も順調に推移し、あと数名で念願の２００名の大台に乗るところまでに参りました。これもひとえに会員の皆様のご理解とご協力の賜物と感謝しているところです。このうえは、さらに力をあわせ一人でも多くの方々に、“タンゴの喜びと感動”を広げ、タンゴのなお一層の発展を図りたいと、役員一同も決意を新たにしているところでありますので、ひきつづきよろしくお願い申し上げます。

（会長　島﨑　長次郎）

＜２０１２年度　日本タンゴ・アカデミー役員及び実行委員＞

西村秀人氏



山本雅生氏

山本幸洋氏

後列左から：吉澤 義郎氏、鈴木 一哉氏、佐藤　進氏、吉田 義之氏、大澤　寛氏、弓田 綾子氏
福川 靖彦氏、脇田 冨水彦氏、西川　薫氏
前列左から：齋藤 冨士郎氏、杉山 滋一氏、飯塚 久夫氏、島﨑 長次郎氏、高場 将美氏、丹羽　宏氏

日本タンゴ・アカデミー　2011年下期活動実績

● タンゴ・セミナー（CLASE DE TANGO）

◎ 第75回セミナー：11月6日（日）午後1時30分から「東医健保会館」において、今回はフランシスコ・カナロ来日50周年記念ということで、島﨑長次郎ＮＴＡ会長ご自身による「ＳＰで聴く――タンゴ史を飾ったカナロの軌跡」と題したお話がありました。音源はすべて島﨑会長が秘蔵されるＳＰ盤で、それに２編の映像を挟んで、フランシスコ・カナロの1910年代から1930年代までの足跡をたどる大変興味深く、また勉強になるお話でした。参加者は会員43名、ビジター２名の計45名でした。

◎ 第76回セミナー：12月11日（日）午後１時30分から「東医健保会館」において、年末恒例の「今年聴いたタンゴ」というタイトルで、吉村俊司氏、丹羽　宏氏、脇田冨水彦氏、齋藤冨士郎氏の方々が今年聴いたタンゴの中から注目すべきものと思われるものを、ＣＤ音源のみならずＬＰ音源や映像も含めての紹介されました。出席者は43名でした。

● NTA　第１回ミロンガパーティー

10月９日（日）、NTA主催による第1回ミロンガパーティーが東京原宿の「茶々苑」で午後４時から７時まで、開催されました。目玉は古橋ユキ=タンゴクアルテート及び平田耕治=CAMBATANGOの楽団演奏とHiroshi ＆ Kyoko及びGYU ＆ 夏美れいの２組のダンスペアによるダンスデモで、会場は大いに盛り上がりました。参加者は160余名と予想を大幅に上回り、道路に立って観る人たちも少なくありませんでした。初めての試みなので会場の狭さや音響効果の問題など将来に向けての検討課題も残りました。

● 東京リンコン・デ・タンゴ（会場：東京原宿「原宿クリスティー）

◎ ７月12日（火）：猛暑の中でしたが参加者は会員59名、ビジター５名、併せて64名と大盛況でした。今回のコメンテーターは大澤　寛さんのお一人で「今夜はワルツとミロンガで」というタイトルでいつもながらの簡潔ながら要点を踏まえたお話でした。それに続き、今回はタンゴワセダＯＢの清川博貴さん（bn）、谷川虎太郎さん（vn）、佐藤　梓さん（cb）のトリオによる生演奏と特別参加の平田耕治さん（bn）と鈴木恵子さん（vn）による２重奏があり、会場は興奮に包まれました。

◎ ９月27日（火）：いつも司会役で今回はコメンテーターを担当する予定であった福川靖彦さんのご都合が急に悪くなったために、司会役は大澤　寛さん、コメンテーターの代役は齋藤冨士郎さんに急遽変更されました。齋藤さんは「今宵はO.T.V.をじっくり聴こう」というタイトルでO.T.V.の最初期から最後期までの演奏を、もう一人のコメンテーターである西川　薫さんは「昭和タンゴを偲んで」というタイトルで昭和の日本のタンゴ楽団の演奏を紹介されました。また遠く札幌から駆け付けられた岩垂　司さんもラウル・ハウレーナとパブロ・アスランの最近の録音を紹介されました。最後にバンドネオン奏者としてご活躍の仁詩（ひとし）さんがアンコールを含めて４曲名演を披露されました。参加者は会員53名に仁詩さんを加えて合計54名でした。

◎ 11月15日（火）：2011年最後の東京リンコンで、コメンテーターは福川靖彦さんと水野　中（ひとし）さんでした。司会役との兼務の福川さんは「ダリエンソの歌手たち」というタイトルで

５人の歌手を紹介されました。それに続いて四日市市から駆け付けられた吉岡達郎さんが若き日の小松亮太さん（当時19歳）と父上の小松　勝さんによるバンドネオンとギターの２重奏の貴重な録音を３曲紹介されました。３人目の水野さんは「聴く機会の少ない楽団」というタイトルで我々が普段あまり聴かない楽団の演奏を紹介されました。最後に特別出演の歌手のロベルト杉浦さんの歌と仁詩さんのバンドネオン演奏がありました。アンコールのアンコールも含めて６曲を歌ったロベルト杉浦さんの文字通り会場に響き渡る歌声と、それに負けじと熱演する仁詩さんのバンドネオンに、出席者全員が圧倒されました。出席者は56名でした。

● 関西リンコン・デ・タンゴ

第18回関西リンコン・デ・タンゴ は2011年11月６日、13時より神戸市三宮の例会場「サロン・ド・あいり」において開催されました。参加者は会員11名、非会員20名の合計31名でした。会は上田　登さんによるＤＶＤからの抜粋14曲からなる「セレクシオン・ナシオナル・デ・タンゴ」に始まり、鈴木忠昌さんによる「タンゴ名曲選」、井上　潤さんによる「インスピラシオン聴き比べ」、更に続いて麻場利華さんによる新入会員自己紹介も兼ねて姪御さんの麻場友姫胡さんがブエノスアイレスで録画した新譜ＤＶＤの映像から「酒場１９００」の紹介がありました。続いて麻場友姫胡さんがブエノスアイレスで製作した「カラオケ」を使っての美声を聴かせて下さいました。最後にＮＴＡ会計理事の杉山滋一さんから「華（はな）の1940年代逍遥」と題して1940年代前半の名流楽団による名曲・名演の紹介がありました。懇親会では「フランシスコ・カナロ楽団」来日記念放送の録音を聴きながら夕食と懇談を楽しみました。詳細は本号掲載の山本雅生さんのレポートをご参照ください。

● 中部リンコン・デ・タンゴ

第９回中部リンコン・デ・タンゴは2011年10月16日、13時より四日市市内のライブ・カフェ「フルハウス」において開催されました。参加者は会員９名、ビジター 20名の計29名でした。会は地元会員の島田由美子さんによる「ＬＰ音源全盛時代の国内タンゴ楽団」というテーマでのトークに始まり、それに続いて本部招聘コンサートとしてＮＴＡ役員の佐藤　進さんの「世界のタンゴ」というタイトルによる珍しいタンゴ楽団の演奏の紹介がありました。第３部は田中博澄さん(Bn)、斉藤幸枝さん（Vn)、西谷徳子さん（p）からなるトリオ“タンゴ・プラティーノ”の生演奏を皆で楽しみました。詳細は本号掲載の丹羽　宏さんのレポートをご参照ください。

● 機関誌「タンゲアンド・エン・ハポン」28号が7月に発行されました。

● 副機関誌「タンゴランディア」23号が 10月に発行されました。

● 会員動静

前号以降の新入会員（敬称略）：下澤　博巳（千葉県)、手島　泰子（千葉県）
今井　順子（東京都)、大橋　嶽夫（東京都)、陳　昌敬（東京都）再入会、
細田　満理（東京都)、ユリ・アスセナ（東京都)、石濱　洋（東村山市）
平田　耕治（川崎市)、松林　隆道（川崎市)、佐藤　利幸（横浜市）
藤木　立夫（横浜市)、多村　知子（横浜市)、河辺　功（三重県）
（一部の方々はTangolandia 2011秋号にも掲載済み）

退会者（敬称略）：泉谷　隆男、北岡　浩次、高橋　雄造、田中　三千彦、永井　頼安、
真島　泰子、峰　万里恵、水野　晃（死亡退会）

● 理事会・役員会

＊　７月１日（金）：定例の報告事項に続いて、今回は10月９日開催予定のミロンガパーティの実行計画の詳細について議論しました。

＊　９月20日（火）：今回の主要議題は10月９日開催のＮＴＡ主催ミロンガの参加申込者数の確認、実行計画の詰め、および役員の作業分担でした。その他の議題として11月６日のセミナーの計画とその後の予定、９月27日の東京リンコンの計画とその後の予定、機関誌編集状況の報告がありました。なお、９月20日現在での会員数は194名になったとの報告もありました。

＊　10月25日（火）：定例の報告事項に続いて、10月９日開催のＮＴＡ主催ミロンガの実施・会計報告と反省点についての議論がありました。多数の参加者に比して会場の狭さやサービスの行き届かない点が主たる反省事項でした。その他、次回東京リンコンと次回セミナーの計画、機関誌編集状況、会計報告などがありました。また従来２月の最終日曜日に設定されていたＮＴＡ全国会員懇親会は当日が東京マラソン開催日と重なり、混乱が予想されるために３月４日（日）に変更することが決まりました。

＊　12月11日（火）：定例の報告事項として会員入退会状況、入出金状況、セミナー及び東京、関西、中部リンコン・デ・タンゴの報告がありました。更に2012年３月４日のＮＴＡ全国懇親会に先立つセミナーの計画と次期役員人事について討議しました。

● 編集会議

＊　７月１日（金）：役員会に先立って編集会議を開き、機関誌の今後の編集企画について討議しました。今回は秋に発行されるタンゴランディア誌の企画が主要議題でした。

＊　９月20日（火）：役員会に先だって編集会議を開き、タンゴランディア2011年秋号とタンゴ・エン・ハポン29号の編集状況の報告と討議が行われました。

＊　10月25日（火）：役員会に先だって編集会議を開き、タンゴランディア2011年秋号の最終編集報告とタンゲアンド・エン・ハポン誌29号の編集進行状況の報告と討議が行われました

＊＊

── 記事訂正 ──

本誌28号の61頁のレコード・リストの中でPathé 6893（Mt.7850）の曲名がOerguitoになってるのは間違いで、正しくはPerquitoです。

また62頁のレコード・リストの中で歌手名でJosé Urguiniとあるのも間違いで、正しくはJosé Urquiriです。

更に64頁の楽団名のOrqueta Tzigone Dajos Bélaも間違いで正しくはOrquesta Tzigana Dajos Bélaです。

これは校正時の見落としによるものです。

＊＊

２０１２年度　日本タンゴ・アカデミー役員等人事

２０１１年末をもって任期満了となった役員について、先の役員会において協議の結果、次のとおり決定いたしましたのでお知らせいたします。

理　事　　会　長　島﨑長次郎　事業担当・出版総括担当　兼務
　　副会長　高場　将美　セミナー担当
　　副会長　飯塚　久夫　事務局・広報担当　兼務
　　杉山　滋一　会計担当
　　福川　靖彦　リンコン・デ・タンゴ担当
　　齋藤冨士郎　「タンゲアンド・エン・ハポン」編集長
　　大澤　寛　「タンゴランディア」編集長
　　＊弓田　綾子　事務局・編集・会員サービス担当　兼務
　　丹羽　宏　地域担当（中部）
　　西村　秀人　広報担当・地域担当　兼務
監　事　　佐藤　進　編集補佐　兼務
　　＊西川　薫　編集補佐　兼務

＊＝新任　なお理事の大橋英夫は都合により退任

実行委員

脇田冨永彦　名簿管理・行事案内　　吉田　義之　行事全般
山本　雅生　地域担当（関西）　　吉澤　義郎　行事記録
山本　幸洋　行事企画・若手振興　　鈴木　一哉　行事企画・若手振興

... 2012年度ＮＴＡ全国会員懇親会が開かれます...

日　時：３月４日（日）　午前10時30分開場
（東京マラソンとの重複を避けるために**開催日が例年とは異なっています。ご注意ください）**
会　場：「ホテル銀座ラフィナート」（旧京橋会館）
東京都中央区銀座 １－２６－１　　TEL：03-3561-0777
第１部：第77回セミナー（クラセ・デ・タンゴ）
テーマ：往年のタンゴ映画鑑賞セミナー
―「エドゥアルド・アローラスの生涯」（製作1950年）を観る ―
コメンテイター：高場　将美、飯塚　久夫
第２部：懇親パーティ（新年度役員紹介、会長挨拶、事業報告、決算・予算報告、懇親）
アトラクション：**オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ**

＜リンコン・デ・タンゴ特集＞

― リンコン・デ・タンゴ（2011年1月20日）―

飛び入り参加のバンドネオン奏者仁詩さんの演奏

会場には喫煙者コーナーもあります

― リンコン・デ・タンゴ（2011年3月15日）―

東日本大震災の影響で交通機関の運行が不安定の中で参加された24名の方々

島﨑会長とコメントする河内敏昭さん

― リンコン・デ・タンゴ（2011年5月24日）―

会員有志が持ち寄ったＬＰによる空クジなしの
チャリティ抽選会

会場風景

― リンコン・デ・タンゴ（2011年７月12日）―

熱演するタンゴワセダＯＢのトリオ（清川博貴さん（bn）、谷川虎太郎さん（vn）、佐藤梓さん（cb））

特別ゲストの平田耕治さんと
鈴木恵子さんによる2重奏

― リンコン・デ・タンゴ（2011年9月27日）―

札幌から駆け付けられた岩垂司さん

仁詩さんによるバンドネオン独奏

― リンコン・デ・タンゴ（2011年11月15日）―

文字通りの熱唱をするロベルト杉浦さん

ロベルト杉浦さんに負けじと熱演するバンドネオン伴奏の仁詩さん

タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

Clase de Tango

第75回タンゴ・セミナー　　2011年11月6日

―フランシスコ・カナロ来日50周年記念―
ＳＰで聴くタンゴ史を飾ったカナロの軌跡

コメンテイター：**島﨑 長次郎**

イントロ：El Llorón　フランシスコ・カナロ楽団＝Ａ．アレナス（歌）

◆　その作品～名作・集中の１０年（１９１４～　）

1．エル・チャムージョ（おしゃべり）　オルケスタ・ティピカ・ビクトル
　EL CHAMUYO　Vic.47435　（Ｇ：１９３０）

2．エル・インテルナード（インターン生）　フアン・ダリエンソ楽団
　EL INTERNADO　Vic.60-1967　（Ｇ：　１９５０）

3．マタサーノ（藪医者）　ロベルト･フィルポ４重奏団
　MATASANO　Ode.3510　（Ｇ：１９３７）

4．エル・ポジート（ひよこ）　カルロス・ディ・サルリ楽団
　EL POLLITO　日M.H. R-110（Ｇ：１９５１）

5．ノブレサ・デ・アラバル（場末の誇り）　フリオ・デ･カロ楽団
　NOBLEZA DE ARRABAL　Vic.79827　（Ｇ：１９２７）

6．映像 センティミエント・ガウチョ（ガウチョの嘆き）　O.バシル指揮カナロ楽団
　SENTIMIENTO GAUCHO　（１９９２来日公演録画）

7．映像 ラ・ウルティマ・コパ（最後の杯）　アルヘンティーノ・レデスマ（歌）
　LA ÚLTMA COPA　伴奏　〃　〃　（　〃　〃　）

◆　その演奏～名演・続出の１０年（ＴＬ９２４～　）

１．カスカベリートCASCABELITO（J.Bohr）　※旧式録音（ラッパ吹込）
DNO 6969（Ｇ：　１９２４）

２．グローリア（栄光～愛の喜び）GLORIA（H. CANARO）
DNO 4266（Ｇ：２７／２）

３．アルマ・タンゲーラ（タンゴの心）ALMA TANGUERA（M.Ricarse）
歌＝Ａ．イルスタ　DNO 4303（Ｇ：２７／５）

４．パリのカナロ　CANARO EN PARÍS（Caldarella＝Scarpino）
DNO 4299（Ｇ:　２７／５）

５．ソーロ・グリース（銀狐）ZORRO GRIS（R. Tuegols）
DNO 4364（Ｇ：２７／８）

６．ビエホ・シエゴ（盲目の老人）VIEJO CIEGO（Castillo=Piana）歌＝チャルロ
DNO 4415（Ｇ：２８／３）

７．できるならついておいでSEGUIME SI PODÉS（Scarpino-Caldarella）
DNO 4463（Ｇ：２８／７）

８，チ　ケ（気取屋）CHIQUÉ（R.L.Brignolo）　＜serie sinfónica>
DNO 4597（Ｇ．２９／９）

◆　華麗なる展開～音楽劇，全盛の１０年（１９３２～　）

１．中心街の若者たち　LA MUCHACHADA DEL CENTRO（F.Canaro･I.Pelay）
ラファエル・カナロ楽団＝Ｒ．サンデル（歌）　仏Col. DF 2025（Ｇ：１９３３）

２．テ・キエロ（君を愛す）TE QUIERO（F.Canaro）
アダ・ファルコン（歌）＝フランシスコ・カナロ楽団　日Col. S 32（Ｇ：１９３２）

３．虎のミジャンEL TIGRE MILLÁN（R.Canaro）
フランシスコ・カナロ楽団＝Ｅ,ファマ（歌）　仏Ode. 250743（7689）（Ｇ：１９３４）

４．ブエノスアイレスの影法師（M）SILUETA PORTEÑA（Cuccaro-D'Aniello-Noli）
フランシスコ・カナロ楽団＝R.マイダ（歌）　Ode. 4995（Ｇ．１９３６）

５．フェリシア〈女性の名前〉FELICIA（E.Saborido）
ピリンチョ５重奏団　Ode. 55594　（Ｇ：１９５２）

６．さらば草原よ　ADIÓS PAMPA MÍA（Canaro-Mores-Pelay）
フランシスコ・カナロ楽団＝Ａ．アレナス（歌）　Ode. 55563　（Ｇ：１９５１）

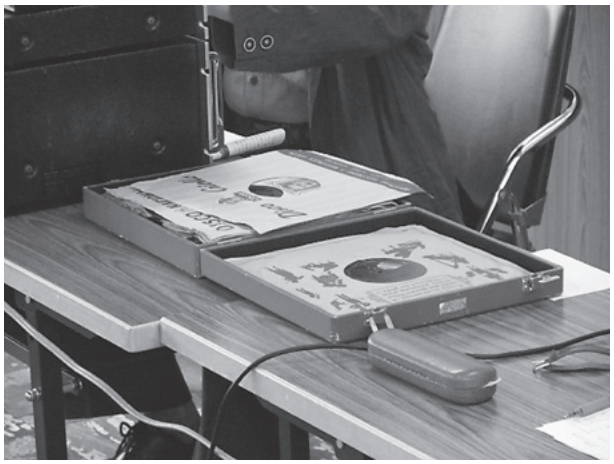
７．エル・アコモード　EL ACOMODO（E. Donato）
フランシスコ・カナロ楽団　Ode. 4863　（Ｇ：１９３３）

フィナル：La Cumparsita　フランシスコ・カナロ楽団〈serie sinfónica〉　（Ｇ：１９３３）

《関連～カナロ４兄弟の作品》　＊＝来日，＊1＝1954　＊2＝1965

１．ラファエル・カナロ作曲	ピスピレータ（素敵な娘）PIZPIRETA	
（1890~1972）Cb. Gu.	～フランシスコ・カナロ楽回	（G : 1927）
２．フアン・カナロ作曲　＊1	甘きものをAHÍ VA EL DULCE	
（1892~1977）Bn.	～カナロ兄弟６重奏団（Juan y Mario）	（G : 1953）
３．ウンベルト・カナロ作曲	アルフレド＜人名＞ALFREDO	
（1896~1952）Pf.	～ドン・パンチョ５重奏団	（G : 1938）
４．マリオ・カナロ作曲　＊2	今ひとたびのQUIERO VERTE UNA VEZ MÁS	
（1903~1974）Vi. Bn. Cb	～ロドルフオ・ビアジ楽団	（G：1940）

熱弁を振う島﨑会長



島﨑会長秘蔵のＳＰ盤

会場風景

＜当日配布資料より＞

Ｃｌａｓｅ ｄｅ Ｔａｎｇｏ（タンゴ・セミナー）

―― *フランシスコ・カナロ来日５０周年記念* ――

ＳＰで聴く ――――

タンゴ史を飾ったカナロの軌跡

♫ と き　２０１１,１１．６(日)

♫ ところ　東医健保会館（信濃町）

♫ とーく　島 﨑 長 次 郎

Orquesta Típica Sinfónica Francisco Canaro

主　催　日本タンゴ・アカデミー

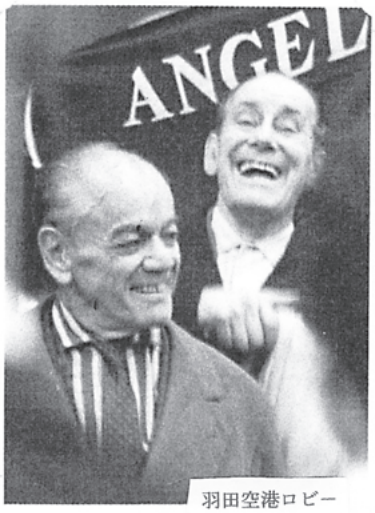
カナロ・エン・ハポン

＜日本のカナロ＞

CANARO EN JAPON　　1961

司会：高橋忠雄

コマ劇場の演奏風景



羽田空港ロビー

〔*フランシスコ・カナロの横顔*〕　作曲・指揮・バイオリン

１８８８年11月２６日ウルグアイのサン・ホセ・デ・マジョに生まれ、幼時にブエノスアイレスに移住。貧しい少年時代に苦心してバイオリンを習得、１９０６年にタンゴ界に入り、その直後からメキメキと頭角を現し、数多の作曲と演奏活動で注目の存在になる。

１９２２年にオデオンとの専属契約を果たし、生涯にわたり膨大なレコードを残す。

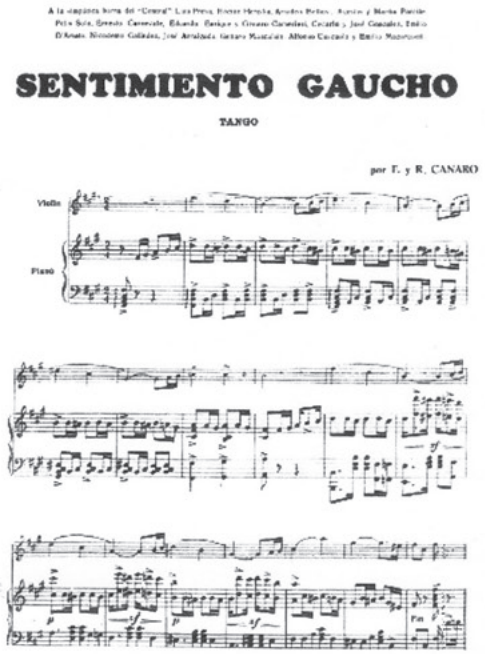
１９２５年のパリ公演をはじめ海外公演も多く、１９６１年には約１ケ月にわたる日本公演を展開してファンの絶賛を浴びた。その他、数々の音楽劇を上演するほか、著作権協会(SADIC)の初代会長の要職を勤めるなど、タンゴの普及と発展にとって前人未到ともいうべき業績を残したことから、“生けるタンゴ史”とか“タンゴの王様”とたたえられた。

１９６４年１２月１４日、自らが設立した団体「COMAR（アルゼンチン音楽組合）」の事務所で突然倒れ、波乱と栄光に彩られた７６年の生涯を静かに閉じた。

フランシスコ・カナロ

フランシスコ・カナロ
その作品とレコード

Disco Nacional
Odeon



SENTIMIENTO GAUCHO

TANGO

por F. y R. CANARO

Violín

Piano

タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

Clase de Tango

第76回タンゴ・セミナー　　2011年12月11日

今年聴いたタンゴ

コメンテイター：吉村 俊司

1．**La Rayuela（P. Ziegler）**
Pablo Ziegler Quartet / Tango meets Jazz　（Kind of Blue, 10017）

2．**Viejo Smocking（G. Barbieri – C. Flores）**
Pablo Aslan / Tango Grill　（Sound Brush, RR 955）

3．**Organito de la tarde　（C. Castillo – J. Castillo）**
Trío Central / Falsa Alarma　（EPSA, 1266-02）

4．**Canción de ausencia（R. Pansera– R. Lambertucci）**
Cuarteto de Julio Coviello / Catorce　（レーベル、番号なし）

5．**Fruta amarga（H. Gutiérrez – H. Manzi）**
La Chicana / Revolución o Picnic　（De Ferrari, CH005）

6．**花咲くオレンジの木（V. Expósito – H. Expósito）**
あがた森魚 / 誰もがエリカを愛してる　（ディスクユニオン / Qpora Purple Hz, QPHZ002）

7．**Recuerdo（O. Pugliese）**
Boquitas Pintadas / Tango　（レーベル、番号なし）

コメンテイター：丹羽 宏

1．**TE VAS MILONGA 君去り行くミロンガ（Abel Fleury）／エル・フエジェ**
（日2011）NMSW-0003

2．**RECORDANDO A SALGÁN サルガンを想い出しながら（Georges Cros）／**
クアッツォール・タンゴ　（仏1998）Street91-10121

3．**BANDONEÓN〈SUITE TROILEANA〉バンドネオン〈トロイロ組曲〉（Ástor Piazzolla）**
／フリードリヒ・リプスとタンゴ・ピアソラータ　（露1997）TRITON、DMCC-26011

4．**TONGO 4 トンゴ・クアトロ（Diego Schissi）／ディエゴ・スキッシ・キンテート**
（亜2010）UNTREF SONORO、UNTREFON-5

5．**TANGUITO DEL SUR 南からのタンギート（Esteban Morgado）／**
エステバン・モルガド・クアルテート　（亜2007）“Milongueros” Disco privado

6．**TACONEANDO 靴音高く（Pedro Maffia）／**
ミゲル・ニヘンソンと「クアルテート・ア・プーロ・タンゴ」　（亜1969）MAGENTA-5039

コメンテイター：脇田 冨水彦

曲　名
演奏者　（会場）　収録日

1．**Viento sur**
Gustavo Braga Tango trío

2．**El día que me quieras**
中川美亜（ct）（内幸町ホール）　2011/6/16

3．**Yo soy María**
ユリアスセナ　（池之端”ＱＵＩ”）　2011/6/10

4．**Mi noche triste**
古橋順越　（銀座奥野ビル）　2011/4/28

５．**El adiós**
高橋トク子　（十字屋ホール）　2011/10/29

６．**Buenos Aires**
昌木悠子　（すみだトリフォニーホール）　2011/4/24

７．**Meta fierro**
PAMPA　（すみだトリフォニーホール）　2011/4/24

コメンテイター：齋藤 冨士郎

１．**TRISTEZA CRIOLLA -vals-（I.Corsini – J. De Charras）**
歌：I. Corsini ＋ギター伴奏
（クリオージョの悲しみ）　EMI 50999　6404982 3（G. 1946）

２．**DISONANTE（耳障りな）（J. Plaza）**
演奏：Bruschini – Ventrice Cuarteto　Independiente（G.?）

３．**EL CIRUJA（眉ひろい）（E. De La Cruz – F. Marino）**
バンドネオン独奏：J. J. Mosalini　ACQUA AQ 295 CD2（G.1961）

４．**MALENA（マレーナ）（H. Manzi – L. Demare）**
歌：S. Rinaldi＋バンドネオン：L. Federico　EPSA 1267-02（G. 2009-2010）

５．**A OSCURAS（暗がりに向かって）（A. Sureda）**
演奏：Orq. Típ. Juan Maglio（Pacho）　CTA-728（G.1929）

６．**ELEGANTE PAPIRUSA（小粋な美人）（T. Roccatagliata）**
演奏：Orq. Típ. Osvaldo Fresedo　CTA-282（G. 1922）

― コメンテイターの方々 ―

吉村　俊司氏

丹羽　宏氏

脇田　冨水彦氏

齋藤　冨士郎氏

会場風景

第18回 関西リンコン・デ・タンゴ・レポート

— 山本 雅生 —

去る２０１１/１１/６（日）神戸三宮の「サロン・ド・あいり」に於いて第１８回関西リンコン・デ・タンゴの集いを開催致しました。今回はＮＴＡ会員の出席が東京から出張をして下さった杉山さんを含めて１１名、非会員のお客様が２０名の合計３１名でした。何しろ関西地方では、滋賀・京都・大阪・兵庫・和歌山に岡山・四国の香川まで含めても、総勢２３名と少数なものですので、前に出てお話しをして頂ける方にも限りが有り、プログラムの編成でも何処か「マンネリ」に陥る可能性が高いのでは？と危惧をしている処です。そんな中、前回の舳松さんに続き、今回はアストロリコの麻場さんが新入会員自己紹介と云う事で、出て下さって一抹の新風を入れて下さって喜んでいます。

第１部　1）の「映像で楽しむタンゴ」では上田さんの提供に依る「セレクシオン・ナシオナル・デ・タンゴ」と題して２００５年に発売をされたＤＶＤの抜粋１４曲を楽しみました。私達が熱狂をした、彼の地の大物演奏家が桃源郷に旅立った今、現代のタンゴを引っ張る若手のタンゲーロ達「オラシオ・ロモ、パブロ・マイネッティ、アントニオの息子であるパブロ・アグリ、セステート・マジョールで来日をしたアブラモビッチ、ワルサック、レケーナで来日をしたバルトーロ」等、見応えのある現代の雄達が素晴らしい演奏を繰り広げました。

第１部　2）の「会員有志のお勧め」では姫路在住のベテランお二人が出て下さいました。

まず、最初に鈴木忠昌さんが、何と五つの音源から２８曲をメドレーで聴かせて下さいました。大変忙しかったですが、良くこんな音源を持っておられる事と感心を致しました。

続いて大ベテラン（ダリエンソの親方）井上潤さんの「インスピラシオン聴き比べ」と題してプログラムに有ります４曲を聴かせて下さいました。終りにまだまだ違う楽団の音源が有るので次回以後聴いて下さい、と楽しみを残して下さいました。

最後に新入会員自己紹介として、アストロリコの名バイオリン・名（迷）司会者の麻場さんの登場で、これもバイオリンを弾く「姪御さんの麻場友姫胡さん」を使って（ＤＶＤの宣伝を兼ねて）ブエノスアイレスでPfのアドリアン・エンリセスの伴奏で録画をした「友姫胡さん」の勇姿のＤＶＤから映像で聴かせて下さいました。その後、彼の地で作った「カラオケ」を使って、２曲美声を聴かせて下さいました。やはり向こうで生活が出来る言語能力が有る人の唄はカタカナで歌詞を覚えて歌う素人とは全く違う説得力（説得されても意味は判らないけれど）が有る様な感じがしました。

第１部　3）の『華（はな）の１９４０年代逍遥』では東京からのゲスト、ＮＴＡの会計理事を務めておられる杉山さんが（１９４０年代前半期の名流楽団を聴く）と題して、別途用意をして下さった「レジュメ」を使って、一部脱線を加え乍ら楽しいお話しをして下さいました。私達の日本では、第二次世界大戦（大東亜戦争）で暗い生活を余儀なくされていた時代に、彼の地では、平和を謳歌し、

快楽に溢れた生活を楽しんでいた様子をつくづく感じました。
資料によりますと、１９４０年代の特徴を要約すれば、として

１．グァルディア・ビエハの１９４０年代風の復興。
２．大衆好みの踊りやすいテンポによるダンスの復活。
３．新感覚な格調ある言葉による歌詞の文学的向上と多くの新曲誕生。
４．楽団と歌手の二枚看板による人気、インストは古典曲、歌入りは歌謡調の新曲中心。
５．ラジオの国内拡張普及、ＯＤＥＯＮ．ＶＩＣＴＯＲ ２社寡占のレコード産業化隆盛。
６．第二次世界大戦の食糧供給国としての国富の増加。

等の問題提起により、お話しを進め、私達がタンゴの虜になった名曲・名演を１２ 曲に纏めて聴かせて頂きました。

その間各種音源装置の陰で黙々と進行の手助けをして下さったのは、関西若手のホープ君の永田保さんでした。{お疲れ様でした}

一旦休憩に入り、会場前のロビーで、吉澤さんに恒例の集合写真を写して頂きました。

その後､第 2 部　懇親会に移り､有志１１ 名が残り｢フランシスコ･カナロ｣来日５０年を回顧して、上田さんの提供による「フランシスコ・カナロ楽団」来日記念放送を聴きながら夕食と懇談を楽しみました。
このテープは、未だビデオレコーダーなるものが無い時代に、テレビの裏側から音声出力端子をクリップで取り出して、オープンリール・テープレコーダー（多分アカイ９００？）に音を取り出したもので、大変貴重な音源と思われます。
内容は、１９６１／１２／１３　東京新宿コマスタジアムでのコンサートで

司会は　　高橋忠雄
挨拶は　　アルゼンチン共和国　フロンディシ大統領
　　読売新聞社主　正力松太郎
通訳は　　外務省中南米局　林屋　参事官、でした。

お話しに夢中になっている間に気がつくと９時近くになっており、後髪を引かれる様な思いで解散となりました。

集合写真

会場風景

懇親会風景

上田　登さん

鈴木　忠昌さん

井上　潤さん

麻場　利華さん

杉山　滋一さん

麻場友姫胡さん

司会の山本　雅生さん

（写真撮影：吉澤　義郎氏）

ープログラムー

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　第　１　部　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

１）　映像で楽しむタンゴ 14 曲　　227　上田　　登（神戸）

◇　SELECCIÓN　NACIONAL　DE　TANGO　　2005・8・26 ～ 27

１　CHIQUÉ
２　B・B
３　TIERRITA
４　SUEÑO DE TANGO
５　TARDE DE JULIO
６　ADIÓS NONINO
７　DICIEMBRE EN BUENOS AIRES
８　GALLO CIEGO
９　LA ALEGRÍA DE ENCONTRARTE
１０　ABRAN CANCHA
１１　EL ABROJITO
１２　BAHÍA BLANCA
１３　SELECCIÓN DE TEMAS POPULARES
１４　LA CUMPARSITA

演　奏　者

Bandoneones	Leopold Federico	Ernesto Baffa	Walter Ríos
	Rodolfo Mederos	Horacio Romo	Pablo Mainetti
Violines	Mario Abramovich	Eduardo Walczak	Mauricio Marcelli
	Damián Bolotin	Pablo Agri	Miguel Ángel Bertero
Viola	Mario Fiocca		
Violincelo	Diego Sánchez		
Contrabajo	Horacio Cabarcos		
Piano	Nicolás Ledesma		

２）　会員有志のお勧めコンサート

◇　ＴＡＮＧＯ名曲選（マエストロが選ぶ２８曲を５組のメドレーで）215　鈴木　忠昌（姫路）

１　YIRA YIRA ／ NIÑO BIEN　　Don Goyo　　1650年代
２　SELECCIÓN DE TANGOS　　Los Indios Tacunau　　1990年
　１）SENTIMIENTO GAUCHO　　３）LA CUMPARSITA

２）ADIÓS PAMPA MÍA　　４）CANARO EN PARÍS

３　POPURRI DE TANGOS　　Florindo Sassone y su Orq. típ　　1979年
CANTA：O. Macri　,　R.Lemos
１）LA CUMPARSITA　　２）CAMINITO　　３）TIEMPOS VIEJOS

４　SELECCIÓN DE TANGOS　　Alfredo De Ángelis y su Orq. típ　　1953年
CANTA：C.Dante . O. Larroca
１）PINCHE　　６）CARNAVAL
２）CRUZ DE PALO　　７）TIEMPOS VIEJOS
３）LA COPA DEL OLVIDO　　８）BUEN AMIGO
４）CANARO EN PARÍS　　９）PREGONERA
５）VENTANITA FLORIDA

５　RELIQUIAS PORTEÑAS　　Francisco Canaro y su Orq. Típ　　1941年
１）ALMA DE BOHEMIO　　６）A MEDIA LUZ
２）MI NOCHE TRISTE　　７）MILONGUITA
３）EL CHOCLO　　８）RODRÍGUEZ PEÑA
４）EL IRRESISTIBLE　　９）LA MOROCHA
５）MADRESELVA　　10）SENTIMIENTO GAUCHO

◇　霊感　ききくらべ・・・・・・・パート２　　007　井上　潤（姫路）
INSPIRACIÓN　　１）リカルド フランシア　楽団　　1963年
霊　感　　２）アドルフオ カラベリ　楽団　　1932年
Ｐ．パウロス　　作曲　　（唄）　Ａ・ゴメス
Ｌ．ルビンステイン　　作詞　　３）アストル ピアソラ　楽団　　1947年
４）フアン ダリエンソ　楽団　　1967年

◇　麻場 友姫胡 新譜アルバムより　　282　麻場　利華（京都）
１）酒場１９００　　（ピアソラ作曲「タンゴの歴史」より）
バイオリン　麻場　友姫胡　　ピアノ　アドリアン エンリセス
２）お聞き下さい、判事様　　唄　麻場　友姫胡　　ギター　ディエゴ クイッコ（録音）
３）カミニート　　バンドネオン　Ｏ・モンテス　　ギター　ディエゴ クイック（録音）
唄　麻場　友姫胡

3）『華（はな）の1940年代逍遥』〈1940年代前半期の名流楽団を聴く〉　045　杉山滋一（東京）

1　MILONGUEANDO EN EL 40（A.　Pontier）
Aníbal Troilo orq. típ.　1941

2　TRES ESQUINAS（A. D'Agostino-A. Attadia-E. Cadícamo）
Ángel D'Agostino orq. típ.　C/A. Vargas　1941

3　EN ESTA TARDE GRIS（M. Mores-J. M. Contursi）
Libertad Lamarque　con Dir M. Maurano orq.　1941

4　JUNTO A TU CORAZÓN（E. Francini-H. Stanponi-J. M. Contursi）
Carlos Di Sarli orq. típ.　C/A. Podestá　1942

5　CHIQUÉ（R. L. Brignolo）
Juan D'Arienzo orq. típ.　1942

6　ASÍ SE BAILE EL TANGO（E.Randal-Marvil）
Ricardo Tanturi orq. típ.　C/A. Castillo　1942

7　MALENA（L. Demare-H. Manzi）
Lucio Demare Orq. típ.　C/J. C. Miranda　1942

8　MALA ESTAMPA（J. De Caro）
Osvaldo Pugliese orq. típ　1944

9　LA CUMPARSITA（G. H.Matos Rodríguez）
Antonio Rodio orq. típ.　1944

１０　PREGONERA（A. De Ángelis-J.Rotulo）
Alfredo De Ángelis orq. típ　C/C. Dante y J. Martel　1945

１１　ESTERCITA（E. Delfino-S. Linning）
Osvaldo Fresedo gran orq. Argentina　1944

１２　CAFÉ DE LOS ANGELITOS（J. Razzano-C. Castillo）
Francisco Canaro orq. típ.　C/C. Roldán　1945

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　第　２　部　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

懇　親　会

フランシスコ・カナロ　楽団　　来日記念放送を聞きながら、お楽しみ下さい

１９６１年１２月１３日　　新宿コマスタジアムにて　　司会　高橋　忠雄

挨拶　アルゼンチン共和国・フロンディシ大統領　　読売新聞社主　正力　松太郎　氏

通訳　外務省中南米局　　林屋　参事官

第9回「中部リンコン・デ・タンゴ」レポート

丹羽 宏

第９回「中部リンコン･デ･タンゴ」（以降､中部リンコンと略記）は１０月１６日（日）１３時より、前回と同じ四日市市内のライブ・カフェ「フルハウス」で開催した。参加者は２９名（会員 ９名、ビジター２０名）。開催日の決定遅れや名古屋、岐阜でのイベントもあってか参加者は少な目となった。本部招聘コメンテータ、佐藤 進 役員の「世界のタンゴ」を聴けなくて残念がる連絡が相次いだ。そんな中、名古屋市の安井敬晴会員は著名な装飾デザイナー氏と久保田“萬壽”を同伴されての参加と為った。タンゴ愛好者のPR、啓蒙に助力頂けるのは大変有難い。

ライブ・カフェ「FULL HOUSE」のエントランス

そして、佐藤 役員のご挨拶に続いて、本日のプログラムに入った。

【第１部】 先ずは地元会員によるレコード・コンサート。嘗てタンゴ・ワセダのバンドネオン奏者として名を馳せた島田 由美子さん（三重県）に、「LP音源全盛時代の国内タンゴ楽団」というテーマで想い入れ一杯のトークを行なって頂いた。

仕事柄と言うか、生来の話好きからと言うか、選曲に纏わる関連逸話をタップリ挿んで解説された。音楽の記録媒体がアナログのSPレコードからデジタルCDへと変遷する中で、LPレコードは単なる中継ぎ的な存在ではなく、媒体固有の特徴（長時間、音質、ノイズ激減など）を生かした新しい音楽記録媒体の文化を作り上げたと言えよう。およそ３０年間の歴史である。

このようなことを、島田さんは持ち時間の中で思い画かれたのではないだろうか。

先ず、「オルケスタ・ティピカ東京」は「藤沢嵐子」と共に、SP時代後期からLP時代中盤に掛けて活躍したが、１９６４年に中南米諸国の演奏ツアー中に、コロンビア共和国で録音・発売されたアルバムの「La Típica Tokio」を聴けば、このグループの人気の程が偲ばれる。

「Mama... yo quiero un novio」はいい選曲だった。

「オルケスタ・ティピカ・サカモト」の「La Cumparsita」は1967年頃に巡業先の中南米諸国からスペインに飛んで公演した時期のアルバムだが、「オルケスタ・ティピカ・ポルテニア」とは違ったワールド･ワイドな演奏スタイルが楽しめた。６曲目に登場した「オルケスタ･ティピカ･パンパ」の「南の風」は今となっては珍しい新興のレーベル「Jupiter」盤（1980年）からの選曲である。西塔辰之助の「フアン・ダリエンソ」に拘る演奏スタイルは、今なお「西塔 祐三」率いる楽団によって受け継がれているのだ。締め括りは「志賀 清とロス・モデルノス」の「ブエノスアイレスの夏」。アルバム曲の殆どの演奏に、現代志向の京谷弘司が加わって居ることも興味深いところ。プログラム全体として、面白い切り口の解説テーマであった。

【第２部】 本部招聘コンサートでは、役員 佐藤 進さんによる『世界のタンゴ』という大きな括りの入ったテーマで解説して頂いた。ご自身は「遅れてきたタンゴ・フアン」と仰るが、これは大謙遜で選曲対象の平易・難解に拘らず文献等を紐解いて、詳細な裏を取っておられる姿勢は見習いたいものだ。

今回のテーマでなければ先ずは登場しそうにない曲と演奏について、全１０ヶ国の中から数ヶ国を選んで紹介したい。冒頭はルーマニアを代表して、バイオリンの名手「ジョルジュ・ブーランジェ」率いる楽団による「黒海のほとりで」が選ばれた。彼がアルゼンチンで生涯を終えた話を持ってこられたのは技能賞ものではないだろうか。

２曲目はフィンランドの歌もので、現地では大物歌手として著名な「オラヴィ・ヴィルタ」。

この国ではタンゴのリズムが戦前から国民歌謡曲に入り込んでいるためか、付け焼刃的な歌のタンゴではないのだ。これは作戦勝ちの選曲と言えそうだ。トルコやルーマニアから選ばれた１９３０年代の歌のタンゴについても同じことが言えようか。

珍しさで言えば、キャプテン・クックが発見した島でフランスの海外領土、ニューカレドニアの音源から選曲された６曲目の「ラファエル･サンチェス楽団」をあげておきたい。曲は「コンプリシテ」（仏語で共犯の意味）である。フランスからは、日本でも古くから親しまれている「オーギスト・ジャン・ペセンティ」の自作自演、「タヒチ」がその前の５曲目に選ばれており、流れの作り方が上手い構成である。日本の楽団による演奏曲は、戦前ドイツの「ハインツ・フッペルツ楽団」の演奏で人気があった「別れの手紙」である。懇親会では「小川よりよし＆ジュエル・ストリングス」の市販音源について色々と質問を頂いた。見直されてよい名曲である。

最後は「オルケスタ・ティピカ・ビクトル」の名演奏、「北風」で「世界」を締め括った。

【第３部】前回に続いて、ミニ・ライブ好きの多い当中部リンコンのファンからの要望もあって地場グループの招聘演奏を行った。名古屋市を中心にディナー・ショー、ミロンガ、はたまた社会福祉施設や学校などで活発に演奏活動を行っている「タンゴ・プラティーノ」である。

リーダーの田中博澄さんは視覚障碍者のバンドネオン奏者､バイオリン（斉藤幸枝さん)､ピアノ（西谷得子さん＝実娘)、コントラバス（鈴木克比古さん＝会員）からなる４人編成で、メンバーの変化はあっても、グループ創設から１５年ほど経つ。ただ、残念なことにコントラバスの鈴木さんが直近になって体調をくずして入院されたため、トリオで演奏して頂いた。

ピアノの左手がタンゴ固有のリズムをリードする形で、コントラバスのパートをカバーする奮闘振りが印象に残った。演奏スタイルを敢えて名流楽団のイメージにラップさせながら聴いていたが、３０年代のF. カナロ楽団が脳裡に浮かんで、凄くレトロな雰囲気に浸ることが出来た。

プログラムは全１２曲中、８曲がパンパ、ドン・フアン、チュラスカ、パリのカナロといった古典の超有名曲、アコーディオンに持ち替えての４曲が夕暮れ、碧空、小雨降る径といった社交ダンスあるいはイージーリスニング向けアレンジのタンゴで構成されていた。熱いアンコールにはエル・インテルナードで応えた。総じて聴き易い～分り易い演奏であったため、参加者は６０分という演奏時間に物足りなさを感じていたのか、離席を躊躇いながら拍手で見送っていた。

以上、コメンテータ各位、演奏者、参加者のご協力により、予定通り無事に終えることが出来た。

【リンコン懇親会】リンコン終了後､若鶏専門レストランに場所を移して､佐藤さん､圓尾会員（姫路)、光廣会員、（静岡)、北岡会員夫妻（名古屋）他、タンゴ好きの１５人が懇話に花を咲かせた。会計担当の長田（寿）さん（ビジター)、友好参加の同好会「タンゴ・アルヘンティーノ三重」大北会長（ビジター)、お世話様でした。来春は４月８日（日）です。

開催実行幹事

〈プログラム〉

【第１部】会員レコード・コンサート
～ＬＰ時代に活躍した国内のタンゴ楽団～

日本タンゴ・アカデミー会員〈鈴鹿市〉　島田 由美子

０１．ドン・フアン　早川真平 指揮：オルケスタ・ティピカ東京
DON JUAN（Ernesto Ponzio）〈録:1960年前後〉

０２．ママ、私恋人が欲しいの　歌：藤沢嵐子、早川真平 指揮:オルケスタ・ティピカ東京
MAMA YO QUIERO UN NOVIO（R.Fontaina＝R. Collazos）
Sonolux, SOX-1733〈録:コロンビア国1964〉

０３．スール／南　歌：藤沢嵐子、オルランド・トリポディ 指揮：オルケスタ
SUR（A.Troilo＝H.Manzi）EMI、TP-90118〈録:ブエノスアイレス1981〉

０４．ラ・クンパルシータ　坂本政一 指揮：オルケスタ・ティピカ・サカモト
LA CUMPARSITA（M.Rodríguez＝E.Maroni＝P.Contrusi）
KUBANEY、K-456-2〈録:スペイン1967〉

０５．ラ・カルカハーダ／大笑い　小沢 泰 指揮：オルケスタ・ティピカ・コリエンテス
LA CARCAJADA（R.Firpo）PIONEER、AMP-102〈録:1980〉

０６．ヴィエント・スール／南の風　西塔辰之助 指揮：オルケスタ・ティピカ・パンパ
VIENTO SUR（F.Salamanca）Jupiter、TDK-103〈録:1980〉

０７．デ・プーロ・グアポ／男意気で　平野洋輔 指揮：ロス・タンゲーロス
DE PURO GUAPO（P.Laurenz）日本Victor, PRC-30552〈録:1970年前後〉

０８．ベラーノ・ポルテーニョ／ブエノスアイレスの夏　志賀 清とロス・モデルノス
VERANO PORTEÑO（A.Piazzolla）日本Columbia、YX-7423〈録: 1987〉

【第２部】　本部招聘コンサート　～世界のタンゴ～

日本タンゴ・アカデミー役員　佐藤　進

１．ルーマニア　黒海のほとりで　ジョルジュ・ブーランジェ楽団
BY THE BLACK SEA（Georges Boulange-L. Rodi曲）　Omagatoki SC-3118（録:1939）

２．フィンランド　プナイセ・レーデ　オラヴィ・ヴィルタ歌
PUNAISET LEHDET（P. Viherluoto曲）　Fazer 3984-23284-2（録:1962）

３．メキシコ　君は何処に　フリオ・デ・カロ楽団
DÓNDE ESTÁS CORAZÓN（Luis Martínez Serrano-Augusto Berto曲/
Luis Martínez Serrano詞）A.M.P. CD-1143（録:1930頃）

４．トルコ　ごろつき　セイヤン・ハヌム歌
CAPKIN（Mustafa Sukru曲）　Oriente RIEN CD 20（録:1930代）

５．フランス　タヒチ　A.J.ペセンテイ楽団
TAHITI（A.J. Pesenti曲）　A.M.P. CD-1281（録:1932）

６．ニュー・カレドニア　コンプリシテ　ラファエル・サンチェスの楽団
COMPLICITÉ（Reynald Buraglio曲）　Fremeaux FA-535（G:2007）
７．ポーランド　母のこころ　フル・エリアナ合唱
SERCE MATKI（Z. Karasinski曲）　Oriente RIEN CD 55（録:1930代）
８．ドイツ　別れの手紙　小川よりよしとジュエル・ストリングス
EIN ABSCHIEDSBRIEF（P. Lesso-Valerio曲）　Universal UPCY-6227（G:1970頃）
９．ルーマニア　行け、御者　ジャン・モスコポル歌
MANA, BIRJAR（Nel Martini曲/P. Sabin-D. Dubae詞）　Oriente RIEN CD 20（録:1930代）
10．アルゼンチン　北風　オルケスタ・テイピカ・ビクトル
VIENTO NORTE（Juan Carlos Zuncho曲）　EBCD-85（録:1929）

――――ライブ準備＆休憩――――

【第３部】タンゴ・プラティーノ　“生演奏”

田中 博澄：バンドネオン、斉藤 幸枝：バイオリン、西谷 徳子：ピアノ

０１．パンパ　PAMPA ／大草原（F.　Pracánico）
０２．ドン・フアン　DON JUAN（E.　Ponzio）
０３．チュラスカ〔美しい女性〕　CHURRASCA（F.　Lomuto）
０４．パリのカナロ　CANARO EN PARÍS（A.Scarpino＝J.Caldarera）
０５．夕暮れ　EIN LIED OHNE WORTE（G.Mohr＝K.Richter）
０６．碧空　BLAUER HIMMEL（Josef Rixner）
０７．小雨降る径　IL PLEUT SUR LA ROUTE（H.　Himmel）
０８．グラナダの栄光　GLORIA OF GRANADA ～ Paso-Doble
０９．夢の中で　ENSUEÑO（A.　Sureda）～ Vals
１０．エル・チョクロ　EL CHOCLO（A.　.G.　Villoldo）
１１．フェリシア　FELICIA（E.　Saborido）
１２．ラ・クンパルシータLA CUMPARSITA（M.Rodríguez＝E.Maroni＝P.Contursi）

印刷協力：サンド・ブラスト工芸家 松田忠雄さん

「世界のタンゴ」を解説する
佐藤 進さん

「LP音源全盛時代の国内タンゴ楽団」を解説する島田由美子さん

「タンゴ・プラティーノ・トリオ」、アコーディオン奏者はリーダーの田中博澄さん

会場風景

第1回NTAミロンガパーティー

宮本 政樹

日本タンゴ・アカデミー（ＮＴＡ）が主催する第１回ミロンガパーティーが10月９日に原宿の中華レストラン「茶々苑」で開催された。記念すべき初めてのダンスパーティーである。近年におけるタンゴダンスの発展は目覚ましいものがあり、タンゴ史上これほどタンゴダンスが世界的に浸透した時代はなかったし、北欧、東欧、ロシアから、韓国や台湾及び東南アジアまで盛んに踊られるようになり、東京及び東京近県でも毎日昼夜を問わずミロンガがあり、しかも若い愛好者が急増し、時には朝まで躍り明かす状況にまで至っている。しかもタンゴが世界文化遺産にまで指定される原因にはダンスの世界的普及が少なからず影響しているであろう。このようなダンス界の状況を鑑みればＮＴＡがミロンガパーティーを取り上げるのはむしろ遅きに失した感もある。しかし従来のＮＴＡではダンスパーティーを開くなどとは到底考えられないことであったが、現島﨑会長の体制になってからのタンゴダンスを受け入れる姿勢は大変喜ばしい事であると思う。今回のミロンガパーティーの特徴はダンスを踊らない会員のために音楽を聴くための席をたくさん設けた事であり、聴く人にとってはコメンテーター付きのレコードコンサートであり、二つの楽団の演奏会の意味も含まれている。パーティーの冒頭の挨拶で島﨑会長曰く「我が国では昔から、音楽は音楽、踊りは踊りというふうにそれぞれが分離して楽しむ傾向であったが、踊る人も聴く人も共に楽しめる集い」として考えたのが今回の企画である。（参加者162名、そのうち聴く人約70名）

1. ミロンガパーティーの踊り

16：00過ぎからＣＤがかかるとフロアーでは待ちきれずにいた人達が次々と踊り始める。アカデミーの会員は踊らない人がほとんどなので踊る人は少ないであろうとの予測に反して、見覚えのない会員外の人達がかなり来ている。事前の宣伝効果と積極的な呼びかけがあったせいであろうか。数年前に比べるとミロンガで踊る人達のサロンダンスのレベルは格段と向上し、若年層が急激に増えたことを感じる。この狭いフロアの人ごみの中でアブラッソ（抱擁）

で気持ち良く踊っていたが、開始後20～30分でフロアはかなりの混雑振りを呈して、昔のダンスホールの“イモ洗い”状態の中､汗を流しながら踊っている。フロアの狭さに対してあまりにも混みすぎた状態でので窮屈なダンスである。

プロダンサーのデモが始まる。最初はGYU&夏美れい。一曲目はQuejas de Bandoneón（Troilo演奏)、２曲目は Pero Yo Sé（Ángel Vargas（歌）～Armando Lacava)。さすが一流のプロは歩く姿が奇麗だ。上半身がぶれない。やはりプロの踊りもステージ・ダンスよりもサロンダンスの方が見ごたえがある。上手な人ほどサロンダンスが上手い。何よりも二人ともカッコイイ。特に、女性ダンサーのヘソ出しルックの肉体美に男性諸君はじっと視線を集中した事であろう。

数10分置いて２組目のデモ。HIROSHI & KYOKO, 2009年のサロンダンスの世界チャンピオン。１曲目、Mañana Zarpa Un Barco（Lucio Demare演 奏 ～Juan Carlos Milanda歌）２曲目､Yunta Brava（Juan D' Arienzo） ３ 曲 目、La Milonga De Mis Perros（F.Canaro～Juan Carlos Roldán）. 世界一の踊りはどこが違うのか皆が注目。世界一の踊りは緩と急と間の取り方が違う。特に間の取り方、一呼吸、二呼吸、息を殺した瞬間から静かに歩く微妙な動き。そして抱擁し合った時の二人のピッタリと呼吸の合ったコンビネーション。タンゴは動より静の動きに美しさがある。この静かな動きのカミナンド（歩く事）を見ているだけでも鳥肌がたつようにゾクゾクすることもある。タンゴはただ激しく踊ればいいというものではない。爆発する感情を抑えた内に秘めた情熱を表情と動きで表現するのがタンゴの踊りのタンゴらしい見せ場でもある。

2. レコードコンサートとダンス

このミロンガパーティーでは生演奏との間はＣＤで踊る時間帯であり、ＮＴＡの会員がコメンテーターとなり、一人３曲ずつ６人がダンスのための名曲名演のタンゴを選曲し、簡単に３曲分のコメントをした後でＣＤを掛けて踊り出す。６人のＤＪは順番に、町田静子、三浦幸三、宮本政樹、橋本真知子、大貫孝三、小林謙一。さすがに普段からミロンガのＤＪ又はレココンのコメンテーターに慣れている人ばかりでほとんどが踊りやすい名曲名演奏であった。ほとんどがタンゴ黄金時代の名曲で1920年代後期のＦ.カナロ、F.ロムート、フ

レセド、フアン・ギド、40年代、50年代のディサルリ、ダリエンソ、プグリエーセ、トロイロ、ダゴスティーノ、ミゲル・カロー、エクトル・バレラ等である。コメンテーターの話は３曲分で一分間との制約がある。しかしコメンテーターの話に興味のない踊り手達には一分間でも長すぎるようだ。曲のコメントしている間も雑談している人が多く、話が良く聞き取れない。普通のレココンとはえらい違いだ。

そして問題は音楽を聴く人の席はダンスフロアの外のベランダの席で聴くことになっているが、ここではコメンテーターの話す声もＣＤの音楽の音もよく届かず、かすかなBGMの音楽でしかない。席が足りずに外の道路で立ったままワインを飲みながらダンスの風景を見ているだけの人、歓談している人もかなり多い。通行人も何事かと思って立ち止まって中を覗いている。

3. ライブでのダンスと演奏会

二つの楽団演奏が入るミロンガパーティーとは何と贅沢なことか。ライブハウスや公共施設での演奏会でもめったにないことである。

（1）古橋ユキのタンゴ・クアルテート

（Vi. 古橋ユキ、Bn. 池田政則、Pf. 深町優衣、Cb. 斎藤直樹）

オープニングはCuando llora la milonga、すぐ近くで生演奏を聴きながらダンスを踊るのは気持ちの良いもの。臨場感を味わえる。しかし混みすぎて周りへの気遣いでストレスがたまりそう。女性のヒールで足を踏まれた人がいた。ぶつかって謝っている人もいた。古橋ユキのバイオリンや池田政則のバンドネオンは懸命に弾いているのは分かるが、演奏スペースが狭く窮屈で、何よりも音響設備が悪すぎる。又肝心のピアノがキーボードではピアニストがかわいそう。

聴かせる人にとっての曲目はなかなか良い。Para dos, El andarriego, Nochero soy, La Yumba, Mi lamento, A Orlando Goñi, A Evaristo Carriego, Recuerdo, Mala juntaとプグリエーセ・スタイルの演目が惜しげもなく連続で奏でる。プグリエーセ・ファンにとってはたまらないであろう。

しかし外のベランダで聴いている人にとっては演奏会の気分とはほど遠い。聴く席からも良く聴こえるようにと、出入り口からのすぐ内側に楽団のステージを配置したが、外からでは演奏している姿は見えず、かすかなBGMのタンゴがむなしく聴こえるだけだ。

（2）平田耕治CAMBATANGO

（Bn. 平田耕治、Gui. アリエル・サルディーバル、ルーカス・ペンセル、Cb. 藁科基樹
歌. マリベッツ・アリメンドラ）

オープニングはMilonga De Mis Amores。このようなダンスパーティーの会場ではCAMBATANGO の演奏は相応しいとは思えない。それに相応しい演奏会場でじっくりと聴いたほうが演奏の良さが生かせる。ギター２台とベースとバンドネオン。繊細なギターの音色が会場の空

気で消されてしまいそう。音響とマイクの悪さで歌手の声も何を歌っているのか良く聴こえてこない。（歌はTu Pálida Voz, Suerte Loca, Yira Yiraなど。）同じ女性歌手の歌を別の会場のコンサートで聴いた人が彼女の歌は良かったと言っていたが、ここではその良さが出せない感じがする。ただ平田耕治のバンドネオンだけが孤軍奮闘していた印象だが、表情からすると決して満足はしていなかった。CAMBATANGO　の演奏を聴くのが目的で来た人にはかなり失望したことであろう。

今回企画した主旨である「踊る人も聴く人も共に楽しめる集い」というキャッチフレーズそのものは非常にすばらしいと思う。しかし結果的には踊る人、聴く人、演奏する人も含めてそのほとんどが楽しめなかったのではないかと思う。踊ることと聴くことを両立させる事がいかに難しいかを再認識させられた想いである。今まで過去にも同じような企画があった。蟹江丈夫さんが主催した「ミニ・セミ」、そして「ノチェーロ・ソイ」の「踊れるレコードコンサート」でも結果的には成功しなかった。

今回のミロンガパーティーの問題点はまずは会場選びと音響、会場に相応しい人数制限と楽団選び、聴く席の配置の問題。さらに重要で最も難しい問題は踊る人達にいかに音楽に興味を持たせるかという事と、逆にレココン中心の人達にいかにしてダンスに興味を持たせるかの問題が究極の課題であろう。とにかく今回初めてミロンガパーティーを開催したこと自体は非常に意義があり、これを機会に踊る人も聴く人も共に楽しく過ごせるパーティーに発展してゆく事を切に望むものである。

＜フランシスコ・カナロ来日50周年記念特集＞

2011年12月はフランシスコ・カナロ楽団が来日公演してから50周年目に当たります。これを記念してタンゲアンド・エン・ハポン誌編集部では「フランシスコ・カナロ来日50周年記念特集」を企画・編集いたしました。不十分な点は多々あると思いますが、ご愛読いただければ幸甚に存じます。（編集部）

＊＊＊

万が一にでも、三面記事のネタになるようなことをしたら、たいへんに困る。カナロが責任者なら、安心だ。

当時はステージ活動をしていなかったけれど、信頼できる人間としてカナロが選ばれたのは、当然だったといえる。大物であることに異論はない。さらに、当時はタンゴ不況期がはじまっていて、有名音楽家でも活動は不安定だった。

読売新聞社にとっても、タンゴの公演を実現することはプラスだったようだ。1964年には、最高峰が集まったグループ《キンテート・レアル》を招へいして成果を上げた。また、その後、『中南米音楽』の企画した、日比谷野外音楽堂での、日本のタンゴ楽団による、毎年の「ヌエベ・デ・フリオ（7月9日）」コンサートの主催を引き受けるなど、大いにタンゴを応援してくれた。新聞社の事業全体の中では、ほんの小さな部分に過ぎなかったのかもしれないが、タンゴにとってはしあわせなことだった。

余談になるけれど、1964年に、早川真平とオルケスタ・ティピカ東京がアルゼンチン公演した。これは読売新聞社とはまったく関係ないが、ブエノスアイレスでＳＡＤＡＩＣ（サダイク、アルゼンチン作詞作曲家協会）がレセプションを開いてくれて、そこへフランシスコ・カナロが、会から頼まれていないのに、健康がすぐれないのを押して、わざわざやってきて、すばらしい歓迎の演説をした（亡くなる数ヶ月前だった）。カナロは、日本人のタンゴへの愛を讃え、そのような国から来た楽団に、最大の援助をするように説いた。それ以来、ティピカ東京とアルゼンチン音楽家の交流がたいへんうまくいったと、随行していた中西義郎さんが、後にわたしたちに話していた。「カナロはさすがに偉い人だね。立派なことばで、みんなを説得し、言うことを聞かせる力があった」と、中西さんはいつも感心して語っていた。

その中西さんも、1961年の来日公演では「関係者」ではなかった。他のファンたちとともに、追っかけ組に入っていたようだ。カナロ楽団のリハーサルを見ることができたのが最大の特典？　長年知

り合っているメンバーとはいえ、日本公演のための臨時編成なので、リハーサルは深夜に及んだ。「（リハーサル見学を許された人たちは）みんな電車がなくなって家に帰れないので、新宿で宿屋を探して泊まったらしい」と環江さんの話。

カナロ楽団は、日本でレコードを録音した。タンゴでは世界初のステレオ録音だった。この録音も非常に入念なリハーサルを重ねたものだったそうだ。気力の充実していることは、いま聴いてもよくわかる。この録音に立ち会っていた、当時日本に住んでいたアルゼンチン音楽家リカルド・フランシア（編曲指揮・チェロ）に、後年になってわたしは話を聞いた。

録音のリハーサルは、実質的に音楽監督であるピアニストのオスカル・サビーノ（ピアニスト）が指導して、徹底的に細部を練り上げながら、長時間おこなわれた。カナロはそばにいるけれど、まったく口をはさまない。

「それがとつぜん立ち上がって、『キンタ・ディミヌイーダ！』と、あのデカい声で叫ぶんだ。ぼくはびっくりして、ひっくり返りそうになったよ」とフランシアの話。

キンタ・ディミヌイーダ Quinta diminuída とは音楽用語で「減５音程」のことだが、この場合には、なんの関係もないことばで、音楽家フランシアにも意味がわからなかったそうだ。

「どこかで聞き覚えた音楽用語を、デタラメに使ったのかなぁ？　メンバーはぜんぜん知らんぷりして演奏していたよ」

カナロの音楽文盲さにあきれたフランシアだが、ずっと後年になって、カナロの演奏を完全にコピーした楽団を編曲指揮して、日本公演をしている。あの音を再現するのは、すごくむずかしい！とくるしんでいた。

わたしは、1961年当時は大学生で、授業には出ず、ほとんど毎日、神田神保町のタンゴ喫茶《ミロンガ》にいた。カナロの日本公演のことは知っていたが、お金がないから行けないし、行きたいとも思わなかった（かなわない望みをもっても仕方がない）。ところが、ある日、《ミロンガ》の店長格の愛子さんが、「カナロのコンサートに行ってくれない？」と頼んできた。

だれだかが昨日の公演の切符を買っていたのに、よんどころない都合で行けなくなってしまった。払い戻しはできないし、もったいないから、その切符を使って、別の日に入ってくれないか、というのである。その人は、捨てるのは口惜しいから、だれかに、なんとか使って欲しいと、愛子さんに入場券を託していったのである。

「悪いんだけど、高場さんなら、なんとか入れるでしょう」と、「お願い」された。

なんという幸運？　わたしがカタギの性格ではないことを見込んでの頼みを、断ってはいけない。翌日、わたしは新宿コマ劇場に、すんなりと入った。満員の人ごみで、係りの人に切符の日付をたしかめる余裕はない。わたしも、特に込み合っているときをねらって行った。

入るのは簡単だったが、当然ながら座席はない。いちおう、切符に書いてある番号のところを見たが、本物のその日の切符を持った人が座っていた。

わたしは通路の壁のそばに立っていた。開演５分前あたりに、場内係の女性が「お席はどちら？」とたずねに来た。わたしは、とっさに（先のことはなにも考えていなかった）「あ、ぼくは関係者ですから……」と言って、当然の顔をして、すましていた。その後、なにも言われずに、わたしはずっとそこに立って、生のタンゴ楽団の音におぼれていた。

いい時代だったんじゃないですか？

～あれから50年～　フランシスコ･カナロ来日50周年記念特集

アルゼンチン共和国　フロンディッシ大統領の新宿コマ劇場とテレビ（ＮＴＶ系列）を通じての挨拶

（昭和36年12月20日、20時20分頃）

私は只今日本の皆様方と直接お目にかかることができまして、大変感動しております。

日本の官憲といろいろなお話をしましたあとに、日本の民衆の皆様方と直接ここにお会いいたしまして、そしてわが国の音楽を聴くことはまことに象徴的であると思います。われわれは、日本の古代及び近代のあらゆる文化活動、芸術活動に対する非常な憧れを持っております。

皆様方は、今これからアルゼンチンの音楽をお聴きになるわけであります。この音楽こそわが祖国の心を最も忠実に写し出しているのでございます。この音楽こそわれわれアルゼンチンの国民がその喜びも哀しみをも表現する音楽でございます。特に恋愛におきまして、失敗したりあるいは成功したりする時に、特に表現する音楽でございます。

皆様方がこの音楽に拍手なさいますならば、私は本当に心から満足するものでございます。と申しますのは、政府当局者というものは、国民の気持ちを表現することが第一の使命であるからであります。皆様の拍手こそ、われわれの国民が言葉も違い、いろいろな点で違いながら、お互いに心と心がふれあうという何よりの証拠だと私は思うからであります。皆様が本日ここに来会くださっておりますこと、そして皆様が拍手をくださいますことを、本日ここに参っておりますアルゼンチン人の名において、感謝したいと思います。

われわれが聴きます音楽に、われわれは、おそらく郷愁を感ずることでしょう。しかしながら、日本人の心、すなわちわれわれの友人の心と一緒におるということだけで、私は本当に喜ぶものでございます。

どうもありがとうございました。

（通訳　林屋外務三等書記官）

テープ起こし（通訳の表現通り）：福田　陽

（フロンディッシ元大統領の画像の入手については日本アルゼンチン協会常務理事中野惠正氏のご尽力を仰いだ。この場を借りて氏に深甚の謝意を表します。（編集部））

～あれから50年～　フランシスコ･カナロ来日50周年記念特集

フランシスコ・カナロ来日公演の全貌

島崎　長次郎

はじめに

昭和３６（１９６１）年暮れのフランシスコ・カナロ楽団の来日公演は、本場の楽団のナマの演奏を聴きたい、と渇望していた当時のファンを欣喜雀躍させる出来事だった。あれから早くも５０年の歳月が流れ去った。そこで、あらためてその折の、限りなく熱い、感激のシーンを振り返ってみることにした。

◆　“カナロ来日決定 !!” のニュースに沸く

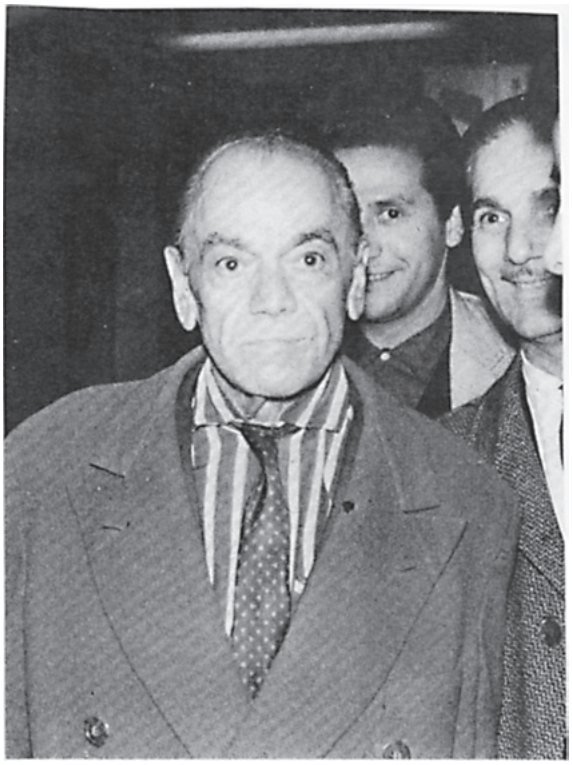
“タンゴの王様、フランシスコ・カナロ楽団の来日決定！！”のニュースくらい私たちを喜ばせたものはない。読売新聞にこれが載ったのは昭和３６年（１９６１）年の、たしか夏のころだったろう。戦後の間もない時代は軽音楽がもてはやされ、俗に「ジャズ、タンゴ、シャンソン」の時代などと呼ばれていたが、ジャズやシャンソンの楽団や歌い手の来日公演はしばしば見られるのに対し、タンゴは当時皆無に等しい情況が続き、ファンは一人空しい思いを抱え、たゞ嘆息を漏らし続けていた折だっただけに、この朗報は大きな期待の波紋となって広がった。

周知のとおり、アルゼンチンからの来日楽団といえば、これより遡ること７年前の昭和２９（１９５４）年に、実はフランシスコの弟であるフアン・カナロ楽団が来日第１号として先行、ファンは初めての本場のタンゴ演奏に目を見張った経験があるが、わが国では戦前だけでも５０種にも及ぶレコードの発売を通じるなどして、すでに抜群の知名度を誇る実力者である上に、“タンゴの王様” とか “生けるタンゴ史” などと称されるとおり、その貫禄においても兄のフランシスコは比較にならない偉大な存在だから、ファンの喜びはいっそう大きく広がっていったといえよう。

当時、私は今は亡き大岩祥浩（元日本タンゴ・アカデミー会長）さんの主宰していたポルテニヤ音楽同好会の役員をおおせつかっていたので、“さて、ファンとしてこの喜びをどう表明しようか、” との役員会の協議に加わった結果、①役員一同で羽田空港に出迎える。②歓迎のプラカードと小旗を作って歓迎の意を表す。と決定し、早速にその文言やら図案を検討し、２～３日はみんなで大岩宅に集まり、わいわいと徹夜のようにして「ビエンベニード（歓迎）」とか「ビーバ・タンゴ（タンゴ万歳）」などのプラカードを作る一方、同時に各人が打ち振るための思い思いの小旗を作り、到着を一日千秋

の思いで待った。

◆　羽田空港に姿を見せたフランシスコ・カナロとその一行



“タンゴの巨匠”フランシスコ・カナロの一行１７名が羽田空港にやってきたのは、昭和３６年（１９６１）年の１１月２７日の夜だった。だが、固唾を呑んで待ちに待ったファンの前に現れたカナロは、長旅の疲れなのか、意外にも顔面蒼白、息も絶え絶えの情況で、“これがあのカナロなのか”と一瞬目を疑った。ピアノのオスカル・サビーノとカナロ夫人に両脇から支えられ、あえぐようにロビーに姿を見せ、ソロリ、ソロリとした足取りで歩いてきたのだからビックリしてしまうのも当然だ。しかし、かねて用意した「ビエンベニード」とか「ビーバ・タンゴ」などのお手製のステッカーを掲げ、手に手に歓迎の小旗を打ち振り、興奮の面持ちで待ち受ける私たちの姿を見ると、カナロはちょっと立ち止まり、はじめてニコっと人懐こい笑顔をみせてくれたのはうれしかった。

これでホッと一安心して周囲を見渡すと、写真で見覚えたバンドネオンのドミンゴ・フェデリコ、バイオリンのオクタビオ・スカグリオーネ、コントラバスのアリエル・ペデルネーラなどの何人かの顔が見える。ほかのメンバーも長旅の疲れも見せず、なにやらみんな嬉しそうに顔を輝かせ、周囲にしきりに愛想をふりまいているのが目に入った。

後でわかったことが、当時はまだプロペラ機だったために航続距離が短い関係で、旅はチリー、ペルー、シアトル、バンクーバーともっぱら西海岸沿いに北上し、ようやく羽田到着となったようで、実に７０余時間を要したとのこと。現在はその３分の１ほどの時間で到着できることを考えると、この５０年のときの流れに、あらためて隔世の感を抱かずにはいられない。カナロの衰弱した当日の姿は、持病があったにしろこの非常な長旅が大きく作用していたことは間違いないであろう。それを考えると、老体にもかかわらず本当によくぞきてくれた、と感謝をしなければならない。

ところで、凄い！としみじみ思ったのは開幕前夜の深夜にわたるリハーサルだった。到着したときの傍目にも痛々しかったカナロとはうって変わり、生き生きとしたカナロがそこにいたのだ。ステージの端に用意された椅子に時折は座っていたものの、背を伸ばし、メンバーに向けて放つ眼光の鋭さは並のものではなく、時々発するダミ声による指示は、さすが“グラン・マエストロ”を思わせる気迫と風格に貫かれていて、“やっぱりカナロだ！”と思わず叫びたくなるほどだった。これで三日前の羽田空港での杞憂は一気に吹き飛び、明日からの公演に寄せる期待が、さらに大きく膨らむのをどうすることもできなくなってしまった。

◆　新宿コマ劇場の緞帳がついに上がる～日本公演のスタート

日本公演が始まったのは、翌１２月１日夜の新宿コマ劇場だった。当日は２年前に結婚されたばか

りの皇太子殿下（今の天皇陛下）ご夫妻をはじめ、アルゼンチン大統領フロンディシ夫妻、駐日アルゼンチン大使オルフィーラ夫妻、駐亜日本大使津田夫妻など、内外の高官が錦上花を添え、その上に途中でフロンディシ大統領の直々の挨拶があって、そうでなくとも超満員で熱気に包まれていた会場は、いやが上にも盛り上がった。これを皮切りに全国１６公演ははじまった。絶賛のうちに展開されたカナロのステージは、熱狂する多くのファンの胸に忘れがたい旋風を巻き起こすこととなった。

師走ともなると日暮れは早い。日本公演の幕開けとなった１日の開演は午後６：３０分、すでに周囲は夜の帳に包まれた中で、ひとり会場の新宿コマ劇場は光り輝いていた。そして場内には期待と興奮のない混じった熱い空気が漂い、ファンは固唾を呑み、開演のときを今や遅しと待っていた。

やがて弦のチューニングの音がかすかにステージの幕の内側から聞こえてくる。開幕のベルが鳴る。場内がスーと暗くなり急に静まった、と思った瞬間だった。聞き覚えのあるトーンで「センティミエント・ガウチョ」の旋律が鮮やかに流れてくる。これに合わせて重い緞帳が静かに静かに上がる。楽団員の姿が見える。“これがカナロだ！”と思う間もなく、場内は万来の拍手に包まれた。胸がこみ上げ、目頭がジーンと熱くなるのを抑えることができない……。

そこに司会の高橋忠雄さんが登場し、流れるオープニング・ミュージックを背景に、持ち前の流暢な語り口で次のように語るのだった。

“…お待たせいたしました。司会の高橋忠雄でございます。タンゴとほとんど同じうして生まれ、自らタンゴを作り、自らタンゴを演奏し、タンゴを世界に広めました文字通り“タンゴの王様”フランシスコ・カナロがやってまいりました。

…ずいぶん長くお待ちになった方もあると思います。昨日お目にかかった方などは、私は、フランシスコ・カナロが来るのを３８年待ってました、と言っておられました。まあ、そういうことを伺いますと、四分の一世紀くらいお待ちになった方は、ざらにいらっしゃるのではないかと思います。…お待たせいたしました！。いよいよ本物のカナロがやってまいりました。…早速ご紹介いたしましょう。マエストロ、フランシスコ・カナロ！！”。誠に鮮やかなイントロだ。ここで早くも背筋を感動が走りぬける思いがした。いよいよ始まるのだ、と思って…。と、そこでカナロが中央マイクの前に立つ。“…ミナサーン、コンボァンワ”。これに場内からどよめきにも似た熱い拍手が応える。そして、期待の演奏ははじまった。

まずは、古典の名作がメドレーになった「レリキアス・ポルテニァス」だ。耳慣れたフィルポの代表作、アルマ・デ・ボエミオを筆頭に、エル・チョクロ、マドレセルバ、ア・メディア・ルス、ロドリゲス・ペニャ、ラ・モローチャなどの名作が、変幻自在のテンポと微妙な強弱のつけ方でつゞられ、早くも場内は完全にカナロの世界に引き込まれてしまった。このあたりはコメディア・ムシカルの上演などを長年にわたって手がけ、大衆の心理を知り尽くしたいかにもカナロらしいやり方だと、改めて感心してしまった。

プログラムは１部と２部に分かれ、各々１２～３曲ほどで構成されているが、、１部はエルネスト・エレーラとイサベル・デ・グラーナの２人の歌手に囲まれるようにしてカナロが歌った圧巻の「ムンジンガ」まで、また２部では全員がステージを彩る地方色の匂いの強い「パーハ・ブラーバ」まで、熱気に溢れたステージは飽くことを知らず、聴衆はひたすらに陶酔の２時間に浸った。

◆　メンバーの顔ぶれと日本公演の全日程

この公演の主催は読売新聞で、後援などの関連団体は次のようになっている。

後援：外務省、
　　アルゼンチン大使館、
　　日本アルゼンチン協会、
　　ラテン・アメリカ協会、
協賛：東芝音楽工業株式会社。

〈フランシスコ・カナロとグラン・オルケスタ・ティピカのメンバー〉

指　　揮	フランシスコ・カナロ
バンドネオン	アントニオ・ヘルマーデ
	オスカル・マリオ・バシル　⑤
	アンブロシオ・ドミンゴ・スカポラ

	ドミンゴ・セラフィン・フェデリコ
バイオリン	ベルナルド・ヴェベール
	オクタヴィオ・フアン・スカグリオーネ ⑤
	アントニオ・ダレサンドロ ⑤
	ホセ・サルミエント
ピ ア ノ	ミゲル・オスカル・サビーノ ⑤
ベ ー ス	アルフレド・アリエル・ペデルネーラ ⑤
歌 手	イサベル・デ・グラーナ
	エルネスト・エレーラ
舞 踊 手	グロリア・デ・グラーナ
	エドゥアルド・マヌエル・アルキンバ
	マリア・カルメン・バラー・デ・コルテス ＊ 以上１７名

⑤＝キンテート・ピリンチョのメンバー

＊＝踊り手のグロリアの母親。当時グロリアが１５歳未満で渡航許可がおりないために、保護者の同行が必要となり、窮余の策で母親を名目上、踊り手として同行させた。

〈全国公演のスケジュール〉

東 京	１９６１年１２月 １日（金）	P.M. ６：３０	新宿コマ劇場
〃	１２月 ２日（土）	〃	〃	〃
〃	１２月 ３日（日）	〃	〃	〃
〃	１２月１２日（火）	〃	〃	〃

東　京	１２月１３日（水）	P. M.	６：３０	新宿コマ劇場
〃	１２月１４日（木）	〃	〃	〃
京　都	１２月　４日（月）	〃	〃	京都会館
大　阪	１２月　５日（火）	〃	７：００	千日前大劇
〃	１２月　６日（水）	〃	〃	〃
名古屋	１２月　８日（金）	〃	６：３０	愛知文化講堂
静　岡	１２月　９日（土）	〃	〃	駿府会館
富　山	１２月１６日（土）	〃	６：００	富山市公会堂
金　澤	１２月１７日（日）	〃	〃	金澤女子短大ホール
新　潟	１２月１９日（火）	〃	６：３０	新潟市体育館
仙　台	１２月２３日（土）	〃	〃	電力ホール

これに当初予定にはなかった“さよなら公演”が、次のとおり行われた。

東　京	１２月２８日（木）	P. M.	６：００	新宿コマ劇場

司　会：高　橋　忠　雄　　全１６公演

◆　ステージを飾った豪華なレパートリー．

来日に当たっては、日本側の要請も含め、馴染み深い古典曲を中心に次のようなレパートリーが用意され、この中から公演日や公演場所によって適宜にチョイスされ、ステージにかけられていたが、文化使節としての役割と、ショウを意識したカナロー流のステージづくりから、タンゴ以外の郷土色豊かな曲目も適宜加えて楽しませてくれた。

〈オルケスタ／キンテート〉

○カデナ・デ・タンゴ（タンゴ・メドレー）～ヌエベ・プントス、エル・ポジート、黄金の心、汚れた顔、マドレセルバ、最後の杯、ノブレサ・デ・アラバル、過ぎ来し彼方。

○レリキアス・ポルテニァス（タンゴ・メドレー）～アルマ・デ・ボエミオ、ミ・ノーチェ・トリステ、エル・チョクロ、エル・イレシスティブレ、マドレセルバ、淡き光に、ミロンギータ、ロドリゲス・ペニャ、ラ・モローチャ。

○エル・チョクロ
○パリのカナロ
○華やかなりし頃のミロンガ
○センティミエント・ガウチョ
○パーハ・ブラーバ
○ビクトリア・ホテル
○夜明け
○ミロンガのすすり泣くとき
○バンドネオンの嘆き
○エル・エスキナーソ
○フェリシア
○黄金の心
○ムンジンガ
○エル・ポジート
○エル・ポルテニート
○ブロンズ
○たそがれのオルガニート
○エル・エントレリアーノ
○ラ・クンパルシータ
○トルタ・フリータ
○黒い鷹（タンゴ幻想曲）
○ラ・プニャラーダ
○泣き虫
○レ・ファ・シ

〈歌　手〉

◇イサベル・デ・グラーナ◇

○デ・ミ・バリオ（私の町にて）
○ウノ
○魅せられし心
○カミニート
○場末のバンドネオン

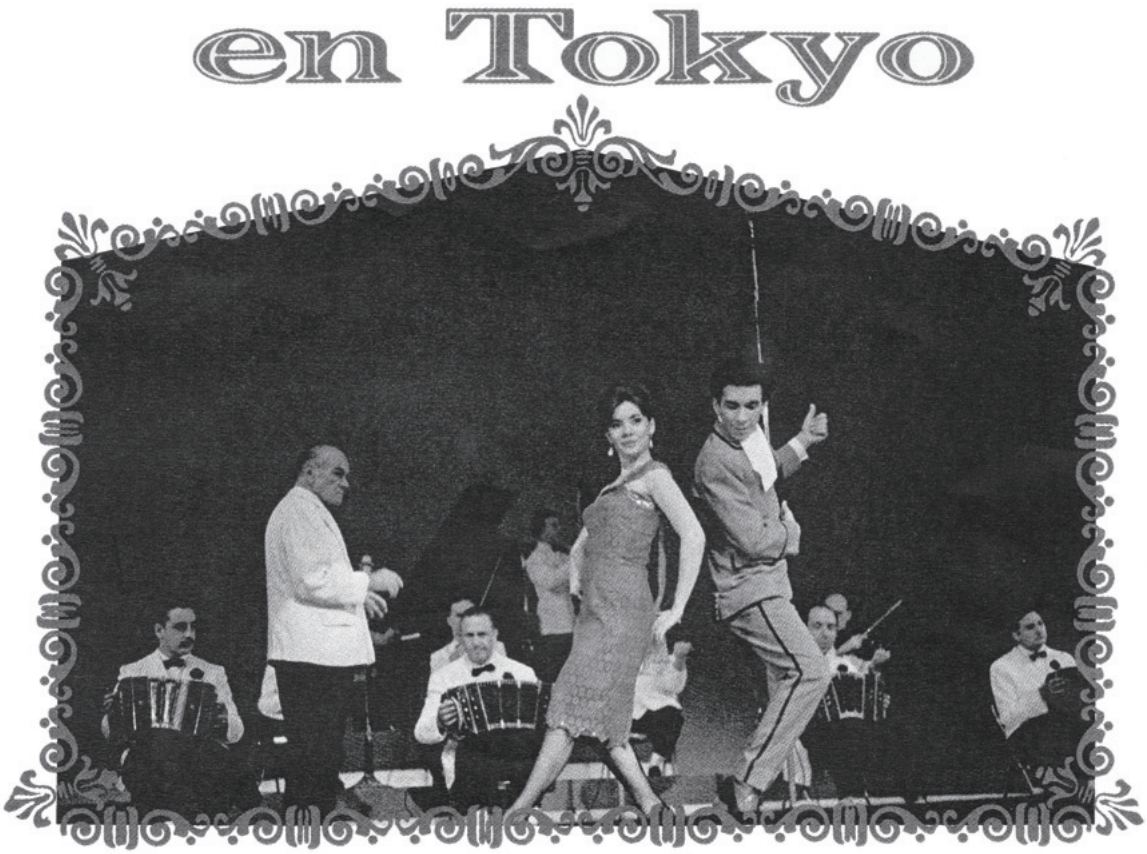
◇エルネスト・エレーラ◇

○ジーラ・ジーラ
○放浪者の魂
○日本のカナロ
○マドレセルバ
○さらば草原よ
○水色のワルツ

◆　新宿コマ劇場に再登場したカナロの“さよなら公演”

東京で幕を開けたカナロの全国公演は、１２月２３日（土）の仙台を最後に予定通り終了し、一行は再び東京に戻ってきた。そして、巡演の疲れを癒しつつ帰国の準備をし、帰国の前日の１２月２８日（木）の夜に、再び新宿コマに登場し、全員が溌剌として日本での最後のステージ“さよなら公演”に臨んだ。

当日のプログラム（別刷り）が手元にあるので、それを次に見てみよう。



〔フランシスコ・カナロ〕

グラン・オルケスタ・ティピカ
ピリンチョ五重奏団

―――― 歓送公演プログラム ――――

１２月２８日（木）PM 6:00
新　宿　コ　マ　劇　場

□　第一部　　（原文のまま）

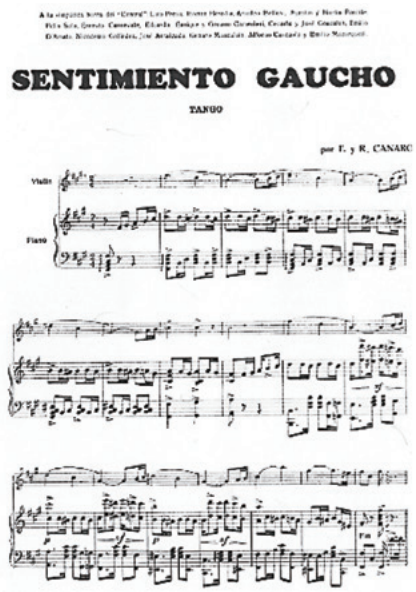
①黒い鷹（タンゴ幻想曲）	オーケストラ
②私の町にて	歌・イサベル・デ・グラーナ
③スイカズラ	歌・エルネスト・エレーラ
④パリのカナロ	オーケストラ
⑤街角（踊り）	オーケストラ
⑥華やかなりしころのミロンガ（踊り）	オーケストラ
⑦ホテル・ビクトリア	ピリンチョ五重奏団
⑧エル・ポジート	ピリンチョ五重奏団
⑨１１番街	ピリンチョ五重奏団
⑩場末のバンドネオン	歌・イサベル・デ・グラーナ
⑪日本のカナロ	歌・エルネスト・エレーラ
⑫ラ・クンパルシータ	オーケストラ
⑬ムンジンガ	全　員

□　第二部

①タンゴ・メドレー	オーケストラ
②ウノ	歌・イサベル・デ・グラーナ
③さらば草原よ	歌・エルネスト・エレーラ
④黄金の心	オーケストラ
⑤ミロンガのすすり泣く時（踊り）	オーケストラ
⑥刃物三昧（踊り）	オーケストラ
⑦小みち	歌・イサベル・デ・グラーナ
⑧夜明け	ピリンチョ五重奏団
⑨エル・ポルテニート	ピリンチョ五重奏団
⑩泣き虫	ピリンチョ五重奏団
⑪魅せられし心	歌・イサベル・デ・グラーナ
⑫放浪者の魂	歌・エルネスト・エレーラ
⑬ブロンズ	オーケストラ
○レ・ファ・シ	オーケストラ
○野　鴨	全　員

演奏が終わると同時に、会場は割れんばかりの拍手が起こり、“アンコール！”や“ブラボー！”の掛け声があちこちから飛び交う。しばし騒然とする中に名曲「ラ・クンパルシータ」が流れる。場内は再び静まり、最後の演奏に耳を傾ける。“ありがとうカナロ！、本当に素晴らしかった、さよならカナロ！”……胸が一杯になって言葉にならない。一緒に行った仲間も同じで、みんな高揚した顔でただ頷き合っていた。

多くの思い出を残し、カナロの１ケ月にわたる日本公演はこうして終わった。“シンプルでありながらインパクトの強い”～タンゴの真髄の何たるかを私たちに暗示して…。帰国は翌２９日（金）の夕刻。羽田空港のロビーで全員が名残り惜しげに手を振りながら、夕闇の空へ向けて飛び去っていった。



〈参　考〉この来日の際に録音されたLPには、次のものがある。（いずれも東芝）

◇ＡＳＰ-１０１０　ＣＡＮＡＲＯ ＥＮ ＪＡＰＯＮ（ｓｔｅｒｅｏ）

◇Ｏ　Ｒ-８１３３　ＣＡＮＡＲＯ ＥＮ ＴＥＡＴＲＯ ＫＯＭＡ ｅｎ ＴＯＫＹＯ（ live ）

（日本タンゴ・アカデミー会長）

～あれから50年～　フランシスコ･カナロ来日50周年記念特集

グローリア&エドゥアルド来日50年の功績

三浦 幸三

タンゴダンスの幕開け

2011年（平成23年）はフランシスコ・カナロ楽団来日50年の記念イベントが数々続いてタンゴファンの中で話題となったが、中でも今日現役で活躍している当時F・カナロ楽団と共に来日した一組の若きダンサー「グローリアとエドゥアルド」を忘れることは出来ない。

当時の来日楽団ショーのダンサーは演奏の添え物的存在でショーの主役は楽団そのものであった時代。いま50年の年月を得て、世界的にアルゼンチンタンゴを認知させダンスを普及させた原動力となったのは他ならぬカナロ楽団と共に来日し舞台を飾った「グローリアとエドゥアルド」の大きな活動があった。

フランシスコ・カナロ楽団来日

1961年（昭和36年）12月１日東京新宿コマ劇場に於ける初日公演に世紀の巨匠カナロの舞台を見ようと大観衆が集まった。当時のタンゴファンの耳にするタンゴはラジオとレコードを音源として聴き、特にフランシスコ・カナロ楽団の演奏は耳に馴染んでいたので永年待望のカナロ楽団来日公演に狂喜して演奏会場に足を運んだ。

会場には当時の皇太子殿下ご夫妻（現、天皇皇后両陛下）をはじめ、アルゼンチン大統領、駐日アルゼンチン大使、駐亜日本大使，等が臨席された。

公演は司会の高橋忠雄氏の「お待たせしました40年もお待たせしました・・・」の名文句に胸を熱くしてカナロ楽団の演奏に感激した。が、当時タンゴファンはタンゴを聴く、舞台を観ることにかけては熱狂的なファンであってもタンゴを踊るファンは皆無であった。数あるタンゴ同好会の中でも唯一タンゴを「聴く、踊る、演奏」を活動していたのは「タンゴすいよう会」だったようである。

1980年代以降タンゴダンスの世界が確立された以前から「グローリア&エドゥアルド」は､この「すいよう会」にも出向きタンゴレッスンを行っていた。そのグローリア&エドゥアルドが1961年フランシスコ・カナロ楽団と共に来日してアルゼンチン・タンゴの世界に電撃的なデビューを飾ってから50年、世界的にタンゴダンスも認知されてきたが、ダンス界には一部を除いてこの二人の偉業を知らないものも多い。

グローリア&エドゥアルド

ここでグローリア&エドゥアルドについては、日本における活動を中心として、お二人と関係者からの話をレポートする。

エドゥアルド・アルキンボウは1936年ブエノスアイレスの下町に生まれた。父親のパーティー好きはタンゴ楽団を家に招いて行われ、エドゥアルド少年も遊び友達の妹で10歳下のグローリアとタンゴ

を踊っていた。地域のコンクールで優勝したエドゥアルドは場末のスター的存在となり1960年ごろには、プロとして踊り始めた。その若き無名の二人のコンビを発見したのが‘タンゴ王’ことフランシスコ・カナロその人だった。一躍脚光を浴びてアルゼンチンのトップ・ダンサーとなり、その翌年1961年（昭和36年）グローリア&エドゥアルドはフランシスコ・カナロ楽団と共に初来日した。まだ14歳のグローリアの面影は日本のタンゴファンにも鮮烈な印象を残した。このときグローリアの母親はダンサーの名目で同伴、実際には踊らず娘の踊りを見ていたという。

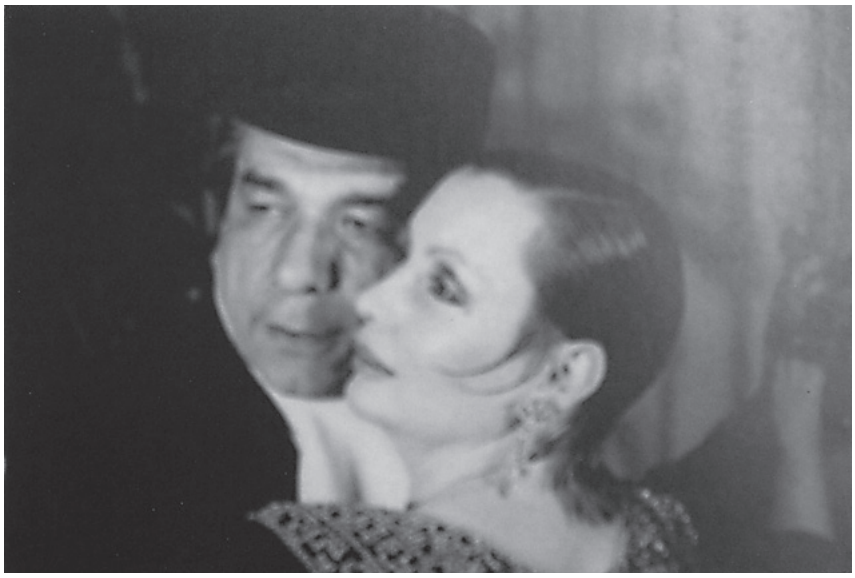
二人はこのタンゴショーを契機として、タンゴ楽団の演奏と歌、ダンスの三拍子が確立したとして、グローリア&エドゥアルド舞踊団を結成した。1966年には二人は結婚した。

1972年（昭和47年）フロリンド・サッソーネ楽団の来日公演でグローリア&エドゥアルドは二度目の来日、約三ヶ月各地でダンスを披露した。この折にフロリンド・サッソーネ楽団と歌手ビアンコと共にグローリア&エドゥアルドは「タンゴすいよう会」に来会しパーティーに華をそえて盛会であった。加えて三日間にわたりグローリア&エドゥアルドのタンゴダンスのレッスンを行い受講者には受講証を交付している。

1974年（昭和49年）にはカルロス・ガルシーア楽団と共に再び来日公演を行っているが、「タンゴすいよう会」の創立20周年にも来会して踊っている。しかしこの年はグローリアが妊娠していた為、グローリアに体型の似た踊り上手なダンサー・マルタを代役に仕立てたとエドゥアルドの後日談である。

タンゴ・アルヘンティーノ

1980年代のタンゴはダンスを主役としたタンゴショーを公演することで再び世界中の脚光を浴びることになった。当時のアルゼンチンが誇るトップダンサーばかり９組、グローリア&エドゥアルド、カルロス･コペス&マリア･ニエベス、ネリダ&ネルソン、ザ･ディンセルス他、錚々たるメンバーである。1983年のパリ、1985年のニューヨークとブロードウェイに於ける「**タンゴ･アルヘンティーノ**」の公演は大成功、続演に次ぐ続演で世界にタンゴを再び喚起させたのである。



1987年（昭和62年）日本でも行われたが、グローリア&エドゥアルドのカップルは極め付きの花形ダンサーであり演出家でもあった。ショーの成功と世界のタンゴ・ブームに刺激されアルゼンチン本国でもタンゴに対して見直され、それまで僅かだったタンゴ・ダンサーの数が一気に増えた。

1985年フランスに亡命していたアルゼンチンの映画監督、フェルナンド“ピノ”ソラーナスがアルゼンチンとフランス合作による映画「タンゴ～ガルデルの亡命」を発表した。グローリア&エドゥアルドはこのタンゴブームの鍵を握った映画に出演、エドゥアルドは主演女優マリー・ラフォレを含む全振り付けを担当した。

1988年（昭和63年）には日本外務省の企画した**’88中南米フェスティバル**の催しで東京と神戸の２ステージのみの舞台「タンギッシモ」公演で来日している。

舞台は究極のタンゴと称しネストル・マルコーニ楽団にダンサー三組、グローリア&エドゥアルド、モニカ&ルシアーノ、ミゲル・アンヘル・ソト&ミレーナ・プレブス、至高のタンゴ歌手ゴジェネチェとネリー・バスケスを加えた素晴らしい舞台であった。

1984年（昭和59年）、1988年（昭和63年）マリアーノ・モレス来日公演では

エドゥアルドの構成、演出、出演とタンゴダンスの中心的な活動が多くなってきている。

特に**1992年（平成４年）**の「タンゴ・タンゴ」と**1994年（平成６年）**の「コラソン・デ・タンゴ」はグローリア&エドゥアルド・タンゴ舞踊団来日公演でショーの企画立案、構成、演出、出演、監修までを一貫して行っている。ここではストーリー性のある構成になっており、ダンサー達も歌手も芝居をする演技力が求められ古き良き時代のブエノスアイレスの雰囲気を出していた。

海外でも1999年のマイアミ国際タンゴ大会、2000年からのロンドン・タンゴフェスティバル、2002年チューリッヒのタンゴ・フェスティバルなどに特別ゲストで参加している。また、世界を股にかけた舞踏活動の他、長年にわたり世界各国でワークショップを開催するなど教授活動も顕著で、多くの後進タンゴ・ダンサーを排出している。

タンゴダンス世界選手権アジア大会（日本）

また、**2004年（平成16年）**から始まったタンゴダンス世界選手権アジア大会では審査委員長として、2006年（平成18年）第３回大会、2007年（平成19年）第４回大会、2008年（平成20年）第５回大会、2011年（平成23年）第８回大会に来日している。大会では審査のほか、ダンサーとしてデモンストレーションで踊り、ワークショップでタンゴダンスの教授を行うなど今なお精力的に活動を続けている。大会では私も審査員を数回やらせて頂いたが、エドゥアルド審査委員長から学ぶことが多かった。

1980年代の「タンゴ・アルヘンティーノ」公演の成功を機にタンゴダンスをメインとしたタンゴブ

ームが続いている今のタンゴ界に於けるグローリア&エドゥアルドの功績は高く評価したい。

参考までに

2011年（平成23年）6月23日、「日本タンゴアカデミー」と「日本アルゼンチン協会」の共催で行われたセミナーでは「エドゥアルド&グローリアの見たタンゴの歴史50年」がエドゥアルドの編集による映像と共に語られたが、そのレポートが日本タンゴアカデミー会報**Tangolandia，2011秋号**に掲載されているので参照されたい。

他に、エドゥアルド&グローリアについては、「ペア結成50周年・タンゴを生きる巨匠の軌跡」を、雑誌「**Latina 2011年6月号**」にも特集が掲載されているので併せて参照されたい。

～あれから50年～　フランシスコ･カナロ来日50周年記念特集

フランシスコ・カナロ一行を羽田で出迎え、見送った想い出

脇田 冨水彦

なんと、あれからもう半世紀が過ぎてしまった。

当時明治大学の学生であった私は当会初代会長の故大岩祥浩さんが主宰するポルテニア音楽同好会の会員であった。そこでカナロ来日の情報を知らされ、レコードで聴くしかできないあの巨匠カナロを生で演奏を聴くことが出きるなんて夢のような話、でも率直には喜べない事情があった。甚だ私的なことで恐縮だがその年の春に父さんが倒産（洒落にもならない）して間もないからであった。一度聴けばそれでいいという訳にはいかない。チケット購入費を親にせがむわけにいかず持っているレコードを全部処分する覚悟を決めた。レコードは事情が変わればいつでも買い戻せるが、カナロの来日公演はそうはいかないこの機会を逃したら一生後悔するだろうと考えたからだ。島﨑会長にも２～３枚お世話になった記憶がある。それでも足らず、当時両国駅の側に、在学している学校と同じ名前の乳業の工場があり、夏休みを返上して涼しい思いをしながらアイスクリーム製造のバイトで軍資金を確保した。

いよいよカナロ一行の来日の日が来た。ポルテニア音楽同好会では大岩・島﨑両氏をはじめとする有志で一行を迎えることになっていた。もちろん成田空港など当時は存在せず羽田空港である。

手に手に「¡Bienvenido!」「¡Viva Pirincho!」などと手書きのプラカードを掲げて空港のロビーで一行を待った。しばらくしてどよめきが起きたかと思うと、写真でしか見たことがない、あのグラン・マエストロ“カナロ”を先頭にムシコ達が続々入場してきた。目の前を通過するとき手を差し伸べて握手をしてくれた瞬間、あの巨匠カナロが・・・あまりの感激で頭が真っ白になってしまい手の感触などはまるで覚えていない。ただピアニスタのオスカル・サビーノの手が異常に大きく５０年たった今でもその感触は覚えている。大きな手であった。

無事歓迎を終え、帰宅後夕食をとっていたらテレビのニュースでカナロ来日の模様が報道された。キンテートピリンチョのフェリシアをバックミュジックに一行がタラップを降りてくるところから我々が待つところまで出迎えの人たちに握手をしながらやってきた。その中に詰襟の学生服を着た私と握手する姿も一瞬ではあるが・・・「あっ、アッ！」と云うだけで家族に説明する間もなくニュースは終わってしまった。

確かテレビ局は４チャンネルだと思っているがその映像をもう一度見たいけれど当時の取材はビデオカメラではなく８mmか１６mmのフイルムカメラの筈、既に処分してしまったのだろうか。

さて、１２月１日より新宿のコマ劇場で公演が始まったがその模様は諸先輩にお任せするとして、噂には聞いていたけど、気になっていたのがキンテートピリンチョの演奏の時のマエストロの存在だ、あの小気味いいインテンポのリズムなのに５人を相手にマエストロはタクトを振るのだ。まさかと思っていたが本当だった。

数日経ったある日、公演終了後にオスカル・サビーノに会い何かプレゼントしたいと思っていた。

貧乏学生の私にはどうにもならなかったが思いついたのが我が「明治大学タンゴ研究会」のバッチである。目の前で詰襟から外し彼に渡すと、あの大きな手で小さなバッチを握りしめ喜んでくれた。私もうれしかった。

明治大学タンゴ研究会のバッチ（中村尚文氏から借用して写真撮影した）

いよいよお別れの日が来た。ポルテニア音楽同好会では歓迎の時とほぼ同じメンバーで見送ることになった。高山正彦さんや歌手の前田美知子さん達も見送りに来ていた。高山さんがOKサインのような格好でめがねの弦に指をやりながら何かを凝視していた。そして傍に居る前田美知子さんに「サビーノは襟に何を付けているんだ」「さあね～」といったやり取りが聞こえたので、そちらの方向に目をやるとサビーノのスーツの襟に私のあげたバッチが光っていたのだ。事情を知っている私だけが一人でニヤニヤしていた。

出発時刻が迫ったのか、ご一行は飛行機に搭乗のため移動を始めた。列の後方にバイレのグローリアとエドゥアルドがつづいていたので「グローリア！」と声をかけたら、彼女は立ち止り、こちらに向いて手を振ってこたえてくれたのだ。当時彼女は１７歳だったと記憶していたが実際は１５歳だったそうだ。その笑顔は舞台の時とは違ったあどけない可愛らしい笑顔だった。そのことがうれしくて、後で友人たちに散々自慢したものだ。

あれから５０年、２０１１/６/２３にカナロ来日５０周年を記念してラティーナ主催の「エドゥアルドとグローリアが見たタンゴの歴史５０年」と題した特別セミナーが催された。講演後、彼らと一緒に軽い会食をとる機会を与えられ、短時間ではあったが５０年前を思い浮かべながら楽しく過ごした。会食後別れ際になんとあのグローリアがアブラーソをしてくれたのだ。当時だったら私は気を失っていたに違いない。しかし今となったら、見事にオバサンになっていた。

あの感動と興奮を巻き起こしたコマ劇場も今は無く心の中に永遠に想い出だけが残っている。

Ya no queda.

中央筆者、右端は現NTA会長島﨑長次郎氏

～あれから50年～　フランシスコ･カナロ来日50周年記念特集

パリとニューヨークのカナロ

小林 謙一

巨匠フランシスコ・カナロの来日公演から早くも５０年が過ぎた。タンゴ「カナロ・エン・パリ」のタイトルどうり、この公演の成功がタンゴを欧州に広め、普及させ、またその後のニューヨーク公演によってそれまでタンゴには比較的冷淡だったアメリカにまでタンゴを認知させ、世界にタンゴを広める端緒となったのは周知のとおりである。ここではパリ公演をカナロの自叙伝「ミス･メモリアス」に沿って種々のエピソードを拾いながら視点を変えた展開を図ってみたい。

カナロのパリ公演のかなり前からも既にアルゼンチンの音楽家たちはパリを中心とした欧州で活躍をしていた。古くはエンリケ・サボリード、アルフレッド・エウセビオ・ゴビとフローラ夫人を筆頭とした人々である。このカナロのパリ公演当時は１９１３年からパリで活動していたセレスティーノ・フェレール（欧州とアルゼンチンを数多く往復してタンゴの大使と言われていた）を始め､パリではマヌエル･ピサロやタノ・ヘナロ、エドゥアルド・ビアンコらの名前が挙げられる。（バンドネオンの虎の異名を持つエドゥアルド・アローラスはカナロのパリ公演に先立つ約６ケ月前にこの世を去っていた）。

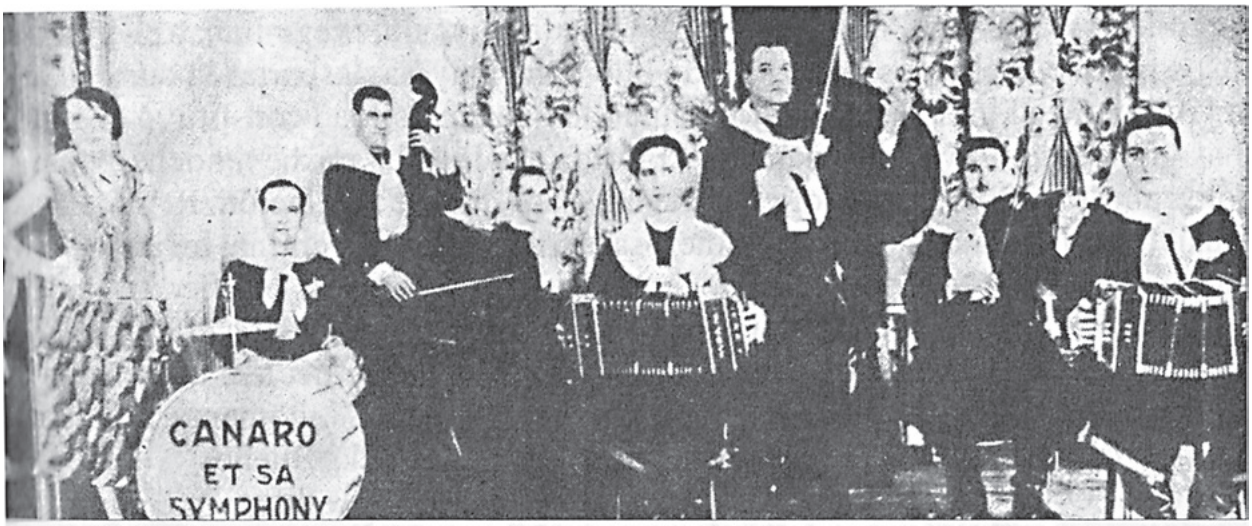
このような背景をもとにカナロは遠征メンバーを選ぶ訳だが、最初の記述のなかでは指揮及び第一ビオリンがフランシスコ・カナロ、第二ビオリンがアヘシラオ・フェラサーノ、バンドネオンにカルロス・マルクッチとフアン・カナロ、コントラバスとセルーチョ奏者としてラファエル・カナロを、そして打楽器にロムナルド・ロマーノを挙げている。何故かここに肝心のピアニスタの名前がないのには首を傾げる。ブエノス・アイレスの常打ちの「タバリス」にはミノットとルイス・リカルディを残すことを決めるのだが、遠征メンバーの人選にはかなり苦労をしたのではないだろうか？　勿論１９２５年４月２３日のパリの「フロリダ」でのデビューでは、フィオラバンティ・ディ・チコがピアノを担当しているわけだが、このあたりのカナロの心境は複雑なものがあったと思われる。この遠征では「タンゴを広める目的は持っていたが長く滞在する予定は立てていなかった」とあるので、慎重なカナロは膝元の固めのキー・マンをどちらにするか迷っていたのかも知れない。

それはさておき、この出立前の慌しい時に、親友のマヌエル・ロメロが自作の詩を携えてカナロを訪れ、素敵なレビューのために作曲してくれと頼むのである。遠征準備のため時間が無いと再三断っても諦めず、強引に頼まれて遂に作曲をして渡すのだが、これが有名なタンゴ、「ティエンポス・ビエホス」で、カナロが如何に友人を大事にしたかを物語るエピソードと言えるのではなかろうか。

とにもかくにも、漸く３月１０日にアルシーナ丸とルテティア丸の二隻に分乗して出発する。前者にはカナロと夫人、後者には残りのメンバーと分かれてマルセーユに向かうのだが、ルテティア丸はアローラスが恋人のフランス娘と共に以前フランスへ旅立った時の同じ船である。

パリについてから最初に難問が発生して公演開始が危ぶまれるのだが、このあたりの経緯は既にご承知のように、現地の音楽組合保護法によるもので、外来楽団に対する嫌がらせとも思える規制に悩まされるのである。この解決策として急遽考えられたのが、写真でよく見られる楽団員全部がガウチョの衣

裳を纏うことであり、またプログラムの中にマルティン・フィエロの詩の一節をレシタードしたり（これはフランシスコ・カナロの担当）歌や口笛、音楽をミックスしたプログラム構成で「アトラクシオン・カナロス」を標榜して、通常の現地楽団とは異なる点を際立たせてやっと許可を貰うのである。これに加えて、フェラサーノがカナロに内緒で同伴した恋人テレサ・アスプレージャにはギターの弾き語りをさせ、更に照明に数々の工夫を凝らして舞台効果を上げバラエティーのプログラム構成に徹してこの難局を乗り越えるのである。短期間にガウチョの服装を整えるのは、といった心配は当時の写真を見れば、それらしい白いパニュエロをスカーフとして首に捲き、足には長靴を穿かせるというだけのもので、さしたる問題とはならなかったようだ。もっともこのような音楽組合保護法といった基本的な問題の存在を出立前に何故把握していなかったのだろうかという疑問が湧くがこのあたりの記述は無い。



Mi Orquesta tal cual la presenté en París (23-4-1925) en el Dancing "Florida", Rue Clichy, Montmartre. （F.Canaro "Mis Memorias" より）

結果的にはこの舞台演出が功を奏して有名になり、新聞の批評でもパリという「光の都」の時の人「エル・オンブレ・デル・ディア」として一躍大々的に取り上げられることになる。このカナロの成功が呼び水となってパリのクラブではタンゴの演奏ではガウチョの衣裳を纏うことが正統のオルケスタということになり、この派生的な効果もあったのだろうか、それまでピサロたちが出演していた「エル・ガロン」は朝の６時まで営業を続けたようだし、また「エル・ガロン」よりは高級な店として評判だった「フロリダ」も同様朝の３時にざわめきを終えるといった繁盛ぶりであったと述べられている。この「フロリダ」は貴族趣味的な店であったようで、外国からも多くの著名人が来店して評判をとっていて、カナロもそれらの人々を見かけまた知り合う機会を持った。例えば俳優ではグローリア・スワンソンやアドルフォ・マンジューであり、また日本の早川雪舟もその名が見える。ビオリンの巨匠ハイフェッツがタンゴを優雅に踊る姿も見受けられたし、ピアノのアルトゥール・ルビンシュテインも常連だったと記されている。

「エル・ガロン」の現在（1996年）の姿。上部のファッサードだけが往時の姿を残しているが、タンゴと無関係の建物になっている。
（写真撮影：加年松　城至氏）

また世界中の女性の胸をときめかしたロドルフォ・バレンティーノもカナロと親しくした一人で合衆国へ来るように奨められ助力を惜しまないとまで言われたとある。この他マトス・ロドリゲスとも現地で会ってラ・クンパルシータの人気の高さを喜び合うシーンも書き添えられている。また時を同じうして装飾芸術の展示会もパリで開催されるが、ここにはアルゼンチンの誇る画家キンケーラ・マルティンも自作を発表する為にパリを訪れるなど、アルゼンチン・ムードの高まりは一層加熱して、パリのみならず欧州で活躍する同国人の鼻を高くさせたことは想像に難くない。

ここで話が若干逸れるが、ベニート・キンケーラ・マルティンについて触れてみたい。彼はボカの港町を題材に、そこに集う船や労働者たちをそのオリジナリティ溢れる筆致で描き進めた。アトリエをリアチュエロ川に面したラ・ブエルタ・デ・ローチャに構えて画作にいそしんだ。有名な作曲家フアン・デ・ディオス・フィリベルトとの親交も厚く、その関係からか彼の作曲したタンゴには「ラ・ブエルタ・デ・ローチャ」や、またこの偉大な画家に捧げた「キンケーラ」がある。後年になってはロベルト・アルバレスが「ア・キンケーラ・マルティン」を作曲して彼に捧げているが、これも多くのアルゼンチンの人々に今もって愛されている証左の一つと言えるだろう。先年訪亜の際ブエノス・アイレスで最も古く、格調高いカフェとして有名な「カフェ・トルトーニ」には彼の画と共に彼を模した人形が当時のアミーゴたちと一緒に一隅を占めていたように記憶している。

この多忙な合間を縫ってカナロはかなり精力的に各地を訪れている。この初めての旅の最初の到着地マルセーユではパリへの汽車を待つ間にモンテクリスト伯を幽閉した島（シャトー・ディフ）を訪れているし、パリに着いてからもノートルダム大聖堂、ルーブル美術館、ナポレオンの墓所、モンマルトルの丘などそれまで小説や、紀行、写真、映画などでお馴染みの場所を訪れている。また大分経ってからのことと思うが１０馬力のルノーまで購入してパリ市内のみならずのどかな田舎の風景も楽しんでいる。このカナロの好奇心の旺盛さと精力的な行動力には目を瞠るものがある。

中央に見えるのがシャトー・ディフ

ノートルダム大聖堂

その他面白いエピソードの一つとして書かれているのにマテ茶の一件がある。よく知られているようにアルゼンチン人にとってのマテ茶はアメリカ人のコーヒー、イギリス人のティー、日本人のお茶以上の文化そのもので、マテ茶を入れる壷、飲むためのポンピージャと呼ばれるパイプ、それに熱いお湯を詰めたポットは何処に行くにしても持ち歩く必需品である。現地へ行かれた方々は彼らのマテ茶を飲む様子を良く見かけておられると思うが、とにかく頻繁に飲むし、好きだし、飲むためには長距離バスの揺れる座席でもまことに器用に茶を淹れ，回し飲みをするさまに感心する。従って当然カナロ達は茶道具を極く当たり前の携行品としてマルセーユに上陸したわけだが、ここでフランス税関の官吏に見咎められることになる。彼らの好奇心の対象になった見慣れぬセット一式は質問責めに遭うが、

ここでカナロが説明のために敢えてアルゼンチン人の常用する無害な飲み物として実演して見せたのが騒動に輪をかけることとなった。税関の官吏たちはポンピージャで吸引する様を見て、フランスでは厳しく輸入禁止になっている阿片を吸う為の道具と思ったのである。結果的には多くの人々の手助けもあり、容疑も晴れてマテ茶の道具一式は没収の憂き目を見ずに済んだのだが、文化の違いを示すエピソードの一例であろう。会話でもフランス語とスペイン語の発音から来る行き違いから、飲み物や食べ物でボーイとの間のいざこざはかなりあったようだ。

現代のモンマルトル風景

「フロリダ」に出演中にニューヨークでの公演の話が持ち上がり、兼ねてから興味をもっていたカナロはそれ程飛びつくような条件ではなかったが、「クラブ・ミラドール」での八週間の契約を受容れることにする。パリでの活動を維持する為にピアニスタのルシオ・デマーレを呼び寄せ（これが後のトリオ・アルヘンティーナに繋がる）、ニューヨークへはフィオラバンティ・ディ・チコとフアン・カナロ、バテリアのロムアルドを連れ、更にブエノス・アイレスからはエルネスト・ビアンチとルイ・ペトルチェリと第二ビオリンにエミリオ・プグリッシを補充メンバーとし、また歌手にリンダ・テルマ、さらにローマ法王の前でタンゴを踊ってアルゼンチン・タンゴが何ら不道徳なところはないことを実証したダンスの名手カシミーロ・アインとそのパートナーを呼び寄せてニューヨークへ向かうのである。この船中でもリンダ・テルマが腰を痛めて出演不能となるアクシデントも出来するが、幸いにもニューヨーク在住のアルヘンチーナのカルメン・アロンソという歌手を捜し当ててピンチを脱する。その上アロンソはまた既に３年間もアメリカに在住していたので通訳としても有能であったし、二重の幸運に恵まれたこととなる。パリにおいても、アメリカにおいてもカナロは生来の強運の持ち主と言えるだろう。「クラブ・ミラドール」では毎日午後に踊りの指導講習の時間を設け、これも人気を高めたようだ。アメリカ公演の間にも多くの人との出会いがあって、「ミラドール」では舞台上のカナロに、来場していたラケル・メレから「ミロンギータ」を取り上げて演奏してくれるようメモが渡されたり、また多くのタンゴの傑作を作曲したフアン・カルロス・コビアンとめぐり会って旧交を暖め、禁酒令が敷かれていたニューヨークでは彼のガイドで人目を避けてとあるカフェに入り、そこでコーヒーカップに入れたウイスキーを飲んだりしている。

El tango en Nueva York. Conjunto que presenté en el "Club Mirador", Nueva York (septiembre 1926).

（F.Canaro "Mis Memorias" より）

この後パリに戻り、更にスペインへ赴いてトリオ・アルヘンティーノのデビューをサポートするなどの活動が続く。

～あれから50年～　フランシスコ･カナロ来日50周年記念特集

フランシスコ・カナロの パケット構造演奏スタイル

齋藤 冨士郎

1．まえがき

絵画、彫刻、音楽といった人間の感性にかかわる事柄を文章で表現するのは大変難しい。それでも絵画や彫刻は写真という視覚に訴える手段があるので文による記述はその分だけ楽になる。しかし音楽の場合は紙面から音は出てこないので、文章表現だけですべてを言い表さなくてはならなくなる*。結局のところ「カナロらしい」、「ダリエンソらしい」といった、分かったような分らない表現になる。このような表現が有効なのは読者の方で「カナロの音楽とはこういう音楽だ」、「ダリエンソの音楽とはこういう音楽だ」ということが頭に入っている場合には有効であるが、そうでない読者（勿論当会会員にはそういう人はいないが）にとってはまるで無意味となる。そこで本稿では特にフランシスコ・カナロに焦点を当て、どうやったらその演奏スタイルの特徴を音を出さずに記述できるであろうかということを考えてみた。

2．フランシスコ・カナロの演奏スタイルの４つの特徴

フランシスコ・カナロの演奏スタイルは大変分かり易いと多くの人々が言っている。例えば：

☆ **大変分かり易く、それでいて個性的なトーンを強調し、充実した演奏を聴かせる**（大岩祥浩:「アルゼンチン・タンゴ　アーティストとそのレコード」（(株）ミュージック・マガジン 1999年）

☆ **カナロの演奏は平均的ではあるが、まさにツボを心得たものだと言える**（石川浩司：「タンゴの歴史」（青土社　2001年、p.57）

☆ **フランシスコ・カナロは「タンゴは... 誰が聴いてもわかりやすく聴きやすい、そしてすぐにでも踊り出したくなるような演奏でなくてはならない」と口癖のように言っていたが、それが現実に音として表現されていた**（蟹江丈夫:ＣＤ「フランシスコ･カナロ楽団大全集」（東芝ＥＭＩ）付属解説）

しかしどのように分かり易く、聴き易いのかというとやはり実際にレコードやＣＤを聴いてみるしかない。では聴く以外にフランシスコ・カナロの演奏スタイルの特徴を把握することは不可能なのであろうか。結論を先に言うと、フランシスコ・カナロの演奏スタイルは次の4項目によって特徴付け

＊ 1950年代に東京工業大学の星野　愷（やすし）教授はシンクロリーダーと呼ばれる印刷媒体と一体化した磁気記録媒体に磁気録音を行う新しい磁気録音装置を発明した。利用者は再生音を聞きながら印刷物を読むことが出来る。シンクロリーダーはキヤノン（株）が商品化し、1959年に発売したが、商品としては成功しなかった。（キャノン史、（キャノン（株）、1987年））

られるのではないかと思われる：

（A）パケット構造演奏スタイル、

（B）いくつかの山の連鎖としての演奏スタイル、

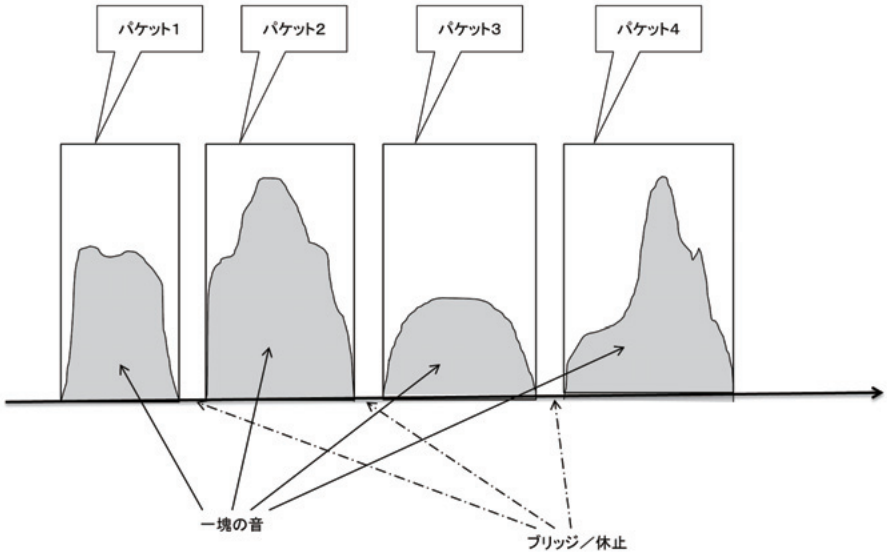
（C）中音域を主体とした楽音構成、

（D）変化が少なく、長く続くバイオリンのオブリガード。

以下、これらの４項目について順次説明する。

３．（A）パケット構造演奏スタイル

インターネットや電子メールではパケット通信方式という通信方式が採用されている。パケット通信方式では送信すべき情報・データを宛名の付加された複数のパケット（＝小包）に分割して送信し、最後にそれらを改めて当初の情報・データに再構成して受信者に送り届ける方式である。これに対して従来の固定電話やＦＡＸでは始めから終わりまで情報を切れ目なく送信する。パケット構造演奏スタイルとはこのパケット通信方式とのアナロジーに基づくもので、具体的にはここに示した図で表される。すなわちフランシスコ・カナロの場合、音楽は始めから終わりまで切れ目なく流れる（スタカートは切れ目とは考えない）のではなく、いくつかの塊（＝パケット）から構成され、パケットとパケットとはごく短いブリッジや休止符でつながれる。各パケットはそれぞれがほぼ完結した独立の音の塊になっており、殆どは第１主題と第２主題の繰り返しである。そして各パケットは見事なアンサ



フランシスコ・カナロ楽団のパケット構造演奏スタイル

ンブルで一糸乱れず終結し、間髪を入れず次のパケットがこれまた一糸乱れずに始まる。またendingも余分な装飾音やコーダをつけずにスパッと終わる。これは言うのは簡単であるが、やってみろと言われると至難の業ではないだろうか。かつてホルヘ・ドラゴーネが率いるフランシスコ・カナロ楽団の東京公演を聴いたことがあるが、演奏内容はフランシスコ・カナロのスタイルとは到底言えるものではなかった。ホルヘ・ドラゴーネには悪いが、彼はフランシスコ・カナロの演奏スタイルの特徴を全く把握していなかったと言わざるを得ない。

４．（Ｂ）いくつかの山の連鎖としての演奏スタイル

江戸時代から続く花火の「鍵屋」（正式には「（株）宗家花火　鍵屋」）の15代当主である天野安喜子氏がある所で行った講演によると、花火大会を成功させるコツはいくつかの山を作ることにあるという。すなわち始めから終わりまで花火のうち続けでは駄目で、そうかといって一発勝負も駄目で、人々が注目を集める山をいくつか用意するのだそうである。これは実はフランシスコ・カナロの演奏スタイルについても言えるのではないかと思う。すなわち１つの楽曲を構成するパケットの各々、あるいはいくつかのパケットが1組になって音楽の山を構成しており、それらの山があることで楽曲全体が「聴き易い」「分かり易い」ものになっている。このことが「ツボを心得た」という表現につながるのであろう。1930年代に入るとフランシスコ・カナロ楽団は管楽器やハワイアン・ギターなどを演奏に取り入れるようになり、これが我が国では極めて不評であるが、見方を変えれば、これも１つの曲目の中に山を作る効果を果たしているとも考えられる。１つの楽曲の中にいくつか山を作るということはカナロが生涯を通じて忘れなかったように思う。そして（A）と（B）は独立の特徴というよりは（A）＋（B）という形で取り扱った方が適当と思われる。

フランシスコ・カナロは60年近くも演奏・録音活動を続けてきた人であるから、そのパケット構造演奏スタイルも生涯を通じて変遷はある。そしてすべての演奏において明確なパケット構造が認識できるわけではないから、パケット構造は１つの典型として理解されるべきである。典型的なパケット構造演奏スタイルの代表としては1927年録音のEl Chamuyo（4296（e622）），Trago Amargo（4298（e796）），Abuelita（4367（e1422））、La Cabeza del Italiano（4396（e1805））などが挙げられるが、歴史的に見ればパケット構造は1923年録音のLa Chacarera（6913（1252））、Nubes de Humo（6915（1347），CTA-5057）、Pelele（6922（1348），CTA-5057）などにおいてすでに形を見せ始め、1924年録音のSombras…!（6975（1803））、1925年録音のTomasito（4089

(2886))、Langosta（4110（3080））、Viejo Rincon（4114（3201））などを経て、1926年録音のTrago Amargo（4153（3492））では上記の1927年録音のものと殆ど同じスタイルになっている。そしてこのスタイルは1930年録音のOtoño（4675（e6028））や1935年録音のHotel Victoria（4947（8208））を経て1956年録音のLa Barra Fuerte（52055（e21236））や日本録音のSentimiento Gaucho（TOCP 7568）に至る迄保たれている。

フランシスコ・カナロに限らず、どの楽団でも1929年あたりから歌入りが多くなるが、フランシスコ・カナロの場合は歌もパケット構造化して歌われており、歌が入ることによって楽団演奏の印象が薄まるのを補っているように見える。それでも1940年代の歌謡タンゴ全盛の時代になるとやはりパケット構造の印象は薄くならざるを得ない。こういうことが我が国で1940年代のフランシスコ・カナロはあまり人気が無いことの理由かもしれない。

一方、キンテート・ドン・パンチョ５重奏団やキンテート・ピリンチョでは発足当時から終わりまでパケット構造の演奏スタイルが保たれている。このことはカナロがパケット構造演奏スタイルこそが自分の演奏スタイルであると明確に意識していたことの証しではないだろうか。

５．（C）中音域を主体とした楽音構成

「中音域を主体とした楽音構成」とは厳密には本誌No. 5（2000）の高橋康弘氏（山形）の記事にあるようなスペクトル分析に基づいて言うべきことである。しかし筆者はそのようなツールを持ち合わせていないので、ここではあくまでフィーリングの範囲に話を止めたい。

「中音域」とは周波数で言えば最も人間に聴き易い400ヘルツから3000ヘルツあたりの音域であって、分かり易く言えば電話で使用される周波数帯域である。高音域や低音域、不協和音などを多用せず、人間が最も聴き易い周波数帯域で音楽を構成するのがフランシスコ・カナロの演奏スタイルである。このこともその演奏が「聴き易い」、「分かり易い」と言われる所以であろう。これが「個性的なトーン」と言われる所以であろう。「中音域を主体とした楽音構成」であることはアコースティック録音と電気録音とを聴き比べてみるとよくわかる。勿論、電気録音の方がより豊富な音響的情報を含んでいるのであるが、それでもフランシスコ・カナロの場合は電気録音とアコースティック録音の落差が他の楽団とくらべてそれほど大きくない。これはフランシスコ・カナロの楽音構成がアコースティック録音で記録・再生できる範囲の音を主体としているこ

との反映である(それは同時に管球式アンプによる再生にも適していることになる)。これとは反対に、例えばフランシスコ・ロムートの演奏を電気録音とアコースティック録音とで聴き比べるとその落差の大きさに驚かされる。このことはフランシスコ・ロムートの楽音構成はアコースティック録音では記録しきれない音の範囲を含んでいることを意味している。若しフランシスコ・カナロが意図的にアコースティック録音で記録・再生できる範囲の音で音楽を構成したのであれば、それは驚くべきことである。またそれが偶然の結果であっても、それはそれでフランシスコ・カナロに大きな成功をもたらしたと言える。

6.（D）高い音域で、長く続くバイオリンのソロ

上に述べた（A)、(B)、(C）と異なり（D）はフランシスコ・カナロの全生涯にわたってそうであったわけではなく、1920年代から1930年代にかけての特徴的な演奏スタイルと言った方が適当かも知れない。フランシスコ・カナロ楽団の1920年代のアコースティック録音を聴くと、バックに流れる、高い音域で、あまり音を変化させずに長く続く、か弱いとも言えるバイオリンの音色に気付く。現場を見たわけではないので何とも言えないが、これは恐らくはカナロ自身によるものではないかと思われる。そしてこの独特のバイオリンのソロこそがカナロの好みであり、「カナロ節」であったに違いない。確かにカナロ自身と思われるバイオリンの音色は弱々しく、名人芸の弓捌きでもないが、音そのものは美しく、耳に突き刺さるような音ではない。カナロは言われるほどにはバイオリンが下手ではなかったのではないか。

電気録音の時代になって、カナロがバイオリンを弾かなくなった後でも、彼に替わるバイオリンの名手がカナロ風に、しかしはるかに力強く、美しい音色で弾いている。また単なるオブリガードではなくメロディパートも含めた演奏になってきている。この最もよく知られた例は“Adiós Argentina”(G.1930）であろう。しかしこのようなバイオリンのソロ（＋メロディパート）は1930年代後半には影をひそめる。

7．むすび

フランシスコ・カナロの演奏スタイルについて、以前から考えていたことをまとめてみた。勿論これは全くの私見であり、多数の異論が続出するに違いないが、それはそれでタンゴへの理解を深める上で有意義なことである。筆者はＳＰレコードのコレクターではないので、音源としては復刻ＬＰ／ＣＤに、特にポルテニア音楽同好会とアルゼンチン・タンゴ愛好会の製作による復刻ＬＰ／ＣＤに全面的に依存した。この場を借りて両会に深甚の謝意を表したい。

《神戸発・上田・山本タンゴ写真館（8）》

―カルロス・ガルシーアと タンゴ・オール・スターズ日本公演から―

＜1974年　大阪公演＞

写真・資料提供：上田　登氏、山本　雅生氏

ステージ

ステージ

インカ・トリオ

マルタとエドゥアルド

カルロス・ガルシーア

ホセ・リベルテーラ

ドミンゴ・マテオ

フリオ・アウマーダ

アリエル・ペデルネーラ

ドミンゴ・モーレス

E.　フランチーニ（左）、オスバルド・ロドリゲス（右）

エンリケ・フランチーニ

エミリオ・ゴンサレス（左）、M.アブラモビッチ（右）

司会の谷川越二

カルロス・アルナイス（上右）

カルロス・ガルシーア（ピアノ 指揮 編曲）

1914年生まれ、12歳のときからプロのピアニストとなりました。現在はある大レコード会社の音楽顧問をつとめ、自身の経営するブエノスアイレス最高のタンゴのクラブ「ピエホ・アルマセン」で楽団をひきいています。タンゴ界きっての紳士として、あらゆる音楽家から敬愛されている人格者。編曲者としても演奏家としても、深い音楽知識と個性的なセンスをもち、豊かな色彩にあふれたタンゴの表現者です。

エンリケ・フランチーニ（バイオリン）

1945年から自分で楽団をひきいていました。タンゴ史上最高のバイオリンの名手で、少年時代から天才をうたわれていました。音楽以外のことはまったく構わないボヘミアンぶりで、みんなに愛されています。ブエノスアイレス交響楽団の第一バイオリンもつとめる最高級の技巧に加えて、熱っぽい感情をもりこんだソロは、聴くものを陶酔させます。キンテート・レアル（1964、66、69年）、フランチーニ＝ポンティエル楽団（73年）で来日しました。

オスバルド・ロドリゲス（バイオリン）

黒人の血をひいているので「ネグロ」と愛称がついています。アルゼンチンの東北部の亜熱帯地方の生まれ。14歳のときから首都ブエノスアイレスに出てきて、プロとなりました。現在ホセ・バッソ楽団の第一バイオリンをつとめ、豪快なソロで人気があります。同楽団で、1970年に民音招へいにより来日し、各地で絶讃をあびました。

エミリオ・ゴンサレス（バイオリン）

1954年にファン・カナロ楽団で来日しました。これは日本にやってきた最初のタンゴ楽団です。アルゼンチンで多くの一流楽団に加わって活躍し、現在はカルロス・ガルシーア楽団のソロ奏者です。作曲家としてもヒット・タンゴを生んでいます。

マリオ・アブラモビッチ（バイオリン）

クラシックではブエノスアイレス交響楽団のメンバーという一流の存在であり、タンゴではエクトル・バレーラ楽団のトップ奏者です。この楽団は民音タンゴ・シリーズ第2弾として1971年に来日し、アブラモビッチ（略称アブラモ）は演奏のほかに、コミックな演技（？）で大喝采をうけました。

カルロス・アルナイス（バイオリン）

今日もっとも多くの楽団に録音参加している、最高のスタジオ・ミュージシャンで、すべての指揮者から信頼されています。現在カルロス・ガルシーア楽団、そしてフロリンド・サッソーネ楽団の第一バイオリンをつとめ、後者で1966、72年の2回来日している。

ホセ・リベルテーラ（バンドネオン・編曲）

イタリア生まれですが子供の時にアルゼンに移住し、12歳の頃からプロとして活動しています。今日のもっとも高い技巧を持ったバンドネオン奏者で、作曲家としても優秀、みずから楽団をひきいてもいます。すばらしいテクニックと、全身をぶつけた奏法で人気があり、1967年に最高のタンゴ歌手エドムンド・リベーロと共に来日しました。

フリオ・アウマーダ（バンドネオン・編曲）

かってフランチーニ楽団でソロを弾き、現在はカルロス・ガルシーア楽団の独奏者です。技術的にも優れているのはもちろんですが、その深みのある音色、タンゴ的な感情表現はバンドンケオンの真髄を発揮したものです。作曲家としても高く評価されています。

ドミンゴ・マティオ〈バンドネオン〉

今日のタンゴ界の偶像といわれるアニバル・トロイロの楽団で、その巨匠トロイロの片腕として活動している名手です。またバンドネオン教授としても定評があり、多くの後進を育成している、蔭の実力者です。

ドミンゴ・モーレス〈バンドネオン〉

メンバー中の最年少で、明日のタンゴを代表するべきスターです。みずからトリオをひきいて、ステージやレコード、ＴＶで意欲的な活動をおこなっています。歌のタンゴでヒット曲を生んだ作曲家でもあります。

アリエル・ペデルネーラ〈コントラバス〉

1961年にフランシスコ・カナロ楽団で来日し、タンゴ・ファンを驚かせた力強い演奏家です。自分で楽団をひきいての活動も古くから行っており、日本でもレコードが出ています。伝統の息吹きを伝える名手です。

ケロ・パラシオス〈チャランゴ〉

アルゼンチン西北部、民俗音楽の宝庫トゥクマン州の生まれで、母親は民謡のスター歌手でした。メルセデス・ソーサやクリスティーナとウーゴなど、第一級の民謡歌手のギター伴奏者・編曲者として名をあげ、自身のグループもひきいています。チャランゴ演奏でも最高クラスの名手で、アルゼンチンのポピュラー音楽界でもっとも広く活動している才能あふれる音楽家です。1973年にジャズのガト・バルビエリ楽団に加わって来日しました。

ロランド・マルティネス〈ケーナ〉

アルゼンチンの最北端、インディオの伝統がもっとも強くのこっているフフイ州の出身です。すべての民俗楽器をこなし、14歳のときから演奏活動をしています。自身でもグループをひきい、多くのレコーディングをしました。

ノルベルト・ペレイラ〈ギター〉

「黄金のギター」二重奏とおなじく、アルゼンチンにおけるギター奏者の名産地（？）サンフアン州の出身です。16歳のときから多くのグループ・歌手とともに活動し、ソビエト巡演もしました。ケロ・パラシオスとのコンビは長く、スタジオ・ミュージシャンとしても独占的に仕事をしている売れっ子です。

グローリアとエドアルド

（マルタとエドアルド）

グローリアをパートナーとして1960年にプロとしてスタートしました。グローリアとエドアルドはフランシスコ・カナロ楽団と共に来日し、帰国後はTV出演などでどんどん人気を高めスターとなりました。1972年には民音招聘のサッソーネ楽団と２度目の来日をしました。今回タンゴ・オール・スターズに加わって来日する直前に、グローリアとエドアルド夫妻に赤ちゃんができたことがわかり、なにしろ初めての子供ですから、ご懐妊のグローリアは大事をとって公演をみあわせることになりました。そこで、エドアルドが沢山の候補者の中から選びぬいて、パートナーとして日本に紹介するのがマルタ・エリサ・アダモーリ嬢です。どうぞよろしくご声援ください。

INTERVIEW

藤村　省介（福岡市）さん

聞き手　島﨑　長次郎

島﨑　お元気ですか。毎年開かれる新春の「全国会員の集い」（銀座ラフィナート）にはよくおいでくださいましたね。しかも皆が喜ぶアルゼンチンのワイン持参で…。

藤村　ええ、年に一回のことですから、できるだけ全国の皆さんと交流したいと思って…。

島﨑　その折にはゆっくりお話しが出来ませんでしたが、今日は昔話などいろいろお聞かせください。福岡の藤村さんのことは、F. カナロが来日した昭和３６（1961）年頃に、今は亡きベテラン愛好家の寺田太作先輩から耳にしておりまして、どんな方なのか、とずっと思っておりましたところ、このアカデミーの会員だったことがわかり、嬉しく思いました。

チャカリータ墓地のＡ．マガルディー碑の前で

［寺田先輩とＯＴＶの「フリエンネ」］

藤村　それは光栄です。寺田さんと言えば、本当に熱心な愛好家でしたね。キロガが好きで。私も福岡市内の喫茶店で耳にしたキロガの「センティミエント・マレーボ（憂愁の伊達男）」に打たれ、ある時東京の北区田端にあった“タンゴ床屋”「アモール」に寺田さんを訪ねたことがあります。たしか中南米音楽の中西義郎さんの紹介だったように思います。その際に、私が福岡市内の中古レコード店で見つけたフアン・ギドやオルケスタ・ティピカ・ビクトルの話をしましたら、目を輝かせながら是非とも譲ってほしいと懇願されました。

島﨑　それはどんな曲目か覚えていますか。

藤村　いや、よく覚えていないのですよ。たしかこちらが郷土だという早稲田の学生さんが、帰省をされた折に寺田さんから依頼をされたといって取りにこられました。そのときあげたのは４枚ほどで、すべて美麗なカムデン盤だったように記憶していますけれど…。

島﨑　その中の２枚がティピカ・ビクトルで、しかも、なんと同じ超名盤の「フリエンネ」だったのですよ。なぜそれを私が知っているのか不思議でしょう？、種を明かしましょうか…。実はその時の早大の学生は宮崎玲二と

いう男で、大岩さん主宰のポルテニヤ音楽同好会で私が初代の編集長をしていた当時、私の助手をしてくれた人物だったのです。その時の宮崎君の言葉によると、“藤村さんは寺田さんのお使いで来てくれたお礼だ、といってダブッていたもう一枚の「フリエンネ」を私に無造作に下さった”と報告があったのでよく覚えているのです。しかも、その宮崎君がこの後に就職して別れるとき、お世話になったお礼だといって、今度はそれを私にプレゼントしてくれたのです。ですから、５０年前に福岡市内であなたが発掘した天下の名盤が、いま私のレコードケースの中で眠っているのですから本当に奇遇というか、不思議な縁を感じます。よくこんな凄いレコードが出たものですねぇ、昔の福岡で…。

藤村　え！、それ本当ですか。これはうれしい。昭和３０年頃、市内には３軒ほど中古のレコード店があって、たまたまその一軒で１０数枚のＳＰ外盤を見つけたのでした。なぜこんなものがあったのか、考えて見ますと、炭鉱が全盛を極めていた戦前から戦後の時期に、炭鉱主などの富豪が当時の福岡市内には何人もいて、羽振りもよかったので、多分そのあたりから放出されたのでは…、と考えます。まあ、よかった時代だったというべきなのでしょうが、ともかくあの頃はタンゴに燃えて生きていたという感じでした。なにしろ若かったし、なにか夢に溢れていましたから…。

島﨑　そうでしたね。お互いに…。さて、このへんで少し生い立ちなどを伺いましょうか。

［全盛を誇った東京のタンゴ喫茶店］

藤村　わかりました。私は昭和８年３月の博多の生れで、旧制中学をへて大学も地元という生粋の博多っ子。あの忌まわしい戦災も一通りは経験しました。今年は東北の大地震で未曾有の大災害が起きて忘れることの出来ない年になりましたが、私の父が生まれた明治２９年も三陸地震で大変だったと聞きますし、私の生まれた昭和８年もまた、同じ三陸の大災害で記録に残る被害が発生したとされ、なにやらやりきれない思いがします。私はその父のあとを継いで、目下「正光印刷」という会社を経営しています。大学時代は昭和の２０年代の後半で、ようやく敗戦の痛手も癒えつつある時期でしたから、シャンソンを楽しみ、クラシックを鑑賞するなどし、人並みに熱い恋も経験しました。このままではタンゴとは無縁かと思っていたところ、幸いにも？、見事な失恋に遭遇し、そのあまりにも深い悲しみに沈んでいた時、そっとその傷をいやしてくれたのが、実にタンゴだったのです。

丁度その頃、NHKのラジオ放送で高橋忠雄さんが「ラテンアメリカ音楽」の放送番組を持っておられたので、それを聴いて手紙を出したところ、すぐに雑誌「中南米音楽」の中西義郎さんを紹介くださり、早速に上京し、新宿のタンゴ喫茶「コロムビア」でお目にかかり、これをきっかけに、一気に、そして大きく私の人生はタンゴへ傾斜を始めるのでした。ときに昭和２７（1952）年、雑誌「中南米音楽」創刊の直後だったかと思います。

島﨑　私にも思い当たることがあります。カッカとあの頃は燃えまくっていましたね。思いは募るのに、来日楽団はないし、レコードも乏しかったので余計に…。だからレコード・コンサートというといつもどこも超満員で…。

藤村　そうでしたね。福岡でも同じでした。寺田さんと交流させていただいたのもその頃のことですし、静岡におられ、雑誌「中南米音楽」で中南米音楽ニュースを執筆し、われわ

れを啓蒙してくださっていた木村喜久弥さんにもいろいろとお世話になりました。木村さんは猫の研究家としても有名で著書までお出しになるほどでしたが、私も猫が好きで話が合いました。そういえば、高山正彦さんも猫がお好きと伺いました。なんでも一時は１２匹もいたとか、これは凄いと思いましたよ。

島﨑　東京ではタンゴ喫茶巡りをよくされたようですが、それはいつ頃のことですか。

藤村　大学を卒業した年ですから、昭和３０(1955)年頃でしたね。印刷の勉強をするため、およそ一年間を横浜で暮らしましたが、日曜日になるとあちこちのタンゴの聴ける店に、せっせと通ったもので、ハシゴもしばしばでしたよ。神田の「ミロンガ」、渋谷の「ルポ」、新宿の「モデルン」、それに「モカ」、池袋の「らん」など、とにかく独身で親元を離れて自由の身、好きなタンゴを心行くまで聴けたのですから、これに優る喜びはありません。今考えると、わが人生で最も輝きに満ちていた時代だったと思います。

その頃です。中でも忘れがたいコンサートがありました。場所は池袋の「らん」で、クリスマス・イブということで夜の１２時からの徹夜のコンサートになりました。これは注目の高山正彦さんの解説によるテープによるものですが、でとにかく店内は満員、熱気に満ち溢れる感じで延々と続き、プログラムの全６０曲が終わったのは、なんと払暁のことでした。“もはや戦後ではない”という経済白書が発表され、日本が躍進を開始する時代背景もあって、どこか全体が弾んでいるような空気が漂っていて明るかった。そしてタンゴ・ファンには学生も多く、とにかく若々しく活気にあふれていましたですね。

島﨑　まさにわれらの青春時代ですね。ところ

で、あなたは実に７回もアルゼンチンに行かれた、と聞いておりますが…。その印象などをお聞かせください。

[今ひとたび～憧れのブエノスの旅]

藤村　はい、そのとおり７回になります、が、その都度詳細な記録を取っているわけではないので、はじめの方のことはオボロゲになりました。最初は平成になって間もない時期で、福岡の同好会の冨田氏を誘い、それに私の女房の３人旅でした。初めてのことで、街のたたずまいに始まり、薄暗いバルやタンゲリーアなど、とにかく見るもの聴くものすべてが、感激感動の連続でした。女性ガイド（メルセデス熊谷）がとてもよく、すべてをお任せして存分な観光が出来ましたが、やはりチャカリータの墓地が最も印象に残っています。私は歌が好きなもので、ガルデルやマガルディの像の前にたたずみ、しばし胸の熱くなるのをどうすることもできませんでした。

これをきっかけに以後６回、地元の愛好家仲間と連れ立っては感激のツアーを続けたのですが、後半の３回（1997、2000、2008）で聴いた店や、楽団などは次のとおりです。

店は「ミケランジェロ」「サボール・ア・タンゴ」「バー・スール」「ビエホ・アルマセ

ン」「セニョール・タンゴ」「エル・ケランディー」「ラ・ベンターナ」「タンゴ・ポルテーニョ」など、出演者は、H. サルガン、U. デ・リオ、R. ファレス、A. スタンポーネ、Sto. マジョール、J. コランジェロ、A. ポデスタ、M. グラーニャ、V. ルーケ、C. ラサリ、E. フランコなど。この中でとくに２００８年５月の「ビエホ・アルマセン」で聴いたルーケの歌がなんとも強く印象に残りました。ステージに上がる前は高齢のためなのか杖を使っていましたが、オンステージになった瞬間、杖を離し、ピンと背筋を伸ばし表情豊かに熱唱するのです。さすがの芸人根性です。曲は「エル・チョクロ」、実に“粋な”歌でした。「ラ・ベンターナ」では故人となったラサリ楽団が出演して例の歯切れのよい演奏を聴かせていましたが、その第３バンドネオンを弾いていたのが日本人で、なんと最近当アカデミーの会員になった平田耕治さんだったのは嬉しかったですね。そのときは、多分これが最後の旅になるだろうと思っていたところ、最近になったら、８０才になる前に今一度行きたいものだと、しきりに考えるようになりました。今度は是非キロガのお墓参りがしたいのです。どなたかその場所がわかったらお教え願えないでしょうか。やはりタンゴの都だけに、まだまだ魅力は尽きません。

そういえば、２００８年の際の印象を一緒に行った仲間の医師（毛利雅彦氏）が「ドクトルは飛んだ」と題する本にされたので以前お送りしましたが、ご覧頂きましたね。

島﨑　ええ、楽しく読ませていただきました。よく現地の情景が描かれていて…。それにしても再訪を願うその強い気持ちがあなたの今の元気の源泉になっていますね。コレクションなどお好きな傾向というと歌ものになりますか。

「ラ・ベンターナ」でのラサリ楽団、
右端のバンドネオンは平田耕治（ＮＴＡ会員）

藤村　手元のレコード棚には若干のＳＰを含めてＬＰなど、およそ１０００枚くらい、ＣＤが２５００枚ほど、年齢からいってそろそろ考えなくては、と思うものの、さて、となると決断が出来ず困っています。同じような思いの方も少なくないと思うので、どこか一括

して収蔵し管理してくれる所があるとありがたいのですが…、いざ、となるとなかなか難しいですね。これは。

私の好みはやはり歌で、キロガ、シモーネ、に始まり、ガルデル、マガルディ、コルシーニなど。楽団ではどちらかというと４～８人くらいの編成のオーソドックスなものが好きですけれど、やはりブエノスの中古店で求めたものというと、どうしても歌ものが多くなってしまいましたね。自慢するほどのものはそうありません。まあ、強いて言うなら向こうで探して買ってきた２００枚ほどのＬＰくらいかと思います。

[楽しみな機関誌、全国会員の集い]

島﨑　今は地元での定期的な催しはないのですか。また、今後への夢とか、アカデミーに対する要望などがあれば…。

藤村　今はやっていません。実は昭和２９（1954）年のフアン・カナロ楽団の来日時に、中南米音楽愛好会を結成し、これ以降レコード・コンサートを延々と続けましたが、時代につれて会員も減少したりして２２６回で打ち切りました。その間には高橋忠雄さんや、早川真平、藤沢嵐子さんなど錚々たる方々においでいただいたり、想い出は尽きません。そのころのメンバーで現在日本タンゴ・アカデミーの会員になっているのは、現在佐世保在住の森本良二さんを始め、柴田繁（福岡在住）さん、それに山根洋（横浜在住）さんがおります。タンゴを絆に結ばれた仲間は、本当によいものです。この九州在住のアカデミーの現在会員は、残念ながら６名に留まっています。なんとかしてこれをせめて２桁台にし、アカデミー主催の「リンコン（懇親会）」か、普及のための“タンゴの集い”ができたら嬉しいと思います。青春時代のあの感激、今ひとたびの夢が実現できたら…、さぞ楽しいでしょうねぇ。

機関誌も毎回楽しみに読ませてもらっていますし、いろいろと会員が楽しむばかりでなく、昨今は一般の人々も巻き込んでタンゴを広めようという催しも企画されるなど、役員の方々のご苦労は多いことゝ思いますが、タンゴの唯一の全国組織ですから、是非一致協力のうえ、さらに会を盛り上げるよう頑張っていただきたいと思います。会員も間もなく２００名を突破する情況とか、本当に嬉しい限りです。明春の「全国会員の集い」は楽しみにし、また銀座に伺いますから…。

島﨑　来春の「集い」は３月４日（日）になりますのでお間違いのないように、是非お出かけください。タンゴを聴いている限り私たちはいつも青春です。お互いに頑張りましょう。

今日はありがとうございました。

（2011.11.23収録）

～その５　ラウル・ラビエ

吉村　俊司

はじめに

今回取り上げるのは歌手のラウル・ラビエ。1950年代からプロとして歌い始め、現在も第一線で活躍する大歌手だが、タンゴのソロ歌手として発表したレコードの多くは1970年代に集中している。アストル・ピアソラ、オラシオ・フェレール、エラディア・ブラスケスをはじめとする同時代の作詞・作曲家の作品も多く取り上げており、この年代を代表する歌手の一人といえるだろう。

略歴

ラウル・ラビエ、本名ラウル・アルベルト・ペラルタは1937年8月22日サンタフェ州ロサリオ生まれ。十代のころから地元で歌い始め、1955年にはブエノスアイレスに上京、ラジオ・ベルグラーノやラジオ・エル・ムンドに出演するようになる。

1957年、アルヘンティーノ・レデスマの後釜としてエクトル・バレラ楽団の専属となるが、同楽団ミュージシャンのストライキの影響で脱退し、同僚だった歌手ロドルフォ・レシカらと≪ロス・アセス・デル・タンゴ≫を結成。さらに1960年にはエクトル・スタンポーニとの共同楽団を結成するが、いずれも短期間で終わっている。

1960年代前半にはタンゴ以外にも活動の場を広げ、スペイン語によるビート・ポップを軸に据えたアイドル志向のテレビ番組≪エル・クルブ・デル・クラン≫にパリート・オルテガ、チコ・ノバーロ、ジョニー・テデスコらとともに出演、ポール・アンカの曲などを歌う。番組は大ヒットし、南米各地でも放映され、同名の映画も制作された。

一方で、アンヘル・ダゴスティーノ楽団の最後のレコーディング（1963年）に参加し、テレビではオラシオ・サルガン、オスバルド・フレセドとも相次いで共演、1965年にはロベルト・パンセラの伴奏によるタンゴ・アルバム『RAUL "POLO" LAVIE』（RCA VIK LZ-1118）をリリースするなど、タンゴ歌手としての活動もやめた訳ではなかった。

1960年代半ばには俳優としての活動も開始。1968年前後にはメキシコに渡り、ミュージカル『ラ・マンチャの男』に主演したほか、リベルタ・ラマルケとも共演している。

帰国後は歌手および俳優として幅広く活躍。以下に紹介するアルバムを発表し、リサイタルやテレビ、映画、舞台への出演も数多い。

1984年にはアストル・ピアソラ五重奏団の二度目の来日に帯同。また1985年から90年には『「タンゴ・アルゼンチーノ』公演にも参加し、世界中を回った。2001年にはセステート・スール、フアンホ・ドミンゲスとともに来日している。

1970年代のラウル・ラビエのレコード

以下、1970年代のレコードを発表順に紹介していこう。

...el negro Lavié - Tango（CBS 9076）

CBS 9076

【曲目】1-1 TE QUIERO, CHE!* 1-2 GRISETA* 1-3 LA ÚLTIMA GRELA* 1-4 SOLEDAD ... LA DE BARRACAS** 1-5 CHIQUILÍN DE BACHÍN* 2-1 TENGO LOS DÍAS CONTADOS* 2-2 JUSTO EL 31** 2-3 FLOR DE LINO** 2-4 LOS MAREADOS* 2-5 MAÑANA ZARPA UN BARCO* 2-6 BALADA PARA MI MUERTE*

【メンバー】Raúl Lavié（vo）, * Walter Ríos y su orquesta, ** El Tango Trío

【発表】1970年

1965年の最初のアルバムのレーベルはRCAビクターだったが、1970年にCBSから、ソロ歌手としては２枚目のアルバムとなる本作をリリースする。曲目はピアソラ＝フェレールの作品４曲（1-1、3、5、2-6）、リオス、ラビエとラビエの妻ピンキーの合作による2-1、残りは1940年代までの作品である。若々しくも堂々たる歌声は風格があり、1-3、5での語りの表現力もさすが俳優らしく素晴らしい。一方で1-2などは素晴らしい声量ではあるものの、曲想を考えるとやや力みすぎと感じられる部分もある。

バンドネオン奏者ワルテル・リオスによる伴奏は、曲によってパーカッションやエレキ・ギター、エレキ･ベースも効果的に使いつつ、全体としてはバランスの取れた好演。1-4、2-2、3はバンドネオン、ギター、コントラバスによる≪エル・タンゴ・トリオ≫の伴奏が味わい深い。なお録音はモノラル。

RAUL LAVIE - CACHO TIRAO / LA CIUDAD DE TODOS（CBS 9171）

CBS 9171

【曲目】1-1 PARRILLERO - ATRÁS QUEDÓ TU AUSENCIA 1-2 GATO SOLITARIO 1-3 EL ABUELO SENTADO* 1-4 CHINA HOY, PIBA MAÑANA* 2-1 LAS MISSES* 2-2 TRISTE CARROUSEL DE LA MENTIRA* 2-3 DE PRONTO TODO ES AYER* 2-4 PRELUDIO PARA UNA GUITARRA ROTA 2-5 LA CIUDAD DE TODOS*

【メンバー】Raúl Lavié（vo）, Cacho Tirao（g）, * con acompañamento de Conjunto

【発表】1971 ～ 2年ごろ

大ギタリスト、カチョ・ティラオとの共同名義によるアルバム。収録曲はすべて、映画音楽、脚本、俳優などで活躍するビクトル・プロンセト（Víctor Proncet）とティラオの共作で、実質的には3人のプロジェクトによるアルバムと言えるだろう。タンゴ、バルス、ミロンガ以外にサンバ、チャカレーラなどのフォルクローレのリズムも交え、都会的な情感と土臭い魅力が交錯。ラビエの歌唱もさまざまなスタイルを歌い分け、ティラオの演奏ともども非常に充実している。やや地味な内容ながら名盤。これもモノラル録音。

RAUL LAVIE（Microfon PROM-467）

Microfon PROM-467

【曲目】1-1 SUR 1-2 BARRIO DE TANGO 1-3 EL PESCANTE 1-4 CARMÍN 1-5 LA MARIPOSA 2-1 BANDONEÓN ARRABALERO 2-2 SOLEDAD 2-3 LA VI LLEGAR 2-4 DIVINA 2-5 LEJANA TIERRA MÍA

【メンバー】Raúl Ravié（vo）, Walter Ríos（bn, arr, dir）

【録音】1973年

【発表】1974年

レーベルがCBS系列内のミクロフォンに移り、録音もステレオになった。日本でも『タンゴ魅惑の歌声』（日本フォノグラム, FDX141）としてリリースされており、日本人には最もなじみのあるラビエのアルバムといえるだろう。ただ、ガルデルから1940年代までのタンゴのみで占められた曲目は、この時期のラビエとしては異色と言えるかもしれない。

ワルテル・リオス編曲、指揮によるトリオ（バンドネオン、ピアノ、エレキ・ベース）の伴奏は軽めで洒落ていて、ともすると重くなりがちなラビエの歌声とうまくバランスが取れている。1-5、2-4などの難しい曲も見事に歌いこなしており、古いタンゴを新鮮に聴かせてくれる好企画である。なお、本盤は何度かCD化されており、現在も入手が容易である（Sony 2-493595）。

PORQUE AMO A BUENOS AIRES（Philips 6347348）

Philips 6347348

【曲目】1-1 LA BICICLETA BLANCA 1-2 EL CORAZÓN AL SUR 1-3 TODOS LOS DÍAS 1-4 PORQUE AMO A BUENOS AIRES 1-5 EL GATO NEGRO 2-1 LOS PÁJAROS PERDIDOS 2-2 BALADA PARA UN LOCO 2-3 VOLVER A BUENOS AIRES 2-4 EL ECO DE NUESTRA SOLEDAD 2-5 EL VALS DEL VIUDO

【メンバー】Raúl Ravié（vo）, Orquesta dirigida por Juan Carlos Cirigliano

【発表】1978年

前作から少し間が開いているが、その間にレコード会社はCBS系列からフィリップスに移籍、伴奏もフアン・カルロス・シリリアーノ指揮によるオルケスタがつとめるようになった。1984年のピアソラとの来日公演でも印象的だったピアソラ＝フェレールの1-1やピアソラ＝トレーホの2-1、そしてピアソラ＝フェレールの決定版2-2が収められているほか、エラディア・ブラスケス、当時新進の女性シンガーソングライターであるサンドラ・ミハノビッチ、ビルヒリオ・エスポシト、ハイロ＝フェレールらによる同時代の作品で占められている。

伴奏はバンドネオン、ピアノにエレキ・ギター、エレキ・ベース、ドラムスなどが加わるが、曲に合ったセンスの良い演奏。ポップス的な歌い方も交えた幅広い表現が楽しめる。本盤もCDとしてもリリースされた実績はあるらしいが（Philips 510501-2）、現在はほとんど出回っていない模様。

EL DIA QUE ME QUIERAS（Philips 6347399）

Philips 6347399

【曲目】1-1 EL DÍA QUE ME QUIERAS 1-2 RUBÍ 1-3 PEQUEÑA 1-4 UN PUEBLO PARA LOS DOS 1-5 BUENOS AIRES NADA MÁS 2-1 INVIERNO PORTEÑO 2-2 CONSEJOS INOLVIDABLES 2-3 PEDACITO DE CIELO 2-4 FRANÇOIS Y MARGOT 2-5 ESE MUCACHO TONY

【メンバー】Raúl Ravié（vo）, Orquesta dirigida por Juan Carlos Cirigliano

【発表】1979年

前作からあまり間をおかずに発表されたこの作品、何と言ってもピアソラの「ブエノスアイレスの冬」にエラディア・ブラスケスが詞をつけた2-1が注目に値する。一見無謀にも見える試みも、ラビエの見事な歌唱によって叙情的な素晴らしい作品に結実している。このほか、タイトル曲1-1をはじめとした古い曲からブラスケスやチコ・ノバーロ、オスバルド・タランティーノらによる同時代の作品まで、比較的ソフトな印象の曲目を中心に収められている。シリリアーノの伴奏も弦セクションをふくらませるなど、美しい仕上がり。

ADIOS NONINO（Philips 6347499）

Philips 6347499

【曲目】1-1 ADIÓS NONINO 1-2 QUÉ ME VAN A HABLAR DE AMOR 1-3 LOS MAREADOS 1-4 UN MOMENTO 1-5 VIVIR EN BUENOS AIRES 2-1 EL GORDO TRISTE 2-2 JACINTO CHICLANA 2-3 POR LA VUELTA 2-4 EL TITERE 2-5 MI PIANO Y VOS 2-6 GRACIAS BUENOS AIRES

【メンバー】Raúl Ravié（vo）, Orquesta dirigida por Juan Carlos Cirigliano

【発表】1981年

1980年代に入ってからリリースされた作品であり、「70年代タンゴ」からは外れてしまうが、本作までを一連の作品として取り上げたほうがよいと思われるので、ここで取り上げることとする。

前作の「ブエノスアイレスの冬」に続いてのピアソラの器楽曲にブラスケスが歌詞をつける試みは、ピアソラの最高傑作のひとつ「アディオス・ノニーノ」であった。これについてはピアソラ本人がラビエに書いた手紙を引用しておく。

> *きみの＜アディオス・ノニーノ＞を聴いてラウラと泣いた。エラディアの歌詞ができたとき、これを歌えるのはきみしかいないと話していたんだが……レコードの伴奏の音楽家たちも素晴らしい。よろしく言っておいてほしい。本当にありがとう。これで反タンゴ党も口を閉じざるをえないだろう*
>
> *（『アストル・ピアソラ　闘うタンゴ』斎藤充正・著、青土社、p. 416）*

この手紙の文面が物語るとおり、歌唱、伴奏とも素晴らしい出来栄えである。シリリアーノはピアソラの≪コンフント・エレクトロニコ≫のメンバーだったこともあり、同グループでの「アディオス・ノニーノ」のアレンジをモチーフにしたような部分も聴かれる。

また、ホルヘ・ルイス・ボルヘスとポル・ネブールによる1-6、そしてボルヘスとピアソラが1965年に発表した『エル・タンゴ』からの2-2、4が取り上げられているのも興味深い。1-6、2-2は叙情的で深い表現である一方、2-4はスピード感あふれるフュージョン的な解釈となっている。これら以外は1940年代から同時代までの作品が取り上げられている。曲想はバラエティーに富み、聴き応えのある一枚である。

その他の音源、復刻音源など

アルバム単位の復刻については文中にも述べたとおり。なお、1965年の『RAUL "POLO" LAVIE』は、同時期のダゴスティーノ楽団との録音などとともにCD化されている（BMG, 74321 31429-2）。

1970年代の録音を含む編集盤としては、2009年にリリースされた『 LOS ELEGIDOS』（Sony, 7556142）が現在出回っている。これには『...el negro Lavié』、『RAUL LAVIE』からの楽曲が、1960年代の録音（上記の『RAUL "POLO" LAVIE』復刻版CDの収録曲からの楽曲）とともに収録されている。

おわりに

1950年代のタンゴの世界を知りつつ、1960年代の外来音楽の浸食にも直面、それどころかその流れを作る側の一人となり、さらにはテレビ、舞台、映画とタンゴを超えた幅広いエンターテイナーとしての活躍を経たラビエにとって、改めてタンゴに真摯に向き合ったのが1970年代だったのだと思う。歌う曲の選定にしても、歌唱表現の手法にしても、彼なりの問題意識が反映されているものであることは間違いないだろう。特にピアソラ＝フェレールやブラスケスらの作品については、同時代の最も優れた表現者の一人としての役割を担い、十分に果たしていたと言えよう。

ただ日本においては、彼のエンターテイナーとしての側面や同時代のレパートリーが、実体として広くタンゴファンの間で共有される機会はなかなか少なかったのではないだろうか。日本で当時唯一リリースされた『タンゴ魅惑の歌声』は確かに良いアルバムだが、これだけでは「古いタンゴを新鮮な感覚で歌う歌手」という以外の側面はなかなか伝わらなかったのではないかと思う。そういう意味では、筆者自身今回1970年代の彼のアルバムを改めて聴きなおし、個人的にも多くの発見があった。

一方で彼自身、近年は古いタンゴばかりを取り上げたアルバムや、ミロンガ、カンドンベ中心のアルバムなどをリリースしており、1970年代とはまた違った魅力を見せている。

参考文献

- ラプラタ音楽雑記帳　#037 熟年タンゴ歌手の挑戦：ラウル・ラビエのカンドンベ・アルバム（http://tanimon.com.ar/laplatazakki037.htm）
- Todotango.com - Raúl Lavié（http://www.todotango.com/english/creadores/rlavie.asp）
- 同 - Rodolfo Lesica（http://www.todotango.com/english/creadores/rlesica.asp）
- Wikipedia - Raúl Lavié（http://es.wikipedia.org/wiki/Ra%C3%BAl_Lavi%C3%A9）
- 同 - El Club del Clan（http://es.wikipedia.org/wiki/El_Club_del_Clan）
- アストル・ピアソラ　闘うタンゴ、斎藤充正・著、青土社
- アルゼンチン・タンゴ　アーティストとそのレコード、大岩祥浩・著、ミュージック・マガジン

タンゴ　もう一つの祖国…

欧州で活躍したタンゴの使節たち（補足Ⅱ）

芝野　史郎

タンゲアンド誌28号で紹介いたしましたホセ　センティス及びダヨス　ベラの生没年月日については分かっておりませんと書いておきましたが、理事の高場将美さんより懇切丁寧なご助言を給わりましたので、ここに氏のお許しを得て、頂戴いたしましたものを紹介させて戴くことに致します。

私はP.C.は勿論、IT関係と言うものについては何一つ理解しておりませんので、インターネット上のWikipediaなるものを知りません。友人が時々知らせてくれる程度にしか利用しておりませんので、唯、自分の集め得たレコードをソースに、時には解説書を頼りにしている程度でありますので間違った情報もあるかと存じます。この点も高場さんはじめ諸兄のご叱正を賜りたく存じます。

以下は高場将美さんがお知らせ下さった手紙の部分です。

Ⓐ José Sentis 及び　Dajos Bélaについて

（以下引用文）

ダヨス・ベラにつきましては、ドイツ語版が詳細です（英語版はそれを非常に短くちぢめたものです）。わたしはドイツ語はわからないに等しいのですが、仕事なので、大昔に古本屋で買った小さな独英辞書をたよりに一生懸命にたどっています。音楽家の経歴ですから、そんなにむずかしくないですしね。

それによりますと、彼はもとの国籍はロシア帝国で、1897年12月19日にキエフ（現ウクライナ）に生まれました。母親はハンガリー人です。子どものころからヴァイオリンを学び、９歳でリサイタルをしたとか(だれの経歴にもそんなことが書いてありますね)。第１次世界大戦に従軍し、終戦後、まずモスクワで、その後ベルリンで本格的に音楽・ヴァイオリンの教授につきました。ベルリンで勉強しながら、カフェなどで演奏活動をはじめ、ダヨス・ベラという、ハンガリー風の芸名をつけました（ダヨスは、お母さんの旧姓とのこと)。彼はユダヤ人で、本名は、レオ・ゴルツマンLeo Goltzman というのですが、当時はハンガリーやルーマニア風の音楽が人気があったので、それらしい名前にしたんですね。すぐにレコード会社からスカウトされ、初録音ではTake Banescu という芸名を名乗りました（ルーマニアの名前ですかね)。レコード・レーベルによって、それどころか、同レーベル内でも、数種の芸名を付けたみたいです。Arpád Városz, Giorgi Vintilescu等々……。ジャズ・ミュージックのときは、ザ・オデオン・ファイヴ、クライヴ・ウィリアムズなど、いろんな名前を使いました。やがてはダヨス・ベラの名前だけになり（楽団名はいろいろですが)、サロン・オーケストラでは、パウル・ゴドヴィンPaul Godwin、マレク・ヴェーバー Marek Weber と並ぶ人気だったとのことです。

1933年にナチスが権力を握ったので、ユダヤ人だった彼は国外に逃れて活動、1935年にアルゼンチンに来て、エスプレンディー放送、エル・ムンド放送などで大物指揮者の待遇を受けました。喫茶店《リッチモンド》などにも出演。ハンガリー人の歌手も同行していたようですから、ドイツ歌謡曲などもやったでしょう。

（じつは、わたしは1938年版のアルゼンチンの放送年鑑みたいなものをもってまして、そこに彼がかなり大きく紹介されていたので、そのころ来亜公演したんだと思ってました）

その後、ずっとブエノスアイレスに住み、70年代にベルリン政府の招待で一度だけヨーロッパに帰りました。 1945年から仕事がなくなり、ホテルのコーヒーハウス、後には結婚式やクルーズ船上で演奏していたらしいです。亡くなったのは、1978年12月５日、コルドバ州のラ・ファルダLa Falda です。そこは山間で空気がよいので、療養とか静養に行く人が多いですね。ブエノスアイレス市、ラ・タブラーダ地区のユダヤ人墓地に埋葬されています。

（アルゼンチンに行く以前のこと、より詳しくお知りになりたければ、ご-一報ください。がんばってドイツ語から訳してお送りします。また、インターネット上の別の情報源で、たぶんドイツのコレクターらしき人が英語で書いている経歴も、短いですが、すごく内容が濃いです。もちろん正確と思われます）

ほとんど役に立たないと思いますが、Wikipediaのディスコグラフィ（！）は下記の通りです。

Select Discography

- *Waitin´ For The Moon / Adieu, Mimi (Shimmy)*（Odeon 0-1921）,
- *Humming / Bummel-Petrus (Intermezzo)*（Odeon A 71942）, 1921
- *Radio-Tango / Opern-Foxtrott in Potpourri-Form*（Odeon 49039）, 1925
- （als Kapelle Merton）: *Dinah / Sevilla*（Beka B.6071）, 1926
- *Who ? ("Du ! Wann bist du bei mir ?") / Zwei rote Rosen, ein zarter Kuss*（Odeon 0-2087）, Januar 1927
- *Heinzelmännchens Wachtparade / Dornröschens Brautfahrt*（Odeon 0-2101）, 1927
- *Santa Lucia / Venezia*（Odeon 0-2122）, 1927
- *Hund och Katt / Ref. sång*（Odeon D-4948）, 1929
- *Kennst du das kleine Haus am Michigansee / Anna Aurora*（Odeon D-4975）, 1929
- （als Odeon-Tanz-Orchester und Gesang): *In Sanssouci, dort wo die alte Mühle steht*（Odeon O-11301）, 1929
- （mit Leo Frank（Gesang））: *Im Rosengarten von Sanssouci,* 1930

ホセ・センティスの情報も Wikipediaにありますが、英語版はほとんどアルゼンチンのサイトtodotango.comの引き写しです。フランス語版は、より詳しいところもありますので、これらをつき合わせてデータだけ記しますと――

スペインのタラゴーナに1888年６月11日生まれ。クラシック音楽とピアノを本格的に学ぶ。グラナードスの教えを受けたともいう。やがてパリに行きサロンで演奏するプロになる。そのころ、ふたりのアルゼンチン人の友人になった。ひとりは、アルベルト・ロペス・ブナャールドー兄はアルゼンチン国民音楽の先駆者の大作曲家になる人だが、彼は1903年ごろからパリで遊んでくらしていた（プロ並みにピアノが弾けたと思われます）。タンゴ『ジェルメーヌ（ヘルマイネ）（Germaine』の作曲者。もうひとりは、ガウチョ文学の名作をものする以前の若き日のリカルド・グイラールデス―――文学者だが、タンゴのダンスを教えたりもしていた。

ふたりにタンゴの魅力を教えられ、センティスは、ヨーロッパでタンゴを演奏する先駆者になった（第一次大戦以前に）。パリ・マンドリン・クラブも指揮した。 1920年代末から「スペイン音楽］（タンゴ、

パソドブレ、ボレロ、ジプシー音楽など）の楽団をひきいて活動。ベネズエラ、キューバ、ＵＳＡにも行ったとのこと。亡くなったのは、フランスの地方の町で、1983年３月20日。墓地はパリのモンマルトルにある。奥さんはフランス人オペラ歌手だった。センティスについては、いまのところ、これ以外の具体的データはありません。*（引用終わり）*

Ⓑ**Adalbert Lutterについて**

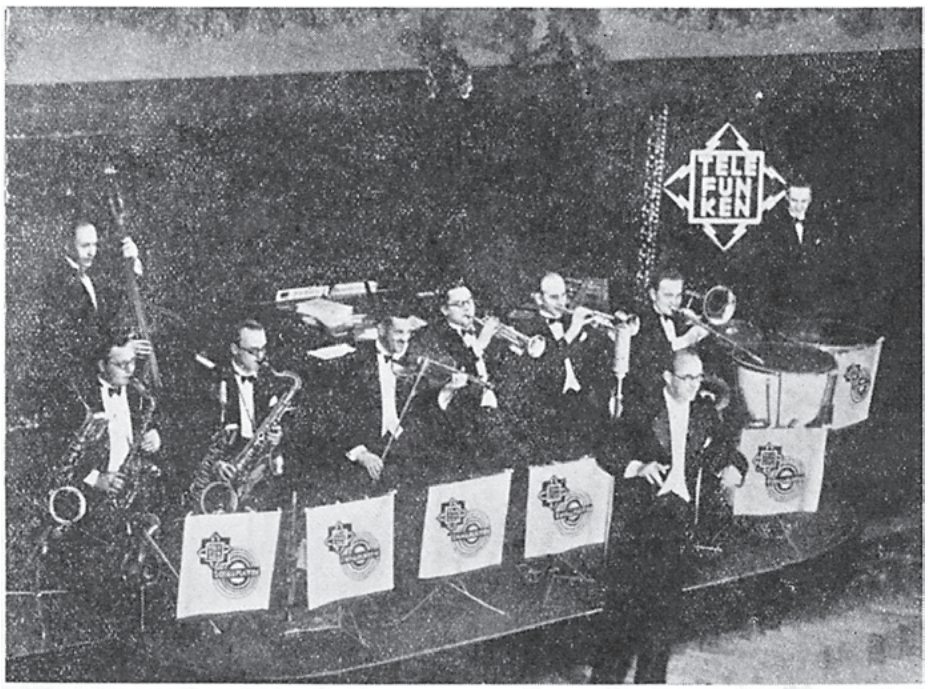
（以下引用文）

Adalbert Lutter（1896-10-20 Osnabrück － 1970-7-28 Berlin）

ピアニスト。1922～28年は、ラテンアメリカにいた（いつ、どこになどはまったく不明です）。帰ってきてから、ハノーヴァーで小さなバンドを編成する。 1932年から、ベルリンに出て、サロンやカフェで演奏する――ウィリアムス・ホール、ヨーロッパ・パヴィリオン、カフェ・ベルリンの屋上庭園など。そして、テレフンケン・レコードのハウス・オーケストラ（いわゆる「専属楽団」でしょう）になって、ソロ歌手たちの伴奏も含めて、たくさんのレコードを録音する。

第２次大戦が終わると、東ベルリン（ロシア領）の国立放送のハウス・オーケストラを編曲指揮。1961年に退職。

以上ですが、ほかに、1934年にボクサーがテーマの劇映画の音楽を担当しています。また、1951年には15分の音楽映画の音楽の指揮をしています。こちらの映画は西ドイツ制作なので、変ですが……。ドイツではCDになって、かなり発売されているようですが（タンゴは少ないでしょうが）、ジャケット写真を見ると、指揮棒をもっていますので、テレフンケン専属になったころから、ピアノは弾かず指揮だけしていたのではないでしょうか。



（團樂絃管ータツルの中奏演）

ヨーロッパの彼のファンの投稿を読んでいたら、「すてきな楽団で、当時のサロン・オーケストラの最高級のものなのに、今日あまり話題にならない。あんまりたくさんレコードを録音したので、特徴がボケ

てしまったからだろうか？」とか、「あのころ、このオーケストラのレコードでいつも踊っていたのが懐かしい！」といった声がたくさんありました。*（引用終わり）*

アダルベルト　ルッターについては高場さんの文章にほんの補足程度ですがハーレクインH.Q. CD127にこんな記事がありました。

1920年にルッターはハンブルグ船舶航路の南米航路に楽団員として乗船したとあり、高場さんの情報の1922年～ 1928年にラテンアメリカに居たと言うことに一致します。この折にブエノス　アイレスやモンテビデオに上陸して楽団のピアノ演奏者として参加していた（らしい）です。

そのためかこの頃のタンゴを彼の楽団のレペルトリオとするものが多い（と言ってもレコーディングは僅かでした）ようです。

1932年３月22日にドイツのテレフンケン　コンツェルンがウルトラフォン（1928年創設）レコード部門を吸収合併してテレフンケン　レコード部門を開設した際、専属楽団としてルッターは起用されました。以来1934年～ 35年にタンゴのレペルトリオとしてラ　クムパルシータ、ア　メディア　ルス、センティミエント　ガウチョ、フェア、アミガーソ、パト、パト　クアッ　クアッ、夜のタンゴ等々のレコーディングをしております。

この楽団のバンドネオンはフレッド　デンプケFred Dönpke、ウォルター　ペルシュマンWalter Pörschmann（のちにオスカー　ヨースト楽団に入る）だったそうです。

Ⓒ**Barnabás von Géczy及びMarek Weberについて**

（以下引用文）

Barnabás von Géczy（1897-3-4ブダペスト（ハンガリー）－1971-7-2ミュンヘン（ドイツ））

ヴァイオリニスト、オーケストラ・リーダー。子どものころ、ブダペストにて、あるプリマ（ジプシー楽団のヴァイオリン独奏者への敬称）にヴァイオリンを習う。やがてブタペスト音楽院に学び、イエノー・フバイ　Jenö Hubay*（1858 － 1937）の個人教授を受ける。

＊この人のドイツ名は、オイゲーン・フーバー Eugen Huber で、ドイツ人なのですが、ハンガリー名を名乗るほうを選んだとのこと。父親もブダペスト歌劇場のコンサート・マスターだったので、バンガリーのほうが故郷だと思っていたのでしょう。当時は、クラシックのヴァイオリン演奏家・作曲家・教授として、国際的に有名だった人らしいです。（たかば）

1919年には、ブタペスト歌劇場のコンサート・マスターになる。

しかし国が貧しく、経済的に苦しかったので、1922年夏に、ハンガリーを出る。新聞で音楽家募集の広告を見て、ノルウェーのトロンハイムTrondheimに向かった。ヴァイオリン１本と、自分の技量への信頼だけを頼りに……。でも、広告を出した楽団のリーダーには信頼が置けないことがわかったので、自身でトリオを結成して演奏活動をはじめた。ピアニストは、同地で知り合ったエリッヒ・カシュベックErich Kaschubek で、後にフォン・ゲッツィのオーケストラのメンバーになる人。また、この地でゲッツイは奥さんとも知り合った。

＊カシユーベックー――名前の読みかたに自信がないですが――は、1937年ごろゲッツィが録音した、なかなかすてきなメロディのタンゴ『メキシカン・セレナーデ』の作曲者です。ということは、ずっとゲッツィと一緒に活動をつづけていたんですね（たかば）。

ゲッツィの実力はすぐに認められ、ストックホルム歌劇場オーケストラや、アメリカ合衆国のフィラデルフィア交響楽団からも加入の誘いがあった。しかし結局、いちばん高い給料を提示された、ベルリンのワイン・ハウス《トラウベTraube》（ブドウの房）に行くことにした。この店は、ベルリンの中心であるライプツィーガー通りにあった。

1925 ～ 37年は、ベルリンの交通の要所であり、歓楽街の中心にある、ベルリンでもっとも豪華なホテル《エスプラナードHotel Esplanade》のハウス・オーケストラだった。ゲッツィのヴァイオリンの名人芸はすばらしく、「５時のお茶の時間のパガニーニ」と呼ばれた。また、ゲッツィ自身による編曲のよさと、メンバーの質の高さにおいて、当時の他のサロン・オーケストラをはるかに抜いた存在だった。

この間に約７００枚のレコードを録音。レーベルは、ホモコード、パルロフォン、テレフンケン、エレクトロラ。

1932年には、夕刊紙の読者投票による「青いヴァイオリン」賞を受賞。

1933 ～ 34年は、ゲッツィのアンサンブルは、ベルリン民衆劇場の「キャバレー・マチネー」に出演。

1938年、教授Professorの資格を授けられる。

1942年、国営放送の番組「午後が終わるとき――前線と家庭のためのメロディ」に出演。

1944年、プラハ（現在のチェコ）にて、国営放送の「ドイツ・ダンス＆エンターテインメント・オーケストラ」を、ピアニストのヴィリー・シュテッヒWilli Stech（1905 － 1979）と共同指揮。これはジャズのビッグバンド･スタイルのオーケストラだった。このオーケストラでの最後の出演は、1945年４月。

戦争のため、ゲッツィは、ミュンヘンに逃れ、結局そこにずっと住んだ。1952年に、同地で新しいアンサンブルを結成し、ホリドール･レーベルで録音した。またカフェ《ルイトポルトLuitpold》のハウス･オーケストラとなった。

Marek Weber（1888-10-24リヴィウ（現在ウクライナ）―1964-2-9シカゴ（アメリカ合衆国））

ヴァイオリニスト、オーケストラ・リーダー。生地は、ポーランド領だった時代にポーランド文化・ユダヤ人文化の中心のひとつだった由緒ある古都。ポーランド分割で、オーストリア領になり、レンベルクLembergというドイツ語名で知られていた。この市で音楽教育を受けたマレークは、1906年にドイツ（ヴァイマール共和国）のベルリンに来て、名声あるシュターンStern音楽院でヴァイオリンの高等課程を学ぶ。

２０才で最初のオーケストラをつくり、ベルリンの《エーデン・カフエEden Cafe》と《エスプラナード・ホテルHotel Esplanade 》で演奏。1914年には《ホテル・アドロンHotel Adlon》のハウス・オーケストラとなる。

やがて、レコーディングのためのサロン・オーケストラを編曲指揮するようになる。1919 ～ 25年は《パルロフオン》レーベル（後のドイツ・グラモフオン）、26 ～ 33年は《エレクトローラ》――（アメリカ合衆国でプレスされたものも、録音はすべてベルリン）。

彼は、モダンなジャズは好きでなかったが、サロン・オーケストラのリーダーとしては、時にはジャズの風味のついたダンス音楽を演奏しなければならなかった。とにかく、サロン・オーケストラとして、ダヨス・ベラと並ぶ代表的存在だった。

伝説によれば、ステージでは、メンバーがジャズを演奏するのは放任しておいたとのこと。その間、彼はバーで飲んでいた。

また、指揮者のジャズ嫌いにもかかわらず、メンバーにはドイツの代表的なジャズ・ミュージシャンが入っていた。黒人のトランペッター、アーサー・ブリッグスArthur Briggs、ビッグス・バイダーベックに心酔して、クラシックのピアニストからトランペットに転向したロルフ・ゴールドシュタインRolph Goldstein、バンジョー奏者マイク・ダンツィ Mike Danzi など.

リフレイン歌手は、ロシア出身のレオ・モノッソンLeo Monosson、アウスティーン・エーゲンAustin Egen などだった。

ベルリンの数々の一流ホテルでの演奏とレコーディングで多忙だったが、1933年にナチの台頭により、国外に脱出する。イギリス、スイスなどを経て、1937年にアメリカ合衆国に移住。

アメリカでは「ラジオのワルツ王Waltz King of Radio 」と呼ばれた。世界大戦終了後は、農場を買って引退生活に入った。引退しても、一時は《カーネーション》コンデンス・ミルクの会社が提供するラジオ番組の専属だったこともあった。*（引用終わり）*

Géczyについては戦前テレフンケン　レコードに録音した３曲以外は見るべきものは無いと言っても過言でないでしょう。尤も、ホモコード、パーロフォンに録音していた二、三曲は良い対照となる

かも知れませんが。

戦後も録音は少しあって東芝エンジェル、日本ポリドールで若干出ております。いずれもコテコテのドイツタンゴで見るべきものはありません。

Marek Weber（マレーク　ウェーバー）はゲッツイより先輩格で、第一次世界大戦後にいち早く楽団を組織し、パーロフォン（１２吋盤）に録音し沢山のレコードを出しております。

この二人は20歳代までに東欧に居たジプシー楽団に興味を抱いたのでありませんか？　私は彼らのボーイングにジプシー風を感じるのです。尚、故大森　茂氏によるとフォン　ゲッツイのビオリンはストラディバリ、ウェバーの楽器はガダニーニの銘器であったそうです。

そして最大の興味はパシオン　クリオージャやア　メディア　ルスに見られる闊達なバンドネオンの音色は誰であったのかと言うことであり、当時のバンドネオン弾きとして上ってくる名前の推定をH.Q.　C.D127に見出しました。

この解説書に引用されているマリア　ドゥンケル博士（女性でしょうか）の研究によりますと、最初のドイツ人バンドネオン奏者はワルテル　ペルシュマン（1903年ライプチッヒ生まれ）で、彼はリオ　デ　ジャネイロ、モンテビデオ、ブエノス　アイレスで活動した後、1925年5月にはベルリンに戻ってすぐにマレーク　ウェバー楽団に入団したとされています。あの初期のタンゴ4曲（ラ　クムパルシータ、パシオン　クリオージャ等）はこのペルシュマンでないかと考えます（いずれも録音日は1927年６月１日です）。また当時のフアン　ジョサス（Juan Llossas）楽団にも属していたと言われます。

この人達に対して本場アルゼンチンより、バンドネオンの名手が続々と訪欧して来ました。マヌエル　ピサロをはじめ、ミゲル　オルランド、ミゲル　ロサリオ、ルイス　レモンディニ、マリオ　メルフィ等々です。

ここに欧州におけるタンゴの花が一斉に咲いた訳です。

会長よりもっとヨーロッパのタンゴ楽団のことを書けとの要請を受け、まだまだ多数の楽団も知っておりますが、あまりに冗長すぎて切りがありませんので、次回は、今まで取り上げなかった、弱小楽団とか珍しいレコードなど、いわば“落穂ひろい”的な視点での記事をもって、一応打ち切らせてもらう予定です。

Marek Weber y su Orquesta　　（作成：芝野　史郎）

レーベル	レコード番号	マトリス	録音年	曲名	曲種	作詞作曲（作者）	歌手	日本発売レコード	備考
Parlophon	P.1618	Z6618	1924～25	La Montería	Tango	I.Guerrero	―	12吋	
		Z6636	"	Idée	Tango	Korla	―	"	
〃	P.1691	6801	"	Batacazo	Tango	Manuel Pizarro		"	
		6802	"	El Estandarte	Tango	Manuel Pizarro			
Electrola	E.G.569	BDR4656^{I}Δ	1927.6.1	A Media Luz	Tango	Edgardo Donato	―	21021	昭和6年
		BDR4657^{I}Δ	"	Pasión Criolla	Tango	S.Grupillo		21021	〃
〃	E.G.986	BL4469^{II}Δ		Buen Amigo	Tango	J.de Caro	―		
		BL4470^{II}Δ		Alma Mía	Tango	Sando Panizzi			
〃	E.G.559	BDR4654^{II}Δ	1927.6.1	Angustia	Tango	Pettorossi		JA-191	昭和7年
		BDR	"	La Cumparsita	Tango	G.H.Matos Rodríguez			昭和6年
日ビクター	21021	BDR4657^{I}Δ	1927.6.1	A media Luz	Tango	Edgardo Donato			昭和6年
		BDR4637^{I}Δ	"	Pasión Criolla	Tango	S.Grupillo			"
〃	V2	BW629^{I}Δ		Mi Nostalgio*)	Tango	José Sentís			昭和7年
		BW630^{I}Δ		Paquita	Tango	Nicolino Milano			"
〃	V11	BL4470^{II}Δ		Alma Mía	Tango	Sando Panizzi		私の恋人	〃
		BL4469^{II}Δ		Buen Amigo	Tango	J.de Caro		仲のよい友達	〃
〃	V14	BL4478^{I}Δ		I kiss your Hand, Madame	Tango	Ralph Erwin-Friz Rotter		奥様お手をどうぞ	〃
		BL3931^{III}Δ		Twilight(Crepúsculo)	Tango	Eduardo Bianco		黄昏	〃
〃	V18	BL3926^{II}Δ		The Old Gang(Son Grupos)	Tango	G.H.Matos Rodríguez		昔友達	〃
		BL3927^{I}Δ		Quack Quack(Pato Cua-cua)	Tango	Rodríguez		家鴨が鳴きます	〃
〃	V27	BLR4679^{I}Δ		Noche en la Volga	Tango	Sab		ヴォルガ河の夜	昭和7年
		BLR4680^{II}Δ		Sinful and Sweet	Tango	Stafford		憎らしいほど綺麗な奴	〃
〃	V62	OB4393^{II}□		Tonight	Tango	Lesso-Valerio	con refrán		〃
		OB4392^{II}□		Zigeuner, You have stolen my heart	Tango	Egen-Grothe	con refrán	ジプシーの唄	〃
〃	V64	BNR817^{I}Δ		Black Eyes	Tango	O.Strock	con refrán	黒い眼	〃
		BNR816^{II}Δ		Russian Fox Trot	F.T.	O.Strock	con refrán	ロシアのフォックストロット	〃
〃	JA191	BDR4654^{II}Δ		Augustia**)	Tango	Pettorossi		オーガスティア	昭和8年
		BUR5652^{I}Δ		*	Tango	May		君よりも美しく	〃

*)レーベルにはNostalgiaではなく、このように記載されている（編集部）

**) この曲名は明らかに「Angsutia」の誤りと思われるが、レーベルにはこのように表記されており、日本語のタイトルも「オーガスティア」になっているので、訂正せずにそのまま記載した（編集部）

以後、アルゼンチン　タンゴとして見るべきものはありません

日コロンビア	M644	CO32350		La Cumparsita	Tango	Rodríguez		ラ　クムパルシータ	1942年
		CO32352		Jalousie	Tango	Jacob Gade		ジェラシー	〃
〃	M645	CO32353		Caminito	Tango	Peñaloza-Filiberto		カミニート	〃
		CO32344		A media luz	Tango	Lenzi-Donato		淡き光に	〃

Barnabás von Géczy mit Seinem Orchester　　（作成：芝野　史郎）　　2

レーベル	レコード番号	マトリス	録音年	曲名	曲種	作詞、作曲（作者）	歌手	日本発売レコード	備考
独テレフンケン	A1459	19149	1934年	Tuyo es mi amor	Vals	Rodolfo Carrera			
		19147	"	Blanca Flor	Tango	H.Mateo			
日テレフンケン	10617	19193	1934年	Tango Mío	Tango	Osvaldo & Emilio Fresedo		**私のタンゴ**	
		19195	"	Tomo y Obligo	Tango	Carlos Gardel:M.Romero		**トモ　イ　オブリゴ**	
"	10620	19149	1934年	Tuyo es mi amor	Vals	Rodolfo Carrera			
		19147	"	Blanca Flor	Tango	H.Mateo			
日パーロフォン	E5021	36347	1928年	Sangre	Tango	Mateo		**鮮血**	
		36359	"	Sunshine	Fox	Berlin	Mitja Nikish and Orchesta	**太陽**	

Barnabás von Géczy mit Seinem Orchester　　（作成：芝野　史郎）

レーベル	レコード番号	マトリス	録音年	曲名	曲種	作詞、作曲（作者）	歌手	日本発売レコード	備考
日エンジェル	HH1001	ORA863-2		Poem		Fibich		**詩曲**	
		ORA865-1		Im Chambre Séparée aus "Der Opernball"		Heuberger		**離れ間にて**	
日ポリドール	P18	4105ss	1951.10.16	La Petite valse	S.Vals	Heyne		**小さなワルツ**	
		4101-35N	1952.11.20	Come with me to Madira	F.T.	Kunneke		**マデイラへの旅**	
"	P44	5298SM	1953.11.29	Tosellis Serenade	Waltz	Toselli		**トセリのセレナーデ**	
		5297SM	1953.11.29	Narcissus	S.Fox	Nevin		**水仙**	
"	P49	4838SN	1953.6.12	Bella, bella Donna	Fox	Winkler		**ベラドンナ**	
		4837SN	1953.6.12	Tango Anuschka	Tango	Jager		**タンゴアヌシュカ**	
"	P55	5300SM	1953.11.29	Pustafeuer	Fox	Templin		**草原の火**	
		5299SM	1953.11.29	He loves me	Fox	Gaze		**彼氏は私に首ったけ**	
"	P59	4834SN	1953.6.10	Guitar Serenade	Tango	Funk		**ギターセレナーデ**	
		4833SN	1953.6.10	A terrace at the Beach	Tango	Fisher		**海辺のテラス**	
"	P63	4840SN	1953.6.12	The little Seabirds	Polka	Gattluber		**小さな海鳥**	
		4839SN	1953.6.12	Circus Pony	Fox	Harlinger		**サーカスの小馬**	
"	P87	5974HN	B-53	Tea Time with Barnabás von Géczy	Vals			**ゲッツィのティータイム**	
		5973HN	"	"	Vals			"	

Adalbert Lutter mit seinem Tanz-Orchester （作成：芝野　史郎） 3

レーベル	レコード番号	マトリス	録音年	曲名	曲種	作詞、作曲（作者）	歌手	日本発売レコード	備考
独テレフンケン	M6060	19913	1934年	Amigazo	Tango	Juan de Dios Filiberto			
		19931	"	Gitarren spiert	Tango	L.Schmidseder-Ralf Siegel	Duet		
"	M6163	20855	1935.6.28	Fea!	Tango	H.G.Pettorossi			
		20856	"	Sentimento Gaucho	Tango	F.R.Canaro			
"	M6285	21232	1935年	Taborda	Tango	D.Barberis			
		21236	"	Pato, cua,cua!	Tango	J.Rodríguez			
"	M6277		"	Pato.	Tango	R.Collazo			
			"	Weinen unt Lachen (Llorar y Reír)	Tango	J.Llossas			
"	M6293	21375	"	Blauer Flimmel	Tango	Joe Rixner			
		21378	"	Anita!	Tango	H.Mahlow-BWeibe			
"	M2381	22621	1938年	Ich hab' an dich gedacht.	Tango	H.O.Borgman-H.F.Beckmann	Eric Helger		
		22622	"	Der Wind hat mir ein Lied erzählt	Tango	L.Bruhme-Br.Balz			
日テレフンケン	10609	20249	1935	La Cumparsita	Tango	G.H.Matos Rodríguez		ラ　クムパルシータ	昭和12年
		20251	1935	Rosa Mía	Tango	Hein Mahlow und Bert Wiebe		私の薔薇	"
"	B-96	20250	1935	A media Luz	Tango	E.Donato		メディア　ルス	昭和16年
		23841	1938年	Hopsassa	Polka	Josef Rixner		ホプサッサ	"
"	30612	21236	1935年	Pato, Cua, Cua!	Tango	J.Rodríguez		赤い蝶々	昭和14年
		22480	1937年	Eine alta weise	Tango	H.Jonsson−P.Fago		思い出の唄	"

Alfred Hause and Radio Dance Orchester Hamburg. （作成：芝野　史郎）

レーベル	レコード番号	マトリス	録音年	曲名	曲種	作詞、作曲（作者）	歌手	日本発売レコード	備考
日ポリドール	P8	2011DH	1950.11.25	Olé, Guapo	Tango	A.Malando		オレ　ガッパ	
		2012DH	1950.11.25	A media luz	Tango	Donato		ア　メディア　ルス	
"	P19	4354SH	1953.1.9	Under The Red Lantern of St.Pauli	Tango	Siegel		サンパウロの赤き灯	
		4353SN	1953.1.9	Listen Tomy Song, Violetta	Tango	Klose-Lukesch		ヴィオレタに捧げし唄	
"	P40	3375 SS	1952.2.23	El Bandoneón	Tango	Nitzsche		エル　バンドネオン	
		3374SS	1952.2.23	Magdalena	Tango	Bruzzone-Schlenkermann		マグダレーナ	

Ricardo Santos and his Tango Orchester （作成：芝野　史郎）

日ポリドール	P67	5694LHM	4F3	La Cumparsita	Tango	Rodríguez		ラ　クンパルシータ	
		5691HH	4F4	Tango of Desire	Tango	Niessen-Cassen		タンゴ　“欲望”	

Marek Weber

Barnabás von Géczy

Adalbert Lutter

オルケスタ・ティピカの歴史（No. 9）
HISTORIA DE LA ORQUESTA TÍPICA

タンゴ器楽の発展
Evolución instrumental del Tango
ルイス・アドルフォ・シエラ著

弓田　綾子(訳)
島﨑　長次郎(監修)

ミゲル・カローと彼のスターたちのコンフント
～ MIGUEL CALÓ Y SU CONJUNTO ESTELAR

バンドネオン奏者。ミゲル・カローはフランシスコ・プラカニコ、オスバルド･フレセドのもとでその技法を学ぶ。その後、カトゥロ・カスティージョと一緒にヨーロッパに渡り、演奏活動の傍ら音楽の勉強を続けた。やがて自らのオルケスタを編成する。その彼の斬新ともいえる演奏法は、多くの演奏家を育てプロの道へと導いた。

そんなミゲル・カローのもとで学んだ音楽家たちは、アルマンド・バリオッティ、オルランド・ゴーニ、カルロス・カンパノーネ、ドミンゴ・バレーラ・コンテ、ルイス・ブリゲンティ、ドミンゴ・クエスタス、アルフレド・スシアレータ、ラウル・カプルーン、オスバルド・プグリエーセ、ミゲル・ニヘンソン、ペドロ・H・パンドルフィ、ウーゴ・グティエレス、アムレト・カリセ、カリスト・カジャゴ、フェラルド・バリノッティ、オレステス・スングリ、アントニオ・ロディオ、アメリコ・カヒアーノ、サルバドール・カロ、ペドロ・サポチニク、フランシスコ・デ・ロレンソ及びレオン・リペスケルらである。そして彼らは後のタンゴ界を担うプロとして巣立って行った。

1937年、ミゲル・カローのオルケスタはアレンジャーとしてアルヘンティーノ・ガルバンを迎え、バイオリンのカデンツァに力を入れ、それまでとは違いバイオリンのソロを際立たせる技法を多く曲の中に取りいれるようにした。

Orquesta Miguel Caló

先達の“タンゴ・ビオリンの名人芸”とまで言われた音楽家といえば、アヘシラオ・フェラサーノ、カジェタノ･プグリシ、フリオ･デ・カロ、マンリオ・フランシア、そして、エルビーノ・バルダロら錚々たるメンバーが

よく知られている。

1940年、ミゲル・カローは彼のオルケスタに、アントニオ・ロディオを先駆者として、エンリケ・マリオ・フランチーニの驚異的なテクニック、後にシモン・バジュール、レイナルド・ニチェーレ、フェルナンド・スアレス・パスらを迎えた。さらに第１バイオリン、ラウル・カプルーンは、アレンジャーのアルヘンティーノ・ガルバンによって自らの至芸を高め、このバイオリン・カデンツァの名手たちによってミゲル・カローの人気は最絶頂に達した。

そして、彼のオルケスタは“la orquesta de las estrellas（花形スターたちのオルケスタ）”と呼ばれ、多くの観衆の心をとらえて人気を博した。

他にも40年代にミゲル・カローのオルケスタで活躍した演奏家には、エクトル・スタンポーニ、オスマル・マデルナ（Pf）、ドミンゴ・フェデリコ、フリオ・アウマーダ、アントニオ・リオス、フェリーペ・リシアルディ、ホセ・カンバレリ、アルマンド・ポンティエル、カルロス・ラサリ、アルベルト・サン・ミゲル、エドゥアルド・ロビラ（Bn）たちがいた。

また、エンリケ・マリオ・フランチーニ、アキレス・H・アギラール、アンヘル・ボダス、アロルド・A・ヘサギとマリオ・ラリ（Vi）、アリエル・ペデルネラ（Cb）たちも演奏活動をしながら、ピアニストのオスマル・マデルナがミゲル・ニヘンソンとアルヘンティーノ・ガルバンらに代わり、自らも編曲を担当し、ミゲル・カローのもとで活躍していた。つまり彼らは皆ミゲル・カローの門下生なのだ。

ルシオ・デマーレとアントニオ・ロディオ～ LUCIO DEMARE Y ANTONIO RODIO

Pianista y compositor Lucio Demare delante de su tanguería, Malena al Sur, en San Telmo.

先に述べた通り、40年代の10年間は現代タンゴの開花期といわれるように、多くの演奏家が積極的に活動し観衆はそのメロディーに酔いしれた。

ルシオ・デマーレは、かつて歌手のアグスティン・イルスタ、ロベルト・フガソらとトリオを結成し、ヨーロッパ各地を積極的に巡演した。その後、独立し彼自身のオルケスタを編成した。

ルシオ・デマーレの奏でるピアノには、気品と美しさが感じられ、魅力あるその低音と、リズミカルでエネルギッシュなタッチは、彼の演奏スタイルとして特に強く印象づけ、多くの観衆にインパクトを与えた。そして彼は演奏家それぞれの個性を出すために、特にアレンジに力を入れた。彼のオルケスタの第１バンドネオン奏者マキシモ・モリのエネルギッシュな演奏は、そんなルシオ・デマーレの片腕となって見事な実績をつくった。

一方のアントニオ・ロディオは音楽学校で専門知識をきちんと学んだバイオリン奏者。彼は29年から約３年間、ペドロ・マフィア楽団の第１バイオリンとして、エルビノ・バルダーロの後を継ぎ活躍した。その後自らのオルケスタを形成した。メンバーには、エクトル・スタンポーニ、カルロス・パ

ロディ、アントニオ・リオス、ティティ・ロッシ、マリオ・デマルコ、エドゥアルド・ロビラ、ルイス・ボンナ、トーマス・セルボ、フアン・ホセ・ファンティン、ハイメ・ゴシス、及び、オスカル・ポデスターら若い演奏家たちの協力があった。

アントニオ・ロディオのバイオリンは、他の演奏家と異なる独特なビブラートのテクニックで、彼独自のスタイルを固持して人気を得た。晩年はチリに根を下ろしその生涯を閉じた。

オラシオ・サルガン、その創造の才能～ HORACIO SALGÁN,TALENTO CREADOR

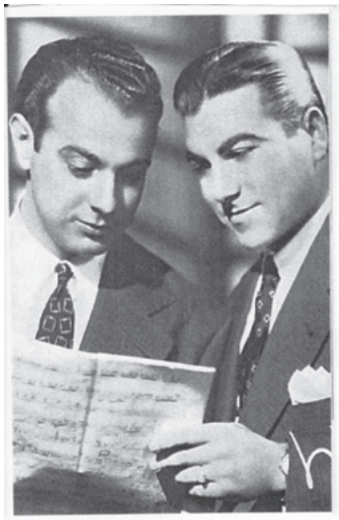
オラシオ・サルガンは言わずと知れたタンゴの理論的な音楽家であり、タンゴ界を代表する名ピアノ奏者である。彼の演奏はデ・カロの影響を受け、シンコペーションの強烈なリズム変化を取り入れ、その革新的ともいえるモダンな演奏をする反面、古典曲にも精通し、聴き入る観衆を当惑させた。

そして、サルガンの大きな目標は創造性に富んだモダンな音色で、それは新時代のタンゴ美を強調したものだった。そのためにサルガンはより傑出した音楽家を集めた。

レオポルド・フェデリコ、マルコス・マドゥリガル、アベラルド・アルフォンシン、トト・ロドリゲス、アルマンド・カルデラーロ、ロベルト・ディ・フィリポ、エルネスト・バッファ、ウバルド・デ・リオ、ビクトル・フェリセ・アレグレ、マウリシオ・ミセ、ラファエル・フェロたちである。

オラシオ・サルガンは間違いなくモダン・タンゴの個性もつビッグ・アーティストの一人である。そして、ピアノ奏者、作曲家、編曲家、かつ指揮者としてタンゴ界に大きく貢献した。

指揮者と演奏家たち～ DIRECTORES Y EJECUTANTES



40年代を担った“ラ・オルケスタ・デ・ラス・エストレージャス（花形スターたちのオルケスタ）”として人気絶頂だったミゲル・カローのオルケスタから、エクトル・スタンポニーが退いた。続いて45年になるとドミンゴ・フェデリコ、エンリケ・マリオ・フランチーニ、そしてアルマンド・ポンティエル、オスマル・マデルナら新進気鋭の若きムシコたちがミゲル・カロー楽団から巣立ち、自らのオルケスタを編成した。

また、バンドネオン奏者のアントニオ・リオスもダンス音楽を得意とするアントニオ・ロディオ楽団を経てオルランド・ゴーニ楽団で活躍した。

このようにミゲル・カローは若き音楽家たちの多くを名アーティストに育て上げたのだ。

■フランチーニ＝ポンティエル楽団。フランチーニ－ポンティエルの二人はミゲル・カロー門下の同期生である。特にフランチーニの奏でるバイオリンの高度なテクニックは、新時代のタンゴ音楽にとってバイオリンは不可欠であることを改めて誇示した。

バンドネオン奏者のポンティエルは主とし

て編曲と指揮を担当していたが、彼は細やかな神経の持ち主でもあった。メンバーには、エンリケ・マリオ・フランチーニ、アキレス・アギラール、マリオ・ラリ（後にビオラ奏者の第一人者となる）、およびホセ・サルミエント（Vi）、アルマンド・ポンティエル、アンヘル・ドミンゲス、ニコラス・パラシーノ、フアン・サロモーネ（Bn）、フアン・ホセ・パス（Pf）、ラファエル・デル・バグノ（Cb）、そして歌手のラウル・ベロンとアルベルト・ポデスターたちである。この錚々たる音楽家によって、フランチーニ＝ポンティエル楽団の活動は1945年から1955年の10年間、タンゴ第２黄金期の新旧交代の激しい中、彼らの躍動感溢れる演奏は常に聴衆の心を捉えつゞけ、その名声を博していった。

■オスマール・マデルナ＝ピアノ奏者。ミゲル・カロー楽団のピアニストとして５年間君臨したマデルナの幻想的なピアノ奏法は、早くも少年時代から“天才ピアニスト”としてその名を知られていた。45年自らのオルケスタを形成し、その軽やかなピアノタッチは踊り手にも大人気だった。しかしそんな若き天才的なピアニストのマデルナは、33才のとき飛行機事故で亡くなった。

■ドミンゴ･フェデリーコ＝バンドネオン奏者。父親が音楽家だったため､幼少のときから楽器を習い、自然に音楽家への夢を抱いてタンゴ界に入った。彼もミゲル・カロー楽団で育った名アーティストの一人である。

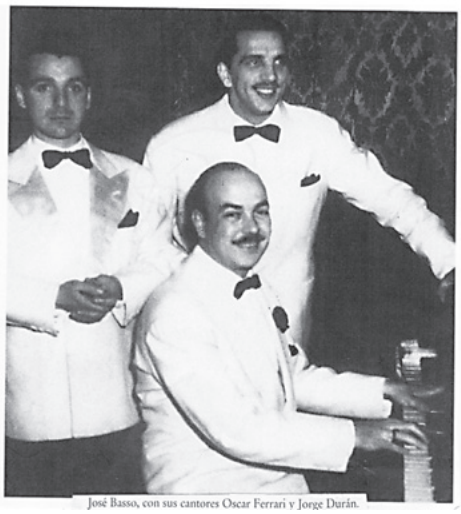
■フリオ・メドボイ＝ピアノ奏者。アレンジャーとしてもその名を知られる存在だった。

■エクトル・スタンポーニ＝ピアノ奏者。オルケスタの指揮者をしながら編曲者としても活躍した。長いこと外国で演奏活動をしていたが、帰国後はミゲル・カロー楽団を退団したメンバーたちと組み、歌の伴奏者としてキャバレーなどで演奏活動をするが、それぞれ個性ある音楽家との競演は大変苦労したようだ。その点アニバル・トロイロ楽団を経た音楽家たちは、鋭い個性を際立たたせながらもうまく調和し、随所に彼らの素晴らしい音楽性が発揮されていた。

例えば、オルランド・ゴーニ、アントニオ・リオス、ロベルト・ディ・フィリポ、エドゥアルド・ロビラ、ルイス・ボンナ、ロランド・クルセル、アントニオ・ブランコ、ドミンゴ・ドンナルマ、エミリオ・ゴンサレス、ホセ・バッソ、カルロス・フィガリ、オスバルド・マンシら名ピアニストや歌手のアントニオ・ロドリゲス・ロセンデたちである。

Orquesta Héctor Stamponi

■ホセ・バッソ＝ピアノ奏者。アニバル・トロイロ楽団で４年間ピアニストとして活躍した後、自らのオルケスタを編成。メンバーには、フリオ・アウマーダ、エドゥアルド・ロビーラ、ルイス・コジェル、マルシオ・ミセ、フランシスコ・オレフィセらである。


José Basso, con sus cantores Oscar Ferrari y Jorge Durán.

ホセ・バッソの派手ともいえる“fortísimos（強い）”かつ迫力あるアクセントを置いた“relentandos（のんびりして急がないこと）”､また､“rubattos（譜面どおりでなく自由に弾く）”のような彼独特のピアノ奏法は、美しくも魅力あるそ

のエネルギッシュなピアノタッチで、多くの観衆の心を捉え、安定した人気を博していた。

特に第１ビオリンのウーゴ・バラリス、同じくビオリン奏者のオスバルド・ロドリゲス、フアン・カルロス・ベラ、コントラバホ奏者のフランシスコ・デ・ロレンソ、ラファエル・デル・バグノら錚々たるメンバーが大きく彼の楽団に貢献した。

■エミリオ・バルカルセ＝作曲家・バイオリン奏者。オスバルド・プグリエーセ楽団を経て楽団を編成。メンバーのピアノ奏者フアン・ホセ・パス、第１バンドネオンにフリオ・アウマーダたちと歌手のアルベルト・カスティジョとアルベルト・マリーノの伴奏楽団として活動していた。

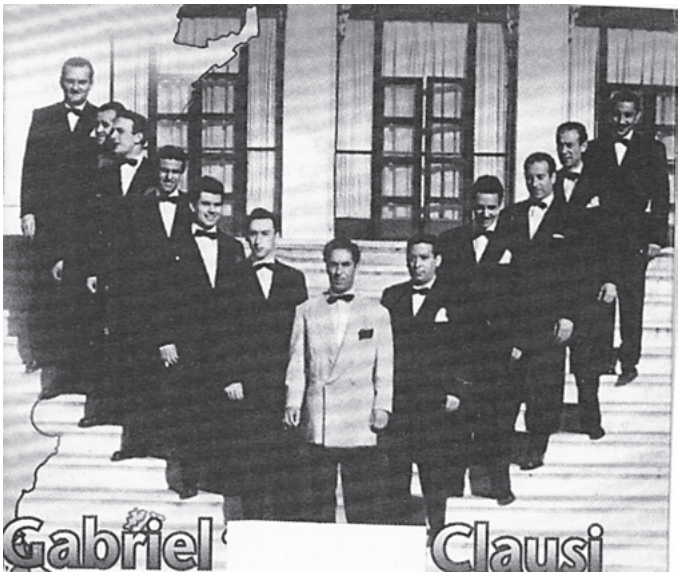
■ホルヘ・Ａ・フェルナンデス＝エルビノ・バルダーロ楽団で活躍したバンドネオン奏者。ピアノ奏者ホセ・パスクアルの計り知れぬ協力もあり、自身のオルケスタを編成したものゝ、残念ながら多くにその名を知られることはなかった。

■ホセ・パスクアル＝“Arrabal”の作者・ピアノ奏者・編曲者。ホルヘ・フェルナンデスから離れセステートを編成した。メンバーにはホセ・パスクアル（ピアノと指揮）、アルベルト・デル・バグノとシモン・ブレチ（Vi）、アムレト・カリセとマヌエル・ダポンテ（Bn）、そしてペドロ・ベリーニ（Cb）らである。主にタンゴ・サロン「レ・トゥカン」や、キャバレー「タバリス」などで演奏していた。

その後、ホセ・パスクアルは自らのセステートを解散し、ホアキン・ド・レージェスの楽団に加わった。

■ホセ・デ・カロ＝バイオリン奏者。バンドネオン奏者のエドゥアルド・デル・ピアノ、エクトル・プレサ、アレハンドロ・ブラスコ、フアン・プロボティロ、そして著名なピアノ奏者、アルマンド・フェデリコ、アンヘル・ロドリゲス・モンテス、エクトル・グラネ、およびホセ・バッソらと共に演奏活動をした。

■ガブリエル・クラウシ＝パチョの楽団において長く活動した優れた才能あるバンドネオン奏者。



マフィア、デ・カロの楽団を経て39年自身のオルケスタを編成。ビセンテ・トピ、アストル・ピアソラ、エクトル・モンテネグロ（Bn）、アントニオ・ロディオ、アントニオ・ロッシ、およびルイス・ピエルサンテリィ（Vi）、レオポルド・アモロソ（Pf）、フランシスコ・ロレンソ（Cb）らのメンバーである。長いことアメリカ各地を巡演したりとその足跡は素晴らしかったが、晩年は隣国チリに活動拠点を移し定住した。

■ホアキン・ド・レージェス＝バンドネオン奏者。彼のオルケスタには、クラシックの世界にも精通する高度な音楽教育を受けた演奏家が名を連ねた。

エルビノ・バルダーロ、ホセ・パスクアル、フリオ・アウマーダ、フアン・ホセ・パス、マキシモ・モリ、ホセ・ニエソウ、ロベルト・ギサード、マリオ・デマルコ、カルロス・Ｍ・パロディ、サンティアゴ・コッポラ、エクトル・プレサス、アルマンド・ロドリゲス、カリスト・サジャゴ、アキレス・アギラール、アントニオ・マルチェセ、ドミンゴ・マンクーソたち。また、二人の卓越したアルゼンチンを代表するコントラバホ奏者アムレット・グレコ、ホセ・アンヘル・アレグレは、それぞれ独奏

者としてタンゴ界ばかりではなく、クラシック音楽家として国立交響楽団とフォルモッサ州交響楽団でも大活躍をしその名を博していた。

そんな40年代に伝統派、進歩派といった概念上の違いも立証せず、当時の人気アトラクション楽団の先頭に立っていた音楽家たちがいた。

フランシスコ・カナロ、フランシスコ・ロムート、エンリケ・ロドリゲス、ホセ・セルビディオ、マヌエル・ブソン、ニコラス・バカロ、エドガルド・ドナート、フアン・カナロ、フロリンド・サッソーネ、ロベルト・セリージョ、リカルド・マレルバ、ホセ・ガルシア、アルベルト・ガンビーノ、フランシスコ・ラウロ、アルベルト・ソイフェル、ダニエル・アルバレス、エミリオ・オルランド、ミゲル・サバラ（サバリータ）、フランシスコ・ロトゥンド、ロレンソ・バルバロ、フランシスコ・グリージョ、ロベルト・カロー、カルロス・デ・マリア、リカルド・ペデビジャ、ティト・マルティン、フアン・サンチェス・ゴリオ、アルフレド・カラブロ、フェリックス・ギジャン、アルベルト・マンシオーネ、アルマンド・バリオッティ、ホセ・ティネーリらである。

■ニコラス・バカロ＝古典タンゴのピアノ奏者。彼の楽団にはフリオ・アウマーダ、アントニオ・リオス、エドゥアルド・デル・ピアノ、アルフレド・ゴビ、ホルヘ・フェルナンデス、エクトル・プレサス、カルロス・パロディ、ビクトル・スチョルス、ハイメ・ゴシス、アルベルト・ガルシア、ティティ・ロッシ、エミリオ・バルバト、フアン・ホセ・ファンティンら、若手演奏家が活躍していた。また、歌手のアントニオ・ロドリゲス・レセンデの名も忘れてはならない。

ニコラス・バカロの表現力豊かなピアノの人気は高く、エスメラルダ通りのダンスサロン“ノベルティ”で長い間演奏していたが、プロの演奏家としての活動から退いた後は若き音楽家の育成に力を注いだ。

■カナロ兄弟たち＝兄弟には、フランシスコ、ラファエル、フアン、ウンベルト、マリオたちがいる。彼らは家が貧しかったため、少年時代新聞売りなどで家計を助けたりした後に各々成功した。

フアン・カナロはバンドネオン奏者。数年間ヨーロッパ各地を巡演していたが、自身のオルケスタ編成のためにブエノス・アイレスに戻った。その時のメンバーに、ロドルフォ・ビアジ、フェデリコ・スコルティカティ、カジェタノ・プグリシ、ホセ・ティネリ、アルフレド・デ・フランコ、エドゥア

La obra *La muchachada del centro*, de Pelay y Canaro, en el teatro Nacional.

ルド・デル・ピアノ、オクタビオ・スカグリオーネ（ピスコト）、マンフレド・リベラトーレ、ホセ・デジャ・ロカ、マルコス・ラローサ、フアン・リオス、フランシスコ・オレフィセ、アントニオ・ロッシ、フランシスコ・デ・ロレンソ、アンヘル・マルティン、ドミンゴ・トゥリゲーロ、フェルナンド・マルティン、オラシオ・ゴリーノ、オスバルド・タランティーノ、アルトゥロ・ペノン、アルフレド・マルクシ、ティト・ベストゥロバン、ルフィノ・アリオラ、エミリオ・ゴンサレスら錚々たる演奏家たちがいた。

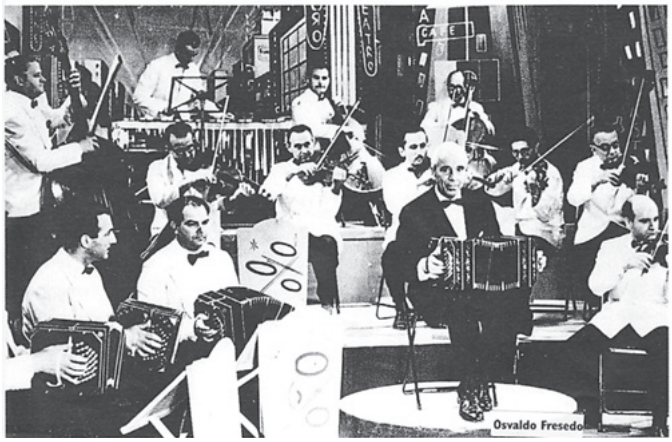
そして、親しみやすいフアン・カナロのポピュラリティな演奏は、たちまち巷のキャバレーやダンスホールでの噂になり、人気者になった。

大楽団への新たな経験～ NUEVAS EXPERIENCIAS A GRAN ORQUESTA

1932年から34年にかけて、フリオ・デ・カロとオスバルド・フレセドは、楽団に独自性を出すため弦楽器、バンドネオン、それにピアノなど各楽器のバランスと編曲を重視した方向を模索しながら、それまでの標準的な楽団編成に金管、打楽器などを加え、新たなサウンドづくりに取り組んだ。しかし、そのことは二人にとって大きな難題となった。なぜなら楽譜が読めない演奏者も多くいたからだ。しかし、フリオ・デ・カロは“このままではタンゴは衰退してしまう”と危惧し、編曲に力を入れ、楽団のオリジナルな音をかもし出すことに執心した。

Sexteto de Julio De Caro en 1925. Julio, Francisco y Emilio De Caro, Pedro Maffia, Pedro Laurenz y

また、音楽の理論派でもありアレンジャーのアルヘンティーノ・ガルバンとエクトル・マリーア・アルトーラたちの編曲のお陰で、木管楽器、金管楽器、打楽器を加えても問題は生じず、かえって芸術的、かつ豊かな音域が広がった。後のカルロス・ガルシーアとアストル・ピアソラは交響楽団が用いる楽器をタンゴにもとりいれたりして、かなり前衛派的な面もあったが、新しいタンゴ音楽の方向づけでその手腕を発揮した。


Osvaldo Fresedo

大胆な更新者、アストル・ピアソラ～ ÁSTOR PIAZZOLA , INTRÉPIDO RENOVADOR

アストル・ピアソラはモダンタンゴの革命児ともいわれるバンドネオン奏者。トロイロ楽団に５年間バンドネオン奏者として活躍し、同時にアレンジャーとしても腕をふるった。1944年にトロイロ楽団を退団し、歌手フィオレンティーノの伴奏楽団としての指揮や編曲を行う。メンバーは、アストル・ピアソラ、ロベルト・ディ・フィリポ、フェルナンド・テル、およびアンヘル・ヘンタ（Bn)、ウーゴ・バラリス、エルネスト・ジアンニ、フアン・ビビローニ、カルロス・ルセーロ（Vi)、カルロス・

フィガリ（Pf)、アンヘル・モロ（Vc)、ホセ・ディアス（Cb）たちである。

1946年、歌手フィオレンティーノから離れ彼自身のオルケスタを編成する。メンバーは、アストル・ピアソラ、ロベルト・ディ・フイリポ（後にレオポルド・フェデリコと交代)、アルベルト・アルフォンシン、ホルヘ・ルオンゴ（Bn)、ウーゴ・バラリス、カルメロ・カバジャロ、アンドレス・リーバス、ビクトリオ・カサグランデ（Vi)、アティリオ・スタンポーネ（Pf)、ホセ・フェデリジ（Vc)、バレンティン・アンドゥレオータ（Cb)、歌手にアルド・カンポアモールとエクトル・インスアらを迎え、華やかにステージを飾った。

しかし、オルケスタにチェロやエレキギターを加えるなどその先鋭的な構成に対し、彼は皆から、特に保守的な人たちから“伝統あるタンゴを破壊する男”とののしられ、時には強い罵声をあびせられたりもした。またピアソラはアレンジャーとしての驚異的な才能もあり、伝統的なタンゴ演奏に対してのアレンジメントは、あたかも彼の革新的ともいえる強い意志と個性を誇示していたために、しばしば大きな非難をあびることも少なくなかった。

そんなタンゴ界に限界を感じた彼は、1954年クラシックの勉強のため渡仏する。しかし、ピアソラは“タンゴこそ私にとって音楽の原点なのでは…”との思いに気がつき、1955年再びブエノスに戻った。そして“オクテート・ブエノスアイレス”を編成。メンバーにはアストル・ピアソラ、ロベルト・パンセーラ、レオポルド・フェデリーコ（Bn）＝（後にパンセーラと代わる)、エンリケ・マリオ・フランチーニ、ウーゴ・バラリス（Vi)、ホセ・ブラガート（Vc)、アティリオ・スタンポーネ（Pf)、オラシオ・マルビチーノ（Gt.electrica)、アルド・ニコリーニ（Cb）後にフザン・アントニオ・バサージョ（Cb）らも加わって、バングアルディア（前衛派）を内外に示した。

ピアソラの奏で出るメロディーには、かつてのセンチミンタルな哀愁に満ちたタンゴではなく、ジャズのエッセンスをも取り入れた、激しく、強いビートのリズム感溢れる演奏が多かった。そんな音楽に ピアソラは“そう、確かにそれらはタンゴではないかも知れない、でも私はブエノスアイレスの精神を表現した”と彼は胸をはって自身の音楽に対する思いを語った。

Orquesta de Astor Piazzolla en 1944/45, acompañante del cantor Fiorentino.

ピアソラは伝統あるタンゴに自己の創作を屈せずに貫きとおした。そして、私は出来ることならピアソラに問いただしてみたいことがある。それは“あなたが我々の街の今の精神的な象徴をタンゴに表すというなら、現在の上海、ダカール、あるいはシンガポールはどのように表現してもらえますか？”と…。

革新的異端児のアストル・ピアソラは、タンゴ界から去ってしまったが、その計り知れない創造の才能と共に、今一度タンゴの世界へ戻ってほしい…、そう思わずにはいられな

い。

見え始めた大きな暗闇～ SE VISLUMBRA EL GRAN ECLIPSE

50年代はタンゴの演奏面で新旧の交代が激しかった。大楽団が次々に消え、生活のためには小楽団（３・４・５重奏団）形式に編成せざるをえなくなり、都心ばかりでなく地方にも演奏の場を求めるようになった。

そんな時代に活躍した演奏家にはオスバルド・タランティーノ、アントニオ・アグリ、オマール・ムルタ、ロベルト・ペレスプレチ、シモン・バジュール、アルフレド・マルクッチ、エルネスト・フランコ、オスバルド・ピーロ、アルシーデス・ロッシ、ビクトル・ラバジェン、アルマンド・クーポ、アティリオ・コラル、エンリケ・ラノー、オマール・ルピ、オルランド・トリポディ、アルトゥロ・ペノン、ホセ・リベルテーラ、ディノ・サルーシ、オスバルド・ロドリゲス、アルマンド・カルデラロ、アルベルト・ディ・パウロ、フェルナンド・ロマーノ、ダニエル・ロムート、ホセ・マルケス、オスバルド・モンテス、フェルナンド・スアレス・パス、マウリシオ・マルチェーリたちが担っていた。さらに次の名アーティストも時の流れにそって活躍していた。

■マリオ・デマルコ＝バンドネオン奏者で名アレンジャー。アルフレド・ゴビの楽団を経てオスバルド・プグリエーセ楽団で活躍したが、1951年に自らのオルケスタを結成した。

■エンリケ・マリオ・フランチーニとアルマンド・ポンティエル＝フランチーニの華麗なバイオリンのテクニックは、タンゴにとってもはや不可欠であることを改めて印象づけた。ポンティエルはバンドネオン奏者であるが、ここでは主に編曲に力を入れていた。ほゞ10年間を二人で仕事をしていたが、1955年に別れ、それぞれ独自のオルケスタを編成した。、

フランチーニの新メンバーには、ピアノ奏者のフアン・ホセ・パスを中心に、第１バンドネオンにフリオ・アウマーダ、コントラバホ奏者にラファエル・デグ・バグノらが参加した。

■アティリオ・スタンポーネ＝ピアノ奏者。ペドロ・マフィアやアストル・ピアソラの楽団で活躍していた。レオポルド・フェデリーコと共に楽団を編成する。第１バイオリンに名手、シモン・バジュール、歌手のロドリゲス・レセンデ、それにあのアルヘンティーノ・ガルバンを編曲者として委ねるなど、この素晴らしいメンバーにより人気を博した。またレオポルド・フェデリーコのバンドネオンは、伝統的な表現形式を崩さずに演奏しながら、かつモダンなタイプの演奏をもするオルケスタに育てた。

アンヘル・ドミンゲス、エドゥアルド・デル・ピアノ、アルフレド・アタディア、エンリケ・アレッシオ、オスカル・カスタグニアロ、およびアルベルト・ディ・パウロらバンドネオン奏者たちも自己の演奏スタイルを誇示しながら活躍した。

カルロス・フィガリ、ミゲル・ニヘンソン、フルビオ・サラマンカ、アニバル・トロイロ、ミゲル・カローらの芸術ともいえる演奏もここに賞賛したい。、

そして、ホルヘ・カルダーラもしばらく日本に滞在し、日本のタンゴ楽団の指導などを

していた。帰国後すぐに自身のオルケスタを形成し、エネルギッシュな演奏を披露していた。

■エクトル・スタンポーニ＝ピアノ奏者。編曲技法を音楽学校で学びその編曲の才能は高く評価されている。また、オルケスタを形成し歌手のラウル・ラビエとポデスターの伴奏や指揮をしていた。

メンバーにはマリオ・デマルコ、ティト・ロドリゲス、マヌエル・ダポンテ、およびフェルナンド・コルドバ（Bn）、第１ビオリンにマウリシオ・マルチェリ（後にセサル・リージと交代）そしてキチョ・ディアス（Cb）が中心となり活躍した。

■マリアノ・モーレス＝現代タンゴ界を代表するピアノ奏者。マリアノ・モーレスは1939年から48年までの９年間、フランシスコ・カナロ楽団のピアニストとして大活躍した。カナロ楽団を退団した直後にオルケスタを形成。そのモーレスの奏でる美しいピアノ演奏に“gran orquesta lírica popular（抒情的タンゴ楽団）”と呼ばれた。また、ドラムや管楽器などを加えそのアレンジをマルティン・ダレに任せた。

マリアノ・モーレスの演奏は、純粋な演奏するオスバルド・プグリエーセ、ホセ・パスクアル、カルロス・ディ・サルリ、オラシオ・サルガン、オルランド・ゴーニたちとは全く正反対の演奏をし、その人目をひく壮観なピアノを誇示している。

■エクトル・バレーラ＝バンドネオン奏者。10年間フアン・ダリエンソ楽団の第１バンドネオン奏者、かつアレンジャーを務めた後に自身のオルケスタを編成。伝統的な流れのなかに難しいテクニックを持ち、正確な早いリズムを強調、そのスタッカートな演奏スタイルはダリエンソ譲りなのだろうか…。そしてピアノ奏者フアン・カルロス・ハワードの低音を強調したプレーもなかなかの人気だった。

Mariano Mores con las hermanas Mores.

1950年代には、編曲をしながら演奏家としても活躍した音楽家には、次の人たちがいた。エデルミーロ・ダマリオ（Bn）、フリオ・メドボイ（Pf）、およびオスカル・ポデスタ、アルベルト・ディ・パウロ（Bn）らがそれだ。

また、新旧交代のこの時期には音楽進歩論を唱える、ラウル・カプルーン、アルマンド・バリオッティ、フランシスコ・トゥロポリ、ロベルト・カローらに対して、古典的演奏にこだわるルシアノ・レオカータ、ルーベン・ソーサ、グラシアノ・ゴメス、ホセ・セルビディオ、ドナート・ラシアッティ、プグリアーペドローサ、マリオ・コルクシ、ホルヘ・アルドゥ、そしてカルロス・ディ・サルリ楽団から離れたメンバーで編成した“ロス・セニョーレス・デル・タンゴのアンヘル・ラモスとベルナルド・ベベルたちが双方で対立しながら、激動する1950年代のタンゴ界を大いに賑わしていた。

Orquesta Héctor Varela, con César Zagnoli (piano), Hugo Baralis (primer violín) y los vocalistas Armando Laborde y Rodolfo Lezica.

（つゞく）

ドクトル・バンドネオンのタンゴ・タンゴ人生

舳松伸男（大阪）

＜生い立ちとバンドネオンとの出会い＞

著者近影

私は昭和５年生まれで小さい頃から音楽が好きで、６才から声楽とピアノを学んだ。小学校の音楽の授業と言えば唱歌を歌うぐらいだったから、当時とすれば珍しい存在だったろう。先生からは「将来上野（今の東京芸大）に行きなさい。」と言われていたが、５年生の時大東亜戦争が始まり音楽どころではなくなった。

昭和１８年、旧制の大阪府立今宮中学校に入学したが中学３年で敗戦、家が病院だったので、音楽学校には行かせてもらえず、中学４年で大阪市立医科大学の予科の試験に合格した。予科は医学の勉強はなく３年間数学、理科、英語などを習ったが、医学部への進学は無試験だった。この大学は現在大阪市立大学医学部になっている。

入学すればこっちのものと、借りたアコーディオンでにわか仕立ての青空楽団を始めた。人の集まる要所要所には縄張りを取り仕切る元締めがいて、私に「リンゴの歌」、「港が見える丘」などを弾かせ、敗戦で歌に飢えている人達に歌詞の書かれた紙片を売るのである。物資が不自由している時代故まともな歌詞パンフレットがないので、黒山の人だかりが出来飛ぶように売れた。こんな音楽活動（と呼べるかどうか？）を難波とか梅田などの繁華街で行っていた。まだ戦争の傷跡が残り、庶民の多くは毎日の衣食住にもこと欠く、昭和２２年の夏頃の話である。

そのうちダンスが流行りだし、焼け跡にバラックのダンスホールも建ってきたが、大抵は焼け残りの学校の講堂が主だった。そういう時代風俗のはしりの頃、ひょんなことでプロ楽団に参加の仕事が舞い込んできた。ある小学校でダンスパーティがあり、楽団はトランペット、バイオリン、ドラムに私を入れて７～８人の編成でゲストは歌手の田端義夫であった。その場に小田原提灯を横にしたような楽器を操るメンバーがいて、心に染み入る良い音で弾いていた。後になってその人は坂本政一と言う有名な奏者だと知った。私とバンドネオンの出会いである。

その後ハワイアンバンドに入り小さなダンスホールで弾いているうちに、難波の道頓堀を中心に続々とダンスホール、キャバレーが建ち始めた。“メトロ”、“丸玉”、“美人座”、“有明”、“パラマウント”などである。タンゴバンドには何処でもバンドネオン奏者がいた。なかでも“メトロ”の小川数芳の

オルケスタ・ソルは素晴らしい楽団で、バンドネオン４台、バイオリン４挺、ピアノ、ベース、ドラムの編成だった。思いきって楽屋を訪ねたところ小川さんは快く迎えてくれて、早速楽団の手伝いをすることになった。今から考えると、バンドネオンはクロマティコ２人、ディアトニコ１人、クセロ１人の４人で、リーダーの小川さんはバイオリン奏者であった。

ほどなく“メトロ”が火災で焼失し、小川楽団は文字通り焼け出され（失職）たのである。だが、幸いにも間もなくダンスホール“丸玉”の専属となった。しかしまたもや災難が降りかかった。丁度その頃、難波高島屋の地下に“ボール・ルーム”と言うダンスホールがオープンしたのである。高島屋の経営で、そこのタンゴバンドとして小川楽団から、バンドネオン２名、バイオリン、ピアノ、ドラムが抜けて高島屋に移籍してしまったのである。

当時、殆どのホールではジャズバンドとタンゴバンドが交替で演奏し、大きなホールではハワイアンバンドが加わり３バンド制だった。高島屋はその３バンド制を採ったので、どうしてもバンドネオンの入るタンゴバンドを必要としたために小川楽団の中心メンバーがゴッソリ引き抜かれたのである。窮地に立った小川さんは、私が「バンドネオン奏者になれば８千円のギャラで正式に契約する」とのことであった。バンドボーイからの昇格である。

公務員の給与が２千円の時代であるから、当時とすれば高給である。さりとてバンドネオンがすぐに見つかるわけはなく、以前働いていた楽団のバイオリン奏者が戦前早川真平氏と一緒に演奏していたことを思い出し相談すると、彼を訪ねるように勧められ、紹介状まで書いてくれた。

夜行列車で上京し、翌日の日暮れに銀座のダンスホール“美松”に出演中の早川氏を訪ねた。早川氏は私の相談ごとを聞くや「京都の人が所有しており、譲る可能性がある。」との情報を提供してくれた。更に早川氏は「バンドネオンにはクロマティコとディアトニコの二種類があって、クロマティコは楽器としては運指、奏法が合理的なため、わが国ではクロマティコが主流でありティピカ東京で使っているのもクロマティコです。一方のディアトニコはごく少数の人が弾いているがマスターするのは至難である。ただアルゼンチンではディアトニコが当たり前の楽器で音質もよく、君は若いからディアトニコを弾くのも一つの道である。」と親切なアドバイスを頂いた。

復路京都に降り立ち、早川氏に紹介された林さんの家を訪ねた。林さんは紹介状に目を走らせた後２台のバンドネオンを並べ、１台はクロマティコで８万円、もう１台のディアトニコは４万円で譲るとのことであった。資金がない上に早川氏の助言もありディアトニコに決めた。大阪に戻り小川さんから半年分のギャラを前借りしてディアトニコを購入し、ティピカ・ソルのバンドネオン奏者として働くことになった。昭和２３年の初夏である。ディアトニコを買ったのを知った楽団連中は「お前は厄介な楽器を買ったものだ。いままでその楽器を自由に弾きこなした者はいない。」と呆れ顔でした。

良い時代であった。楽器を持っているだけで高給が貰えた。とはいえ、弾けなければ話にならない。が、せっかくの楽器を手に入れたものの教則本すらない。１人だけでボタンの図を書いてバラバラに並んでいる音に印を付けた。蛇腹の引き、押し、音階の配列に規則性のないこの楽器を覚えるのは大変だった。大学で授業を受けながら必死で練習した結果、若さとはえらいもので１か月もすれば右手の引きで簡単な曲が弾けるようになった。

＜タンゴと医学の二股稼業＞

昭和２３年頃は覚醒剤を煙草屋で売っていた。出演先ダンスホールの許可を貰い閉店後の無人のホ

ールで覚醒剤ヒロポンを打ちながら、朝まで練習した。それから大学に行くのである。当時のバンドマンは殆どがヒロポン漬けで、静脈に注射する人が多かった。私は入念に消毒した注射器で皮下注射をしたが、静脈注射をした人は後に殆どがC型肝炎で亡くなっている。やがて覚醒剤は非合法で規制され私はきっぱりとやめた。しかしその後も闇で売買していた人が多かったのは事実だ。

ほどなく、現在第一線で活躍するバンドネオン奏者京谷弘司君の兄京谷明君がクロマティコの奏者として小川楽団に入団し、バンドネオンは４人になった。他の大阪のダンスホール、キャバレーのバンドネオンは“美人座”、“高島屋ボール・ルーム”、“舞踏会館”がそれぞれ２名体制で、他は１名のバンドが多かった時代である。

当時の演奏家は楽隊、或いは楽隊屋と呼ばれていた。小川楽団は満州帰りの楽隊屋が多く譜面なしで色々な曲を演奏した。私もかなり弾けるようになっていたので歌謡曲を楽譜なしのメモリーで弾いた。この時の経験がものを言い今でも暗譜で色々な曲が弾ける。

昭和２５年“丸玉”がパチンコ店に営業替えをしたのを機に、小川楽団は再び火災から復興していた“メトロ”に戻った。その頃のことだが、リーダーの小川さんから某大学音楽部が学園祭で演奏会を開くので手伝うようにと指名された。いわゆるトラ（エキストラ）だ。そこで音楽部員の中に入り一緒に弾くと、ピアノが上手でその上タンゴの感じが良く出ている。たちまち意気投合し、たまたま小川楽団のピアノが辞めて後任者が見つからずエキストラが弾いているので、参加しないかと持ちかけてみた。是非加わるとの返事である。戻って小川さんに話すと、来て欲しいとのこと。このピアニストが大塚典君である。将来にわたり一緒に演奏する大塚君との出会いである。

この時分とても上手なディアトニコ・バンドネオン奏者が入ってきた。私の良きライバルの出現、市田君である。バンドネオン５人、バイオリン５人、セロも加わる大楽団である。ジャズは中沢寿一楽団、歌は坂本スミ子であり“メトロ”全盛期であった。

大阪・宗右衛門町キャバレー「ニュー・メトロ」の益原英治とオルケスタ・ティピカ・アルヘンティーナ。後列左から３番目、脇精一、その右にマエストロ、ピアノは大塚典、前列左端は筆者。

そのうち私は医学部に進学し学業で忙しくなり、毎晩ステージには上がれなくなりエキストラ専門に鞍替えした。

その頃のことだが、坂本政一と楽団ポルテニアが労音主催のコンサートで来阪し、私もトラとして加わることになった。リーダーの坂本さん、第一バンドネオンの岩見和雄さんをはじめ良い方ばかりで、一緒に弾かせて頂きこの時の経験は良い勉強になりました。

東京からもよく楽団が来た。“丸玉”には谷口安彦のジャズバンドが出演し、ピアニストは中村八大だった。彼は早稲田の学生で、良く連れだって食事に行ったものだ。

昭和２９年１２月９日、兵庫県宝塚大劇場のステージにフアン・カナロの楽団が立った。初めて聴く本場アルゼンチンの楽団であり、胸躍らせて仲間達と聴きに行った。「Ahí Va El Dulce」に始まる音楽の素晴らしさにあっけにとられつつ、目をこらしてバンドネオンの奏法をみつめた。しかし、指使いを見てもクロマティコかディアトニコかの見分けはつかない。公演終演後楽屋に押しかけた私は、

彼等の楽器にさわり、弾いてみることが出来た。だが、同行した同僚のクロマティコ奏者には扱えなかった。この日こそ、タンゴ＝ディアトニコを認識し、そのバンドネオンを弾くことの出来る自分を発見した日であり、将来に大きな希望と自信が開けた日であった。

＜大学との訣別と独立＞

医学部を卒業し､肺結核の勉強がしたくて大阪大学第三内科に入った。それでも診療が終わると“メトロ”に行き楽器を弾いていた。大塚君とはずっと一緒だった。やがて小川さんは長崎に新楽団を立ち上げるために離阪し、大塚君も自分の楽団を持った。私も堺の国立結核療養所に勤務することになった。病気の性格上療養所は人口密集地から離れているため、ひとりで官舎生活をしていたが、楽器はずっと弾いていた。

昭和３３年頃大塚君はロス・タンゲーロスを結成し、梅田の“田園”と言う音楽喫茶店で演奏しようと誘われた。ピアノ、ベース、バンドネオン、バイオリン、歌手の編成で、バイオリンは後にティピカ東京に入った片上知晴君であった。

「田園」ステージ上（昭和３８年頃）の「大塚典とロス・タンゲーロス」。　左から大塚　典、小林一夫、稲留（現・福田）和子（歌手）、筆者、荒木真一郎（歌手）、片上 知晴。

そうこうするうちに、私に海外留学の話が 持ち上がった。結核と免疫の勉強にフランスのパスツール研究所に留学しないか、との話である。外国に行けば楽器が弾けなくなるので断った。その翌年結婚したが､また､アメリカへの留学の話である。これもバンドネオンの故で断った。

ほどなく学位を取り、大阪府内の病院勤務と大学での研究は続いた。しかし大学は何時までも気ままを許してはくれない。辞令が出た。国立愛媛病院内科部長兼保健所長のポストである。医師としての地位に不足はないが、愛媛県に行けばタンゴと縁が切れる。私は苦渋の選択で病院を辞し大学からも去った。タンゴ故に。～Por Tango～　選んだ道は開業。

ある日、小川さんからの連絡で､「今名古屋のダンスホールに出演しておりバンドネオンは皆東京からの人だが、１人の合流が遅れるのでエキストラで来て欲しい。」とのこと。本業の診療は代診を頼んで駆けつけると、本来は４人編成だが１名足りない。そこに加わった。３名中２人がディアトニコだった。記憶に間違いがなければそのうちのひとりは前田照光さんで、他の２人も上手だった。

大阪のことばかり書いてきたが、東京にはディアトニコの上手な人が多くいた。前述した早川さんに会いに行った時、新宿のダンスホールで西塔辰之助のティピカ・パンパを聴いた。全員ディアトニコである。また、昭和３４年新橋の音楽喫茶で岡本昭さんの演奏も聴いた。どちらも素晴らしい演奏でバンドネオンのテクニックが優れていた。

この頃私と一緒に弾いていた京谷明君の弟（弘司）さんがバンドネオンを始め、ティピカ東京に入った。彼はクロマティコ奏者である。そのティピカ東京はオスバルド・プグリエーセ楽団のバンドネオン奏者ホルヘ・カルダーラを奏者として迎えた。私もティピカ東京でカルダーラの演奏を聴いたが、日本人奏者とは全然違う奏法に圧倒された。その後フェルナンド･テルも招いている。どちらも衣･食･

住付きだから早川さんも大変だったと想像する。しかしこの２人が日本のタンゴの向上に果たした役割は大きく、つくづく早川さんは偉い人だと思う。

＜本場アルティスタ達との交流＞

さて、昭和３６年フランシスコ・カナロの楽団が大阪劇場で演奏会を行った。ダンス、フォルクローレも交えての公演であったが、第一バンドネオンのオスカル・バシルとは後に友人となり、彼の使っていた楽器を買った。

昭和４０年の初めキンテート・レアルが大阪に来た時、全員を日本料理屋に招待し、ペドロ・ラウレンスからバンドネオンの手ほどきを受け２人で合奏した。アルゼンチン（以下亜国）の奏者と一緒に弾いたのはこれが初めてであった。

昭和４２年、私はロス・アセス・デ・オーサカ（以下ロス・アセス）を結成した。“大阪のエース達”の意味である。バンドネオン２人、バイオリン３人、ピアノ、ベースの７名編成である。ロス・アセスは大阪、神戸を中心としたタンゴフアンから支持され、特に神戸のフアンから温かい声援を受けた。この楽団は今も健在である。

朝日放送「お早うパーソナリティ」にはしばしば出演した。その間神戸タンゴクラブが招いたロス・セニヨーレス・デル・タンゴと共演した。メンバーの１人にドミンゴ・フェデリコがいたが、彼は私と同じく医師である。そのよしみで彼のバンドネオンを安く譲ってもらった。

昭和４８年にはフアン・ダリエンソ楽団大阪公演が開かれた。私はプロモーターと面識があったので大阪ロイヤル・ホテルでダリエンソ楽団のディナーショウを主催し、私の楽団も出演した。その時長老のフアン・ポリートに頼み込み、一曲だけロス・アセスのピアノも含めた全員をダリエンソ楽団と共演させてもらった。曲は「Felicia」である。私はルイス・マジオロとカルロス・ラサリの間に座ったが、演奏が始まると力を入れて豪快に弾くバンドネオン奏法の何と軽やかなことか、しかも大きな音である。特にマジオロは私に弾き方が良く判るように楽器を近付けてくれた。

＜初の海外旅行はアルゼンチン＞

私の友人に大阪市阿倍野区でタンゴ喫茶店“チケ”を営んでいる中西俊二さんがいる。アルマンド・ポンティエルの大のフアンで、この楽団が大阪に来るたびに大いに歓待した。

昭和４９年、ポンティエルから令嬢の結婚式の招待状が中西さんに届いた。私に一緒に行かないかと声がかかる。承諾して旅行会社で日亜間往復航空券とホテルの手配をした。次いで神戸の亜国領事館に廻り領事に事情を説明したところ、日本人秘書に指示を与え、彼からポリートとポンティエルに我々のスケジュールを書いてもらった。私はスペイン語が全然解らない。中西さんも同じ。今から思うと無茶な行動だ。秘書の方は、亜国に移住しブエノスに在住の日系一世上原清利美さんの住所と電話番号を教えてくれ、領事館から連絡しておくとまで付言してくれた。

７月のある日、私達２人はカナディアン・パシフィックで羽田を出発、チリのサンティアゴ経由で２晩機内泊し、早朝の亜国エセイサ国際空港に到着した。初めての海外旅行である。税関を出るとポリートの姿があり、ポンティエルの顔がこちらを見て笑っている。ポリートは御子息の車、ポンティエルは自分の車で迎えに来てくれたのだ。２台の車でホテルに送ってもらった。ポンティエルとは面識がなかったが、ポリートは１年前に一緒に演奏した私を良く覚えてくれていた。とうとうここまで来た。ホテルの周りを歩きながら感慨無量だった。中西さんはポンティエルの迎えの車で結婚式に出席し、帰りは遅くなりそうだ。

上原さんに電話を入れたところ、ほどなくホテルまで出向いてこられた。初対面の挨拶の後、食事の時間（夕食は９時頃からでタンゴの店は１１時頃から開演するとのこと）まで色々伺った。

上原さんは昭和５年に沖縄から移民として亜国に渡りさまざまな職種に就いたが、今は“お灸”の専門医として診療所を経営しておられる由。御子息２人、御令嬢２人のお子さんに恵まれ、長男は医師で診療所を持ち、次男は建築技師、長女は臨床検査技師で開業しておられる。

上原さんが移住して来た頃はブエノスの路上でカンカン帽を被った黒人がバンドネオンを弾き、タンゴの演奏をしていたことなどに話が及び、私が後に本を書く時上原さんの話がどれ程参考になったか分からない。

夕食にほどよい時間になったので出かけた。人の上腕ほどもあろうかと思われる大きさの肉を食べ、ワインを飲んでも日本円で１５０円くらいの安さだ。とは言え、当時海外に持ち出せる外貨は１,５００ドル（パスポートに金額を記載する）までだからタンゴ以外の贅沢は控えた。

左よりフアン・ポリート、フアン・ダリエンソ、中西俊二
後列　筆者（1974年7月　ブエノス・アイレス）

食事が済めばお定まりのタンゴだ。“カニヨ・カトルセ”、“ミケランジェロ”など、一杯のウイスキー付きで約４００円､朝まで演奏しているから３店くらいは梯子が出来る。私が最初に行った店は“カニヨ・カトルセ”で目の前に５人のバンドネオン陣が並び、表現力・技術など演奏の質全体が日本でのコンサートとは比較にならない。３０分程で別の楽団に交替するが、演奏と歌がメインで踊りが入るのはずっと後の時間だ。

２日後ポリートがホテルに来るなり、今夜フアン・ダリエンソと会う約束があると言う。それで夜の１２時頃、“７月９日通り”に面した喫茶店で本人に会った。通訳は上原さんにお願いし色々と話をした。間もなくダリエンソは亡くなったから私達が彼と会った最後の日本人だろう。

こうして私はブエノスの見物とタンゴ鑑賞の日々を過ごしたが、そろそろ帰国の日が近づいて来た。そこで上原さんはアサド・フィエスタを催してくれた。人間くらいの大きさの肉塊を焼いて客をもてなすパーティーである。その日、ポリート、ポンティエル、ミロ・ドーマン、フアン・カルロス・ニエシ、それぞれご夫人同伴である。この時ポンティエルにバンドネオンを買うように勧められ、一台の楽器を買った。当時の日本円にして１万６千円で、レオポルド・フェデリコが使用していた代物とのことだが、軽くて良く鳴る素晴らしい楽器だった。後日フェデリコに見せると自分が使っていた楽器だと即答した。永らく愛用した。

訪亜から帰国するとすぐに、神戸大学医学部に留学中のエクアドルの医師からスペイン語を習った。毎日曜吹田市千里の留学生会館に通い会話、翻訳、特に文法を詳しく教えられた。後日、自著を出した時や、亜国で手に入れたタンゴに関する本を読んだ時など、この文法の授業にどれだけ助けられたことか。

その後、毎年亜国を訪れタンゴを聴き、友と会いテレビ、ラジオに出ていた。昭和５７年の対イギリス戦争（マルビナス戦争～英国ではフォークランド紛争と呼称）の時も行った。楽器のパーツも買った。その翌年ポンティエルは拳銃で自殺した。

ここで亜国人の精神構造を医師として少し語りたい。前に述べた上原さんの御子息が医師であった関係で、彼の国の医療事情、特に病院の機能を調べた。亜国の病院は２４時間開いている。診察時間は午前９時から午後５時までだが、医師は交替で朝９時まで救急外来をする。又、一般開業医も決められた日に夜間救急の勤務に加わる義務がある。これは全科の医師が対象であり、この救急外来をグァルディアと呼ぶ。救急外来は日曜の昼間も機能している。私が夜間の休日診療で亜国の人と会えない時、グァルディアに行くと言えばすぐに理解する。この国には昔からインターン（無給医療研修）制度というものがない（日本でも１９６８年に廃止）。グァルディア制度の発案者はナポレオンである。そしてこのグァルディアの中にインテルナードが含まれている。タンゴ、「エル・インテルナード」の意味は、もうお判りでしょう。

この救急外来に来院する患者の半数以上が神経疾患で、亜国には精神科医が非常に多い。と言うことはとりもなおさずこの国では精神分析を受けている人がたくさんいるということになる。ピアソラもその一人で、私は彼の主治医と話したことがある。話の中身の公表は差し控えるが、彼の作品から想像して欲しい。なお、私は音楽療法学会に所属しているが、タンゴは未だにテラピー（治療、療法）として採り上げてもらえない。

ポンティエルの死の原因は秘密にされているが、子息を拳銃で射殺し、自らも命を絶った。私宛の手紙があったが、死を思わせる内容は一語もなかった。亜国にはアラブ系の人が多い。タンゴ界ではオスカル・バシル、オラシオ・サルガン、オマール・バレンテなどである。バシルは「遠い昔スペインから精神の少しおかしい人が何人か亜国に渡ってきた。」とだけ話していた。

＜平成の転機と充実した活動＞

さて、世は平成になり、ロス・アセスにも動きがあった。第一バイオリン奏者がピアノを誘い新楽団結成のために抜けたのである。そこでこの楽団名での活動を一時休止し、大塚君、バイオリンの古橋ユキさんとで編成したトリオ・ボナリアを立ち上げた。ボナリアとはブエノスアイレスの名の起源となったイタリアのサルディニア島のマリア像の名である。

平成３年、還暦を記念して「タンゴ 歴史とバンドネオン」と題する本を出版した。反響は大きく、また売り上げは順調で再版までなっている。

ここで最後まで判らなかったのが、バンドネオンの名の由来であった。ドイツ人のハインリヒ・バンドが考案した楽器であるが“ネオン”の説明がつかない。アルゼンチンで苦労して手に入れた「バンドネオンの歴史」でも名前の説明がこじつけのようである。しかしベルリンの壁が崩壊しソ連が消滅し、ドイツがひとつの国家に統一されたことでその謎は解けた。

バンドネオンを制作していたアーノルド社は東ドイツにあったためそれまで資料が出て来なかったが、ドイツが一つになり、その統一ドイツの友人から送ってもらった文献によると、次の通りである。

バンドは自分の名前の後ろにギリシャ語のIONをつけた。ギリシャ風の名前になるからである。BANDとIONの間にあるONは接続詞の役目を果たしBANDONIONと言うドイツ語になり、それがスペイン語でBANDONEÓNになった。この紙面をお借りして本の訂正とさせていただく。

本を出版した年の８月、歌手の春日智恵子さんと共に訪亜し、エンリケ・クッティーニ楽団とコンサートに出演しテレビにも出た。私もバンドネオンを提げて春日さんの伴奏をした。

平成１０年、日本経済新聞の文化欄で私の記事が掲載されると、名古屋、高松などから演奏の依頼があり、私にとっても充実した時だった。大塚君、古橋さんに感謝している。

その前年、タンゴ生活５０年の記念コンサートをホテル日航大阪で催し、再編成したロス・アセスに岡本昭さん（bn)、古橋ユキさん（vn)、大村雅敏さん（cb）が友情出演してくださった。

平成１７年８月、私とバイオリン、ピアノのトリオはブエノスのボエドに在る“エスキーナ・デ・オメロ・マンシ”（２００人以上収容できる旧いタンゲリアのひとつ）で演奏した。その上、滞在中にCDを録音している。

さらに大阪市とブエノスアイレス市は友好姉妹都市ということでもあり、我々は大阪市の音楽使節として上述のタンゲリア・ライブに先立ち、同年７月に大統領府博物館ホール、市文化センター、国会議事堂、日本庭園でロス・アセスによるコンサートを行った。古橋さん、バンドネオンの小川紀美代さんに参加していただき、若いロス・アセスを盛り立てて頂いた。これらコンサートのお膳立ては皆ブエノスに住む日系の人達の奔走による。

昨年（平成２２年)、私は８０才になったのを機に記念コンサートをホテル日航大阪で開いた。以前のピアニストである上田裕司君を始め旧メンバーも駆けつけてくれ、その上古くからのファンが多数詰めかけてくれて大盛況であったことは嬉しい思い出である。

私の手元にはポリートからもらったダリエンソの原譜、ポンティエルの「ア・ロス・アミゴス」など貴重な楽譜を沢山保管してある。自分の年齢を考える今、いずれ手元を離れ、若い人が役立ててくれる日が到来することを嬉しく夢見ている。

最後に、忘れるところだったが故ポンティエルのバンドネオンは２台とも私が買った。これは、私が密かに抱いてきた“お宝”である。

この文章投稿の機会を与えてくださった日本タンゴアカデミー会長島﨑長次郎氏に厚くお礼を申し上げます。

平成２３年７月　　完

日本のタンゴ楽団（6）

◉21　故・池田光夫氏を悼む
◉22　もうひとつの幻？のタンゴ楽団『カランバ（殿様楽団）』について
◉23　頭山光とその楽団
◉24　「終戦直後地方巡業に追われた超人気タンゴ楽団の表情！」　＜桜井潔とその楽団繁盛記＞

蟹江　丈夫（元会員）

２１

故・池田光夫氏を悼む

バンドネオン奏者としてマエストロとして、また有能なアレンジャーとしてわが国、戦後のタンゴ界を支えて来た池田光男さんが６月12日* 午前１時30分、逝去された。

池田さんはバンドネオンを21才のとき初めて手にされた。伴薫のタンゴ楽団『メキシカーナ』に在団されていたときのことである。このときバンドネオン奏者の相棒は岡嵜恵二さんであった。当時、日本のバンドネオン奏者はほとんどがクロマチックのバンドネオンを使用して居た。ディアトニック・バンドネオン奏者は数える程しか居なかった。これはバンドネオンを手にした人の多くが中国の上海、天津、大連、奉天、香港などで購入され、そのときの貿易商がドイツからクロマチック・バンドネオンを多く仕入れ、多量の在庫を持って居て売り焦ったためと云われて居る。池田さんは教則本もなく、師匠も居らず、独学で必死にこの楽器の習得に文字通り寝食を忘れて取り組んだ。半年余りで何とかある程度弾きこなすことが出来るようになったと語っておられた。当時、池田さんはギター、アコーディオン、ピアノといろいろな楽器を手にミュージシャンとして生活しておられた。東京、荒川区日暮里のご出身で本来なら家業を継がれるところであったが音楽家としての道を歩まれることとなった。

1950年（昭和25年）オルケスタ･ティピカ･サンテルモを結成、若干23才のマエストロの誕生である。伴薫楽団の先輩にはあの大マエストロ、早川真平さんが居られた。奇しくも私はこの旗揚げ興行に行くことが出来た。当時、東京で戦後二本目のアルゼンチン映画『タンゴの歴史』が公開された。新宿文化劇場で上映とのことで受験勉強の合間を縫って夏期講習の教室から新宿へと走って行った。びっくりしたのはタンゴ・アトラクションとのことでこのオルケスタ・ティピカ・サンテルモのステージに先ず最初に接するところとなった。

バンドネオンをかぶりつきで初めて見ることが出来たのもこのときである。それまで桜井潔とその楽団の坂本政一さんのバンドネオン、オルケスタ・ティピカ東京の日劇のステージで遠くの席から望見する程度であったので、そのインパクトは強烈であった。バンドネオンが池田光夫さん、前田照光さん、小峯勘二さん、バイオリンに山田早苗さん、ピアノが坂西公一さんと当時の若手といわれた人たちの熱気あふれる演奏に酔い痴れることが出来たのは幸せであった。歌は高原美恵さんという小柄だが美人の人で歌は『コンフェシォン』と『テ・オディオ』であったがイマイチの感じであった。

---

*1　平成14年６月12日（編集部注）

その後、NHKの公開録音でオルケスタ・ティピカ東京のなかに池田さんが居られるのをみて早川さんに聞いたところディアトニックを一人入れていると仰って『池田という男だがなかなか弾く』とも云われて居た。

放送とか、ステージ演奏のときは早川真平とオルケスタ・ティピカ東京に準レギュラーとして参加されて居た。

その後はNHK専属のオルケスタ・ティピカNHKのマエストロとして活躍され、片山光俊、小田潔、前田照光氏らとバンドネオン陣を固められた。1980年代には作曲家の船村徹さんのおるけすた・てぃぴか・にっぽんに参加、全国行脚、二枚のLP録音（日本コロムビア）をこなされた。一方自らのタンゴ楽団『ロス・アミーゴス』でも東京・日本橋の「三越劇場」でのタンゴ・コンサートや六本木の「カンデラリア」での演奏活動等、私たちタンゴ・ファンにとって身近かな存在であった。この横浜ポルテニャ音楽同好会にも来会、すばらしい演奏を聴かせてくださった。娘さんのピアノがすばらしく池田さんは私に「これは長年の夢だったんだ。今日この横浜で娘とピアソラを演奏できるなんて…」と目を潤ませて語っておられたのがいつまでも目に焼きついている。1950年の初ステージから五十年ぶりのことであった。

（本誌　No.2（1998）p.31より）

グラン・マエストロ池田光夫さん、安らかにお休みください。タンゴ・ファンのためにいろいろとご尽力有り難うございました。

（享年75才）通夜、葬儀には菅原洋一さんはじめ多くのタンゴ仲間が参列、池田さん主催のタンゴ・ミュージシャン大同窓会の観であった。

＝＝＝

２２
もうひとつの幻？のタンゴ楽団『カランバ（殿様楽団）』について

1951年（昭和26年）、朝日新聞の社会面に「殿様たちが演奏するラ・クンパルシータ」という記事が掲載された。「スペイン語で不思議？というこの楽団は殿様（華族様）たちの楽団である。斜陽族といわれてはかなわないとばかりの張り切りぶりで見事にクンパルシータを演奏して居た。」と写真入で紹介されていた。

1951年頃、高橋忠雄先生を囲む中南米音楽研究会は東京･南青山、青山学院の真裏に在った華頂（旧宮家）邸サロンで毎月タンゴの集いが開かれ、週末にはダンスの会が催され、高松宮もご出席になられたこともあったとのことである。そこでのタンゴ楽団がこのカランバであったのである。バイオリンが加賀百万石のお殿様、前田利建氏、ご子息利祐さんがピアノ（当時17～8歳）、奥様政子様がバンドネオン（クロマティコ）でよくフェリシアなど～少々弱々しかったが結構サマになっていた。この楽団の指揮には早川真平さんが当たっていた。前田侯は当時、コロムビア・レコードの洋楽愛好会の会長も務められていた。1952年５月刊の中南米音楽誌創刊号にティピカ・スタイルのアマチュア・バンド～キンテート・ティピコ・ロス・パジャドレスとして紹介されているが、この前身がカランバなのである。バイオリンのセカンドが鎌倉市在住の朽木綱博氏、ご子息朽木彰氏がギターを弾いておられた。

当時のタンゴ・ファンが仰天したできごとがあったのは、1951年12月早大大隈講堂のタンゴ演奏会で早川真平とオルケスタ・ティピカ東京に前田夫人がバンドネオンを手に早川氏と並んでステージに花を添えた形となったことである。筆者も袖でみていたがほとんどお弾きにはならなかった。その何日かあとの日比谷公会堂の演奏会ではグラン・オルケスタ・シンフォニカ東京に入られ、ここではかなり立派にお弾きになっていた。前田侯はカランバは腕よりも熱意を見てもらいたいと常々おっしゃっていた。

ホントの余談ではあるが朝日新聞社会面で大きく報道されてしまった事件がある。当時、このダンスの会、中南米音楽研究会のレコード・コンサート、タンゴ・ミュージシャン、高橋忠雄氏らとの懇談会は月一回のペースでこの南青山の華頂邸サロンで開催されていた。1951年初夏頃からプッツリと案内がこなくなってしまった。ある朝、妹が「お兄さん、案内が来ない筈よ、この新聞記事をみてごらんなさい。」と朝日新聞の朝刊を持ってきた。それを読んで肝を潰さんばかりに驚いた。「旧宮家の悲劇、華頂家の珍事！」と三段抜きの記事が出ていた。「華頂氏は皇族のなかでも学者タイプの地味な男性であった。夫人は正反対で社交家で毎晩のように邸内サロンで舞踏会を開き、華頂氏は「また今日もか、、、」とにがにがしい表情で一人娘の花子さんと語り合っていた。ある日、今日は静かだなと華頂氏がなにげなくサロンをのぞくとソファーで某氏と華頂夫人が重なり合って居り、華頂氏は半狂乱の状態になってしまい、夫人は翌日家を出て某氏のもとへ転がり込んだという。」と今日なら週刊誌、テレビのワイド・ショーが飛びつきそうな記事であった。それ以後、タンゴの集いが華頂邸で開かれることはなかった。従ってカランバも姿を消し、幻のタンゴ楽団としてのみ、その名を遺すこととなったのである。

＝＝＝

２３

頭山光とその楽団

戦争が終わって間もない1947年頃は、NHKラジオ全盛時代～と云ってもこれしか無かった。

毎日午前11時30分からの15分間は軽音楽の時間で、必ず生演奏（在京の楽団）が聴ける唯一の番組として多く愛聴されて居た。

いろいろな楽団が出演していたが、常連といわれるような楽団が多く、毎日のことだけにそのようにならざるを得なかったのかもしれない。

松本新室内楽団、楽団南十字星、原幸太郎と東京六重奏団、吉野章楽団、緑川嘉信とベルデ･イ･ス･オルケスタ、吉田秀士楽団などがタンゴのジャンルでは常連であった。桜井潔とその楽団は超人気だったために、ゴールデン・タイムの「希望音楽会」などの出演に追われ、この時間に顔を出したのは数回であった。

このなかによく顔を出して居たのが『頭山光楽団』であった。この人は、元ボードビリアンで浅草で活躍、あきれたボーイズのメンバーであった。レコードでも「大人の四季」などで「ラ・クンパルシータ」をバイオリン・ソロで聴かせて居る。頭山光は芸名、４～５年前に90才近くで夭折して居る。

あまり大した腕では無かったが、バイオリンを手に「センティミエント・ガウチョ」や「ゴルゴタ」などを演奏して居た。バンドネオン奏者の池田光夫さんが一時所属されて居たこともあったが、放送によく出る頃にはバンドネオンは居らず、アコーディオン２台でこなして居た。テーマ音楽が「ロドリゲス・ペーニャ」だったので、このあたりで聴く人々の耳を惹いたようである。

とにかくおもしろい人で、この人のあるところに必ず爆笑ありと云われて居た。

当時、高橋忠雄さんが、タンゴのミュージシャンを集めて勉強会をよく開いて居られた。私も高橋先生のご好意で何度か出席させていただいたが、アニバル・トロイロやフランチーニ＝ポンティエル、アストロ・ピアソラなど当時、耳あたらしい演奏が次々に登場し、みんながため息まじりで聴いて居た。オスバルド・プグリエーセの演奏を聴き終わったとき、頭山氏が『アーあ、サンマじゃア駄目だ！』とやって満場を爆笑の渦に捲き込んだ。しかし、この言葉には何となく実感がこもって居た。

銀座・カリオカ・クラブの専属楽団を務めるかたわら、ミュージシャン・ユニオンの役員としても活躍、ミュージシャンの福祉・厚生面での確立に大きな役割を果たされて居た。桜井潔さんとも交流があり、いつも日本タンゴ界の名物男としてその存在は大きなものがあった。しかし、演奏面ではタンゴ愛好家からはイマイチであり、今、その名を覚えて居る人は皆無に近い状態である。

中央・頭山光
左側・池田光夫　　右側・井土勝嘉

(写真は日劇ミュージックホールに出演時のもので蟹江氏提供)

＝＝＝

２４

「終戦直後地方巡業に追われた超人気タンゴ楽団の表情！」
＜桜井潔とその楽団繁盛記＞

1945年（昭和20年）８月15日、日本人の60才代以上の者にとっては太平洋戦争の終結が、敗戦というかたちで覆いかぶさって来た衝撃的な思い出として胸に刻み込まれている筈である。反面、自由に文化活動が出来るよき時代の始まりの日としても歴史に残された。タンゴという言葉がマスコミに登場が再度許されたエポックなる大きな意義をもった日としても、銘記されるべきであることは云うまでもないことである。

戦後はじめてNHKラジオからバンドネオンの音が流されたのは、終戦日から20日ばかり経った９月３日の『明朗音楽会』中継放送に出演した桜井潔とその楽団演奏であった。曲は『長崎物語』であったが、とにかくバンドネオンの音を聴く人々の耳がとらえたのである。当時、バンドネオン奏者をつとめて居たのは坂本政一、佐川峯のふたりでティピカにちかい編成であった。それから桜井潔楽団はNHKの花形となった。

同時期放送開始となった第二放送には「楽団南十字星」「松本新室内楽団」がほぼ連日出演していた。ほかに、原孝太郎、緑川嘉信、頭山光、吉野章、小泉幸雄、小野宗雄、伴薫、本堂藤三などの名がよく聞かれた。

桜井潔とその楽団のこの時期（終戦直後）の人気は大変なもので、NHKが出演依頼しても日程がままならず、マネージャーの黒木氏に放送局側が頭を下げてお伺いを立てる状態だった。ステージ出演は全国引く手あまたで、一年中休む日もなく演奏し続けたという。ドラム奏者だった辻村勇さんのお話によると、大阪まで夜行列車で行き、大阪、神戸、京都などで演奏、終わってまた夜行列車で帰京、すぐ日比谷公会堂、神田の共立講堂、などで演奏、その晩、また夜行列車で東北・北海道の演奏旅行に出るという状況が続き、関東地方でよかったと思っても、今日は群馬県、高崎市、伊勢崎市、桐生市などのステージをこなし、その足で栃木県足利市、宇都宮市と歩き、楽団員たちはよくぞ倒れないで日々を送ることが出来ると思うこともあった程だ。

しかし、どこへ行っても演奏する曲目は『長崎物語』『ハルピン夜曲』『佐渡おけさ』などで、たまに大学でのコンサートや、桜井潔の息子さんの学校「九段の暁星学園」などでは『ラ・クンパルシータ』『ロドリゲス・ペーニヤ』『夜のタンゴ』など洋ものを主体に演奏したそうである。

東北地方や北陸地方などの巡演では、洋楽ものが演奏されることは殆ど無かったとのことである。辻村さんはいつも、大きなドラム・セットの運搬では苦労の連続であったと語っておられる。当時、トラック輸送は出来ず、よくてもオート三輪、ひどいときは牛馬車という時もあったそうである。しかし、全国どこへ行っても会場は超満員で、入り切れない人の怒号が聞こえる程で、気分は最高で乗りに乗った快演奏に終始することが出来、あのような経験は、二度とすることの出来ないラッキーなもので、生涯の記憶としていつも胸のうちにあるのは、辻村さんは自分だけでなく、桜井自身をはじめ楽団員全員がその思いは同じ気持ちを持ち続けている筈だとおっしゃっておられる。

坂本政一（バンドネオン）さんも、桜井さんはそれだけに厳しい人で規律や服装に殊のほかやかましく、普段でもキチンとした服装をして居ないと機嫌が悪く、自分より遅く到着したものには「もっと早く来るように・・」と小言を云われたりしたそうである。戦前派の松野正俊（ベース）さんも「私

もよく、叱られました。演奏会が終了したら直ちに平服に着替えるように・・といつも云われました」と語っておられた。またステージの振り付けもかなり厳しく指示された。バンドネオンの持ち方、姿勢も曲によっての向きなどこまごまと指示されたと云う。表情もいつも心もちニコやかにと云われ、皆それぞれ苦労して表情を作って居た。もちろん暗譜が原則で、地方のステージなどでは譜面台は置かれることは無かった。NHKラジオ出演の時は譜面を見ることが許され楽だったと坂本さんがおっしゃって居た。桜井潔のステージの人気はこんな手法が功を奏して生まれたのかも知れない。ひとつのタンゴ楽団として演奏だけのステージをこなした回数では右に出るものは居ないと思う。あの、早川真平とオルケスタ・ティピカ東京も残念ながらこの面で桜井潔を追い越すことは出来なかった。桜井が幸運だったのは戦中、戦争直後という特殊な時代環境に活躍の場が与えられたことも、ひとつの大きな要素となっていることも事実である。

昭和２２年　群馬桐生市公会堂にて

＝＝＝

全国リレー随想（9）

タンゴ一筋　ただし寄り道　回り道

加藤　光夫（小樽市）
小樽・札幌中南米音楽愛好会

近時雑感

20年代から60年代までのタンゴの世界をたっぷり聴くことで一途に過ごしてきた。手元のＬＰ，ＣＤもそれらを手に入れた頃の喜びに加えてタンゴについて語り合う仲間に恵まれたこと、加えて後期高齢の現在まで健康で過ごせた陰なる連れ合いにも感謝すべきと思う。趣味としてタンゴを選んで聴き飽きたということもない。

“癒されるならバッハでもタンゴでも”

現在札幌の朝日カルチャーで「アルゼンチン・タンゴを聴く」を担当している。発端は’87年６月、アサヒグラフ誌が増刊で「タンゴみる・きく・おどる」を発行したことがあって当時の編集の中町広志氏が後に札幌の支社長で赴任されていた。拙宅に来られてタンゴを講座で取り上げたいとのことだった。私の心配はタンゴを聴くだけでそんなに受講者が集まるだろうか。愛好家の勝手でとりとめのないトークでがっかりされてもと渋ったが結局月一度ということで引き受けた。ただ条件は現在の愛好会の会場では使用できないＬＰをこの際使うことにしてもらった。

’95年４月、講座のスタートから参加17～8人で１時間30分と15曲程度のディスクジョッキーを始めた。はじめの頃の２～３曲は手持ちのＳＰは手回しの蓄音機（ポータブル・国産)、と卓上電蓄（中国製）も使った。

カルチャー半年講座の代わり目になるとタンゴの世界にグーンと引き込まれる方が少なからず居られる。ＬＰやＣＤ捜しをして聴き比べをしたり、見つからずに止めてしまったりで10数曲を決める。熱心にメモを取ったり帰りがけのコーヒー店で話したりで、そんな時に使ったＬＰやＣＤ、ビデオ等レンタルで次回までＯＫ。いろいろな宿題は講師に出されるようなもので持ち帰る。新しい方には、タンゴの楽しみはまず沢山聴くこと。演奏家のいろいろなスタイルに触れ歌であれば簡単な内容を知る。古いタンゴにしっとりした情感を得て、新しいタンゴのテンポや編曲の妙味を味わうなど・・・・解説は適当に聞き流してと言いながら72回を終えた。

“解説をしたくなるのが隠し味”

新しくタンゴに関心を持ち始めた人達にはＬＰ，ＣＤだけではなくカセットやビデオ、MD，DVDそれに本、古い雑誌も役に立っているのが嬉しい。最近‘断捨離’なる新語も生まれ我がコレクションも俎上に上がりそうな雰囲気だ。聴かないカセットやＬＰ，読まない本や雑誌が目標になっているらしいが、経験から捨てた途端に必要になってくる。整理が悪いので探しているうちにそれを忘れて、以前探していたものがひょっこり出てくる。話が横道に逸れて別なことを考えている。会友が電話一

つで答えて呉れるのが有り難い。

20年程前から「川柳」の世界にも、のめり込んでしまった。こちらも仲間が増えるにしたがって抜けられなくなりやはり本や雑誌が増えてくる。紙とエンピツの話だが月例のタンゴの他に句会というものもあり‘締め切り’がある。毎日が日曜の筈に月曜が結構ある。川柳の会の主宰から本州のある結社の著名人もタンゴが好きでと聞いては手紙を出さねばなるまいし。

“断捨離に意見が割れてから無口”

講座ではたとえば次のようなものを配布している。

タンゴ名曲100選	石川　浩司
タンゴ名曲50曲（すいよう会報・アサヒグラフ・タンゴ特集）	湯沢　修一
パリ・ブエノスを往復するタンゴ人・タンゴ名曲ものがたり	ラティーナ
ガルデル映画「想いのとどく日」をビデオで見る	加年松城至
タンゴ・エン・ハポン（戦争とタンゴ、戦後のタンゴラジオ放送）	蟹江　丈夫
オスバルド・プグリエーセ（今月のタンゴ人）	石川　浩司
タンゴの楽器、オルケスタ、40年代のヒット曲（中南米音楽誌）	中南米音楽
スクリーンの中のタンゴ（アサヒグラフ・タンゴ特集）	朝日新聞社
タンゴ歌謡万華鏡（酒と涙の日々・鐘。上半身のタンゴ）（ラティーナ）	加年松城至
アルフレド・デ・アンジェリス　（ラティーナ盤ＣＤ評）	蟹江　丈夫
中南米音楽は大人の音楽である　（ラティーナ）	黒田　恭一
クラベル・デル・アイレ　（永遠のタンゴ・大学書林）	細川　幸夫

新しいファンへの本の紹介では「心を熱くするタンゴの名曲200選」（高場　将美、青木　誠）中経出版、「小松亮太とタンゴへ行こう」（小松　亮太）旬報社、タンゴは少ないが新刊の「ラテン音楽名曲名演ベスト１１１」（竹村　淳）アルテス･パブリッシング、など。雑誌ではラティーナを勧めている。ラテンアメリカ音楽全般を平易にまとめた故中村とうよう氏の「ポピュラー音楽の世紀」岩波新書が絶版で札幌あたりの古書店でも見当たらないのは残念。タンゴのハードカバーの本など見たことがない。

ところで過日CAMBATANGO（’11.11.2）の公演があった。バンドネオンの平田耕治氏にお会いして今度アカデミーの会員になられた歓迎？を申し上げた。当日は私共の月例会員と朝日講座からの40人。それに函館の石島　識氏が10人と共にやって来た。演奏は平田氏のステージからのナレーションで親しみもあり好評だった。

(左) フェデリコ・スコルティカティ
(右)　ガブリエル・クラウシ

小松亮太氏にはなかなか会う機会もないのだが、前記の本は講座などには教科書！として最適だと思う。数年間スカパー放送（ch271）でソロ・タンゴ・イン・コンサートの進行役でいつも見ていたが。

番組の最後には日本の若い演奏家などを紹介していたのが良かった。札幌公演でギターのレオナルド・ブラボー氏と来られたときには以前話したある演奏家のことで参考のカセットを戴いた。「母親と子供といっしょに楽しむ」演奏会とかピアソラ幻のオラトリオ「若き民衆」（NHK FM・東フィル　'08年）へのチャレンジ、アメリカのザ・ブロドフスキー・クアルテットとの共演（NHK TV・王子ホール　'09年）など見ることができた。また10時間に及ぶ「タンゴ三昧」（NHK FM　'11年）では小松ご両親の古い音源も加え116曲もの新旧タンゴを取り上げていた。

スカパー（ch370）で放映されていた昭和タンゴの時代に焦点をあてた企画番組は日本の演奏家に呼びかけての構成で、当アカデミーの島﨑、西村両氏の出演もあってタンゴ愛好家にもよい贈り物だった。小松氏のやりたかったことが良く感じられた。

"お互いに好きと言えずの回り道" "ピアソラにああだこうだがまた楽し"

アラカルト

当会の月例コンサートも2000年９月30日に500回、2011年４月で550回を数えた。モットーはjタンゴを聴く2000曲（カナロからピアソラまで）！。いつぞや会員櫻井静子氏が1983年以降当会のこれまで取り上げた曲をまとめると会報のバックナンバーをもって行かれた。そのうち最近の2000年１月から2005年12月までは特別例会も含めて64回で1819曲、同じ曲を除いて1195曲、495演奏家だった。曲の順位では毎月一曲はラ・クンパルシータで一位、延べ76種、以下登場回数の順位ではエル・チョクロ、フェリシア、カナロ・エン・パリ、ケハス・デ・バンドネオン、レクエルド、チケー、ガジョ・シエゴ、ラ・ジュンバ、リベルタンゴ。演奏家ではフランシスコ・カナロ、オスバルド・プグリエーセ、フランシスコ・ロムート、アニバル・トロイロ、フアン・ダリエンソ、マグリオ・パチョ、エドガルド・ドナート、オスバルド・フレセド、ロベルト・フィルポ、カルロス・ディ・サルリの順。実際には11位以降から会の特徴が出てくるのではと思っている。2006年から最近'11年までのデーターでも出すことになれば面白いかもしれない。ただ櫻井氏にこれ以上の作業をお願いするに忍びない。カナロ、ドナート、ティピカ・ビクトル、ダリエンソ、トロイロなど数回に亘るシリーズもあったし、作曲家３曲選では初登場曲もかなりあった。ピアソラの曲など滅法長いのでこうした例会にはなじまない。筆者の夢では昼を挟んで丸一日聴きまくるのも面白いといつも思うのだがやったことは無い。新しいファン、ピアソラからタンゴに関心をもち始めた方には'特別例会・講座'が良いのかもしれない。

現在の月例会場は'03年９月からはＪＲ札幌駅北口から連絡地下道で５，６分のエル・プラザで行っている。おおむね日曜日で参加数はここ数年は30人前後で午後の３時間半を楽しんでいる。

最近のプログラムを紹介すると'タンゴの楽しみ'（タンゴのテーマによる５曲選）喫煙、望み、慕情、巨匠、天空・・・（河村雅都）、作曲家３曲選　フェルナンド・シロ、アルフォンソ・ラクエバ、オスバルド・モンテス、フランシスコ・ロトゥンド、エルネウスト・ポンシオ・・・（山田　洋文）。３曲選'最近聴いたＣＤと楽団、演奏家シリーズ'リカルド・タントゥリ、カジェタノ・プグリッシ、アントニオ・ロディオなど・・・（岩垂　司）。最近聴いたＣＤから演奏家・女性歌手・・・（加藤繁幸）、以上ア

カデミー会員。歌の３曲のテーマは、カルナバール、キャバレー、マリア、･･･など歌詞カード配布（杵築　實）。筆者のアラカルトでは戦前タンゴからピアソラまでの落ち穂拾い。’11年10 ～ 11月は ‘楽しいポルテニア音楽の伝道師’ 蟹江丈夫氏を偲ぶ札幌での映像、すいよう会でのロドリゲス・タンゴ楽団ライブとか筆者の蟹江秘蔵コレクション公開。テレビ・ラジオからの話題・書店やブック・オフでの発見などの雑話、民音ＰＲまで。

“鳩の出る帽子を一つ買ってくる” “ぶらぶらと本屋の梯子飽きもせず”

拙宅は徒歩で坂道を下り20分ほどで海岸に出ます。二階から石狩港・厚田海岸が見え、小樽郊外、札幌寄りの団地に住んで40年。隣町にはスキー場。小樽も今は13万人ほどの街になりました。築港駅そばの商業ビルにはヨット・ハーバーを窓越しに見る大きな本屋があり、ゆったりした椅子が並んで、そばの書架には音楽・美術・映画など。札幌の大型店に負けないスペースです。

北緯45度のタンゴ

先に上海万博で行った「北海道DAY」のアンケート結果に日本で行った見たい所にわが北海道は９０％にも及んだとのこと。この冬も雪や氷に歓声を上げる中国や台湾からのツアー客が来るだろうと期待している。冬の味覚やお酒も大いに楽しんでいただきたい。先だってＪＲ札幌駅観光案内所に「ぶらら」と言う冊子があって、表紙に「北緯43度の旨し酒」とあったのでめくってみた。道央の札幌、小樽、栗山、千歳などの酒蔵やワイナリーが紹介されている。勿論、お菓子や水産物などのＰＲも載っている。

拙宅から路線バスで20分ほどのヨットハーバーに近い所にある「田中酒造・亀甲蔵」も出ていたので久しぶりに立ち寄ってみた。折からの観光客にまじって歴史ある銘酒「宝川・雪明かり」の試飲をした。この酒造、明治32年の創業、北海道の冷涼な気候を生かして四季醸造だそうで小さな酒蔵。見学者が絶えないようだ。

ところでピアニストの高橋アキのＣＤに「Hesitation-Tango」（CAMERATA-CMＣＤ-28105）がある。アルベニス、ストラビンスキー、ミヨー、サティー、バーバーそれにピアソラ（ミケランジェロ70）、日本の西村　朗、近藤　譲など20曲が入っている。その中の一曲に三宅榛名の「北緯43度のタンゴ」があった。前半はおなじみのタンゴをイメージさせる序奏に続きハバネラ風タンゴが絡んでエンディングまで７分57秒！　ＣＤタイトルの ‘ためらいのタンゴ’ はバーバー作。

熊本マリのＣＤ「タンゴ」も楽しい一枚（KICC　227）。これは最近札幌のTSUTAYA でクラシックの方に鎮座していた。ピアソラの「天使シリーズ」でミロンガ、死、復活。ブラジル　ナザレーのヴィトリオーゾ、レマンド、７月９日。ヒメネスやアルベニスのタンゴ。どれも心地よい。おなじみのアルベニスはニ短調、イ短調の聴き比べができる。筆者にはタンスマンのタンゴがめずらしかった。熊本は75年にスペイン王立マドリード音楽院でかのホアキン・ソリアーノに師事。モンポウのピアノ曲全集を完成したのが ’91年。初ＣＤは「眠れる詩人の歌」（32FD7035）で日向敏文の編曲、なかにし礼プロデュースとなっている。モンポウのオマージュとしての盤は前奏曲集や歌と踊り集などから選ばれていた。エッセイやモンポウの伝記を訳すなど才気ある人。モンポウと言えばピアノ曲全集ＣＤ４枚のBOX（廉価盤で自演）がある。彼女、最近はタンゴへのアクセスは無いようだ。

過日マルタ・アルゲリッチのピアノ曲集ＣＤ６枚（SOLOS&DUOS　EMI）の１枚にピアソラの

タンゴ３曲入りというのを見付けた。開けてみるとメシアン、グスタビーノ、そしてピアソラではThree Tangos（Tres minutos con la realidad, Oblivion, Libertango）、デュオの相手はEduardo Hubert。'08年６月Lugano録音とあった。一曲目はかつて高橋忠雄さんがNHKの放送で「真実を持てる三分間」と紹介されていた・・・と今も記憶にある。このデュオの演奏はピアソラの改革路線への激しいチャレンジを思わせる。アルゲリッチに拍手。

“タンゴならグアルディア・ビエハと堅い人”

ピアノのデュオといえば先般来日のパブロ・シーグレルにエマニエル・アックスとの１枚がある（Tangolandia誌'11年秋号のTokyo Jazz Tangoレポートにカバー写真が出ている）。クラシックの演奏家とのこのＣＤ製作の発端や交流が書かれていて'96年の盤だがシーグレルの意志がよくわかる。演奏もスリリングだった。'11年の来日は新聞、雑誌に多く取り上げられていたが、残念ながら聴けなかった。またの機会を待とう。

“輪廻転生あわてることも無いだろう”

館野　泉の本「ピアニストの時間」を読んでいたらアルゼンチン訪問でタンゴバーに立ちよりその後のブラジルでのリサイタルでの成功、満場の拍手を貰いアンコールでの曲、ナザレーの「オデオン」にスタンディング・オベーションだった。嬉しかったと書いていた。館野　泉は札幌でピアソラばかりのコンサート（アイスランドの女性とのトリオ）をやっていたが（2000年５月きたらホール）聴けなかった。今もって残念。手元の「ブエノスアイレスの四季－ピアソラ作品集」トリオは愛聴盤。最近廉価で再発の「ピアソラ＆ナザレー・ピアノ・デュオ」（水月恵美子）も良かった。ナザレーのオデオンも聴ける。ＣＤが60種も越えているという館野はフィンランドに縁のあるピアニストだが病を克服したエネルギッシュな風貌も好きである。

“くじけずに百歳の詩口ずさむ”

フィンランドのタンゴもいろいろ話題になったが、在職中の出張でヘルシンキはわずか３日間の滞在だったがストックマンのＣＤショップで一枚「TANGOJEMME PARTHAAT ＨＣＤ429 HELMI」、この地の著名な演奏家がずらりのオムニバスで記念の一枚になった。

“老眼になってようやく見える事”

タンゴとは少し遠いがピアニスト青柳いずみこの本に読み耽っている。「ピアニストは指先で考える」「音楽と文学の対位法」「モノ書きピアニストはお尻が痛い」「ピアニストが見たピアニスト」（文春、中公などの文庫）専門家の音楽観、奏法など楽しくまた辛辣にペンを走らせている。ついに「水のまなざし」小説集まで出版された。難しそうな専門のドビュシー論は手にしていないが。

小沼純一の「サウンド･エシックス」（平凡社新書）は音楽鑑賞への新しいアプローチを求めての一冊、岡田暁生の「音楽の聴き方」（中公新書）に「音楽を感じるということはとても難しく、感じて分かることは言葉にし難く、言葉に出来ることは感じるのが難しい」とあった。この２冊はタンゴを語るときにふっと過ることがある。

タンゴ・ピアノ・ソロの愛聴盤・ＣＤの幾つか

カルロス・ガルシア、オスバルド・タランティーノ、オラシオ・サルガン。そして古いタンゴ集で異色のアリエル・ラミレス。メキシコのエンリケ・チア。古いＬＰでリト・エスカルソなどはながら族にふさわしい。温泉ではないが掛け流し。最近の奏者ではニコラス・レデスマが気に入っている。エミリオ・デ・ラ・ペーニャやヘラルド・ガンディーニ（映像で）はスカパーのソロ・タンゴで出会った。

蟹江さんのこと （LA MIMADA）

蟹江丈夫さんのお名前を初めて目にしたのは雑誌「中南米音楽」の創刊号（1952年）で、そもそもはラジオの高橋忠雄さんの放送で雑誌発刊のはなしを聞いたためで当時はラテンアメリカ音楽の楽しみを感じ始めていた頃でタンゴにそれ程こっていた訳ではなかった。葉書のリクエストに親切な返事をいただいて嬉しかった。それには「今度貴君のリクエストをかけましょう」などと書かれていたので舞い上がったものだった。創刊号には蟹江さんの「私の好きなロベルト・フィルポ四重奏団のレコード」とあって、当時のラジオ番組のリズム・アワーは片やタンゴの高山正彦さん。この２つを楽しみに聴いていた。

小樽市祝津海岸遠望

雑誌の方では蟹江さんはその後の同誌の常連で新譜など買えないながらずっと読んでいた。後になって上京の機会にSEMIのレコード・コンサートやすいよう会の菅平などでお会いすることがあって楽しい独特の話術に引

き込まれた。この頃の情報誌では「ミュージック・ライフ」で高山正彦さんの記事がよかった。

蟹江さんのスタンスはポルテニア音楽全般に目を向け、各地の愛好会や同好会にも更なる活動をどう進めて行ったらよいのか、折に触れて戴いた手紙にはいろいろなアイデアが書かれていた。

’99年５月29～30日の当会と日本タンゴ・アカデミーとの札幌でのイベントには初めての北海道旅行で大切なＳＰ原盤を持って来られ、懐かしい蟹江節と共に聴かせて戴いた。

’11年の月例では前記懇親会の席のカナロのPOR ESA MUJER DE…CARNAVAL、YO TE ADORO BANDONEÓN、ドナートのLA MIMADAを映像と共に偲んだ。

“千年の昔に学ぶ防波堤”

終わりに

’11年３月11日の東日本大震災には心からお見舞いを申し上げます。早くの復興と生活の安定を願って居ます。(2011.11.28記)

次は東京都の三浦幸三さんにバトンを渡します。よろしくお願いします。

小樽運河にて

―ＣＤ評―

俺のピアソラ／小松亮太

山本幸洋（東京）

これが本気の小松亮太である、そういうオーラが出ている久しぶりのタンゴ・アルバムである。ここ二作は変化球というか、日本という外国において、タンゴが軽音楽のトップにあったときの和製タンゴを現代的にリメイクしたアルバムで、そのリメイクのこだわりやユーモア、細部までスキのない緻密なサウンドづくりには“らしさ”があったのはいうまでもないが、小松の特長ともいえる怒気が感じられなかったのも事実である。

小松が一躍時の人となったのは、クラシック界から沸き上がった“ピアソラ・ブーム”のとき、すなわちアストル・ピアソラ没後５年となる1997～98年である。本人は大いに不本意であろうが、ブームの火付け役となったサントリー・ローヤルのデレビＣＭ「リベルタンゴ」のヨーヨー・マ、バンドを編成してワールド・ワイドでトリビュート・ツアーを敢行したギドン・クレーメル等に対し、アルゼンチン人ではない正統派モダン・タンゴの演奏家としてブレイクした。必ずしもピアソラ限定ではないレパートリーなのだが、例えばデビュー・アルバム『A. ピアソラ～ブエノス・アイレスの夏』には名曲「想いのとどく日」や、オスバルド・ベリンジエリが偏愛するモダン編「恋人もなく」が収録されている。そして10余年を経た今、『俺のピアソラ』という自信に満ちたタイトルで再びピアソラ曲集に取り組むにあたり、何か節目めいたもの、原点回帰的な何かを感じるのである。なぜか２曲はピアソラ曲でないという一致も含めて。

ＣＤにはいつもどおり小松自身による曲解説があるので、本稿では私が感じたことを気ままに述べてみたい。

◆「ブエノスアイレスの夏」

記念すべきデビュー・アルバムではピアソラゆかりのミュージシャンのサポートを得ていたが、ここではエレキ・ベース＆ドラムスを含みストリングスを拡張したノネットでの演奏で。小松は自身の解説で再レコーディングの理由を「インターネットの動画サイトで素晴らしいアレンジを見つけてしまったから」と説明している。

◆「リベルタンゴ」featuring SHANTI

アルバム全体としては息抜きのような存在。SHANTIは前作でシャンソン風タンゴ「小雨降る径」をうたっており、本テイクでも懐かしいような近未来なようなポップ感をもたらした。小松版リベルタンゴは８種類もあるそうだが､打ち込みを採用したアレンジはテレビＣＭタイアップ（またか！と言われそうだが）でもすればヒットしそうなカンジ。

◆「革命家」

ピアソラの『レジーナ劇場』ライヴで知られる難曲。そのライヴをほぼ踏襲したスリルある演奏。

◆「コラール」

トローバ盤『アディオス･ノニーノ』では､エレキ･ギターの憂いトーンが印象的なスロウ･ナンバー。個人的に大好きな曲である。この曲と「革命家」は完コピと言ってよく、プレイヤーの確かな技量とセンス、フィーリングを証明するものである。

◆「五重奏のためのコンチェルト 」

ピアソラ新旧キンテート名演に対し、真っ向から臨んだ小松バンド迫真のパフォーマンス。本家に肉薄する濃さと言えるだろう。このダブルなリズム感は60年代キンテートに倣ったものだろうか。

◆「ヴィブラフォニシモ」featuring SINSKE

ギャリー・バートンとの共演盤『ザ・ニュー・タンゴ』に収録されていた、これまた難曲。オリジナルには零下の冷たさがあるが、この演奏には温かみがある。

◆「エル・アランケ」

言うまでもなく、モダン･タンゴの開祖フリオ･デ･カロの曲だからアルバム･タイトルに反している。おまけに演奏スタイルは、ウンパ・ウンパすなわちオラシオ・サルガン～キンテート・レアルだからこれもピアソラとは言えない。でも単なるご都合主義というレベルではなく、この演奏内容で世に問いたかったのだろうと思わせる快演だ。

◆「アディオス・ノニーノ」

本来、ピアソラの代表曲として最も知られていなくてはならない名曲ゆえに、小松としてもこれで６回目の収録。ゆえに本盤ではバンドネオン・ソロなのだという。

◆「わが街へのノクターン」featuring 阿保郁夫

これは嬉しい。アニーバル・トロイロの歌のタンゴを阿保郁夫が歌っている。声に刻まれた年輪はロベルト・ゴジェネチェを思わせつつ、紛うことない阿保の声である。

◆「パラ・ルシルセ（輝くばかり）」

ピアソラの出世作をバンドネオン３、ヴァイオリン３を含む10人編成のオルケスタで。「夏」にも言えるが、ストリングスが厚いほど響きに狂気を孕むような印象だ。

◆「ピアソラ・メドレー」

ホセー・リベルテーラのアレンジで。これも全曲と同じオルケスタによる演奏で、ダイナミックに駆け上がるような演奏だ。

◆「記憶の回廊 」（Bonus track）

小松のオリジナル。ＮＨＫ「北斎 幻の海～パリで発見！」のテーマ曲で、ホーンも入ったオーケストラでの演奏。

それにしても『俺のピアソラ』とはいかしたタイトルである。ベスト盤を除いたアルバムを並べて、小松のレコーディング歴を振り返ってみよう。

1	ブエノスアイレスの夏	SICC345	1998
	アクア・ベルデ	SRCR2376：ミニ・アルバム	1999
	ラビリンス	SRCR2405：ＴＶサントラ	1999
2	来るべきもの	SRCR2465	1999
3	ラ・トランペーラ～うそつき女	SRCR2584	2001

4	ライヴ・イン・Tokyo2002	SICC88	2002
5	タンゴローグ	SICC196	2004
6	バンドネオン・ダイアリー	SICC10029	2005
	下弦の月	SICL170：ＴＶテーマ曲	2007
7	Collaborations!	SICC815	2008
8	碧空～昭和タンゴ・プレイバック	SICC1185	2009
9	小さな喫茶店～東京タンゴ・カフェ	SICC1412	2010
10	俺のピアソラ	SICC-1477	2011

各々について触れるスペースはないし、すでにお馴染みのことと思うが、小松はキンテートやオルケスタを中心に様々な編成で通常の演奏活動やコンスタントなレコーディングをしてきているし、『Collaborations!』のように作曲にも取り組んでいる。ただ、一枚のアルバムで編成を様々に代えるのは単発セッションのようで、どうも散漫に思えるのも事実だ。固定メンバーによる、あ･うんの呼吸で、ライヴ感覚溢れる快作を期待したい。

最後にソニー・ミュージックへ。小松の音楽はタンゴなので、ショップにはタンゴ売り場に並べるよう働きかけてほしい。それと、小松のタンゴの魅力を伝えるには、こ綺麗なレコーディングではなく、アタック音やきしみも生のまま録ってほしい。私たちは小松のライヴの音を知っているし、それが私たちが好きな小松の音なのである。

「俺のピアソラ」について

小松亮太

キンテート・レアルやシリアコ・オルティスやゴビを聴きながらふと考える。「彼ら」はこういったタンゴたちに、これからも知らん顔のままなのだろうか？

その疑問が僕に「俺のピアソラ」を作らせたと言っていい。生誕と没後の記念の年に「タンゴ演奏家によるピアソラ」という当然と言えば当然すぎるアルバムを作らねばという使命感…いや危機感に駆られたのだ。

昨年の僕が出演した約７０公演のうち１４公演はキンテートで、国内各地と香港を廻った。「俺のピアソラ」からのレパートリーが中心だったが、僕は敢えてアンコールで「ラ・クンパルシータ」を毎回演奏した。所謂モダンタンゴ的な要素の全くない、昔ながらの普通な編曲のクンパルをである。

勿論これは「クンパル良ければすべて良し」というマンネリズムへの迎合ではなく「ピアソラの音楽はタンゴの神が生んだものなのだ」ということを改めてピアソラファンたちに印象づける演出であり、さらに他ジャンルの音楽家に向けた「ラ・クンパルシータをナメるな！」というメッセージでもあったのだ。

とかくタンゴファンによって語られがちな「ピアソラはタンゴではない」という頑迷な原理主義と、他の音楽ジャンルの人々が口にせずとも匂わせる「ピアソラの芸術にタンゴごときは無関係」という迂闊な差別意識。ピアソラ嫌いとピアソラ好きという真っ向から対立するはずの両者は、タンゴとピアソラを切り離したくて仕方がない、という意向だけは皮肉にも一致するようだ。

実のところ多くのクラシックやジャズの音楽家や批評家が「ピアソラは退屈なダンスの伴奏

を進化させた革命児だ」という類いのキャッチフレーズを鵜呑みにしてしまっている。革命児の作品が秀逸であるとすれば、革命以前のタンゴは未発達な俗曲に過ぎないのだろう、という強固な先入観。いやそれどころか社交ダンスの伴奏とアルゼンチンタンゴを混同している音楽家とて決して少なくはない。

ピアソラブーム初期ならいざ知らず、あれから１５年が経ったのだ。仮にもプロの音楽家が「ボエドなんて何が面白いの？プグリエーセって誰？とにかく今すぐアディオス・ノニーノが弾きたい！」というレベルから脱却できないのは歯痒い。

リベルタンゴで軽く遊ぶのならともかく、アディオス・ノニーノやブエノスアイレスの冬といった落とし穴だらけの難曲をタンゴの基本も知らずに即席で弾くことは、英語を全く話せない人が片仮名でビートルズを歌おうとするのに等しい。ピアノやコントラバスの独特なリズム奏法は実際どうやるの？バイオリンのメロディーの処理は？あらゆる手掛かりは「単純でどれも同じに聴こえる」らしい伝統的タンゴにあり、という僕の進言を信じる人は少ない。

ピアソラ作品を採り上げたコンサートや録音が世界中で行われることは素晴らしいが、「ピアソラ大好き人間」がタンゴ要素ゼロ％のアディオス・ノニーノをこの先もずっと広め続けるのだとしたら、その姿は「ピアソラはタンゴじゃないよ」という口さがない決め台詞を思慮なく肯定しているようにも見えて薄ら寒いばかりだ。

タンゴ原理主義とピアソラ至上主義の双方が冒してしまったジャンル差別と時代への偏見は、偉大なピアソラにも、彼を生んだ偉大なタンゴ世界にも深い傷をつけてしまった。このふたつの傷を縫い合わせることが自分に出来るのかどうか、今の僕にはわからない。

以上

オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ

第50回コンサートを聴いて

大澤 寛

（文中敬称略）

とりわけ時間の経つのが速く感じられる今年の暮れの26日夕方から、早稲田大学大隈講堂でオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダの第50回公演が行われた。講堂受付には手伝う４年生たちの姿も見え、音響設営にはプロとして活躍中の卒業生の姿もあった。短い休憩を２回入れて実質演奏は２時間ほどの３部構成。実に爽やかな時間があっという間に流れた。プログラムの曲目紹介が各自の名入りでライナーノート風になっていて、司会が解説に時間を取られないので小気味良いテンポで演奏が続く。

第１部は大編成で７曲

１）Al maestro con nostalgia　２）Felicia
３）El choclo　４）Sin rumbo fijo
５）Buenos Aires –Tokio　６）La Yumba
７）Inspiración

ピアノとコントラバス各１　バンドネオン３－４　バイオリン６　という編成。１曲目はBn が３人でスタート。立ち上がりは少し弦（Vn）が勝っているかなという印象を受けたが、次第にBn が音を出し始めて快調な仕上がりになる。

古典曲を早い時期から取り上げて高齢！の聴衆を満足させたのも心憎い演出。意図的だったのか好きな曲を弾いたらこういうラインナップになったのか。４曲目にワルツ Sin rumbo fijo を入れて気分を入れ換えると次の Buenos Aires – Tokio は“江戸情緒”？を演出した編曲が活かされた好演。

ピアノとコントラバスではそれぞれ３人のプレーヤーがいて曲ごとに時々交替。バンドネオンも３になったり４になったりするが、交替のスピードが早くて心地よい。裏方を務める仲間との連携がしっかりしていることが判る。

そして第１部のラスト曲には友情出演のダンスが入って華やかに終了。メンバー紹介が行われた。Bn 5　Pf 4　Vn 8　Vc 1　Cb 3（このうち休部中が４名）という顔ぶれ。しかし全員で“音合わせ”が出来る時間を作るのはとても難しいという。ピアノとバイオリンは別にして、バンドネオンやコントラバスを年少時から習う人たちは増えているのだろうか？大学で入部してから始めたというケースが殆どなのではないのかと思う。

第２部は小編成での６曲

１）Los sueños　２）Il pleut sur la route　３）Morena
４）Verano porteño　５）Chau, París　６）Adiós Nonino

立ち上がりはピアソラの Los sueños から。Vn の赤松丈寛がBajo に持ち替えての4to. 次いでトリオ（Pf Vn Bn）で“小雨降る径”を演ってオールドファンの心を沸かせる。Morena ではオール女性の4to. に十河瑠璃がタンバリンで応援。Verano porteño の編曲は２年生が担当した由。かなり長い演奏だが飽きさせない。Chau, París では五十嵐弘典が２曲連続でBajo を受け持つ。そして小編成での最後もピアソラの Adiós Nonino で締めくくる。

第３部は７曲

１）Cabulero　２）Café Domínguez　３）A Evaristo Carriego
４）La espuela　５）Comme il faut　６）Contratiempo
７）Nostálgico

バンドネオンを３人で受け持った曲が多かったが、大編成に戻って明らかに“ノッて”来る。Café Domínguez ではBnが４人でダンスが２組になる。そしてA Evaristo Carriego からミロンガのLa espuela を挟んで ダンスが入ってのComme il faut までの古典曲の連続は圧巻。“ブラボー”の声が飛ぶ。６曲目の Contratiempo ではBn が３人に戻ったがこれも熱演。そしてラストの Nostálgico に入る前に短いが心の籠った司会の挨拶があった。東北大災害で１学期の開始が遅れ、部員の招集にも練習時間の確保にも不安が大きかった中でなんとか練習を重ねてここまで来たという。「あと１曲になりました」と告げて司会役兼務の門田絵美子（３年 Pf ）が絶句。“もっと泣いていいよ”の想いを乗せた大拍手にすぐさま気を取り直したのは立派。

全プログラムが終わったところで、これで部活動を終了する３年生と来春卒業の鄭ナリに花束贈呈。拍手に包まれてアンコールにすっと入る。曲はDecarísimo、そして大歓声に応えてのグラン・フィナーレは La cumparsita. ダンスは３カップル全員（Toshi & Aiko, Mihoko & Toshio, Aya & Yuji）が登場。楽器編成はコントラバスを３台並べた豪華なもの。いつどこで聴いても生演奏はいいものだという思いを深くする。

来年も新しいメンバーを加えたタンゴ・ワセダを聴かせて貰えるだろう。今回卒部・卒業する集団からも将来プロが育つのだろうか？　プロにならなくても良いから、就職してからも家庭を持ったあとでも、どうかタンゴから離れずにいて欲しい。

（2011/12/28 記）

原稿募集

タンゴに関する随想・研究・資料・書評・コンサート評など、何でも結構ですから機関誌に執筆を検討されている方は是非とも編集部にご相談下さい。ご希望の執筆内容により編集部の判断により「タンゲアンド･エン･ハポン」または「タンゴランディア」のどちらかを推奨します。「タンゲアンド･エン･ハポン」の次号の締め切りは５月末日、「タンゴランディア」は３月末日となります。なお、原稿（図・画像を含む）は可能な限り電子化して電子メールの添付ファイルまたは外部メモリーの形で送ってください。やむを得ず手書き原稿になる場合は、編集部で電子化する作業が必要ですので、早めに送っていただくことをお願いします。但し、あまりに長大な原稿や自己宣伝に終始する原稿は掲載できないことがあります。

本誌に掲載の見解その他は、あくまでも執筆者個人のものであり、必ずしも日本タンゴ･アカデミーを代表するものではありません。掲載にあたっては執筆者の文章を（スペイン語のカタカナ表記も含めて）全面的に尊重しています。また当会機関誌は会員全員の参加による同人誌的性格を持っていますので執筆者には特に原稿料というものはお支払いしておりません。

編集後記

タンゲアンド・エン・ハポン第２９号をお届けします。今号はフランシスコ・カナロ来日５０周年記念特集号です。フランシスコ・カナロの来日から早や半世紀が過ぎ、当時のことを語れる人も少なくなりました。今後はこうした企画も次第に困難になると思われます。不満足な点は多々あるとは思いますが、ご愛読いただければ幸いです。

（齋藤　冨士郎）

日本タンゴ･アカデミー主機関誌　TANGUEANDO EN JAPON

第２９号　２０１２年１月発行（非売品）

発　行：日本タンゴ･アカデミー
〒１５６－００４４　東京都世田谷区赤堤２－３２－１４－１０４
飯塚　久夫方
TEL/FAX 03-3324-1989　iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編集部：齋藤　冨士郎（編集長）
〒１９５－００７２　東京都町田市金井６－１７－２
TEL/FAX 042-736-7445　f-saito@mqj.biglobe.ne.jp

島﨑　長次郎、大澤　寛、弓田　綾子、佐藤　進

กใค